

令和元年度

実 践 集 録

主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組

(3年次/3年計画)

高知県立日高特別支援学校

はじめに

来年度よりいよいよ小学部において特別支援学校小学部学習指導要領が完全実施となります。中学部は令和3年度から、高等部は令和4年度から学年進行で完全実施となっていきます。新しい学習指導要領では、育成すべき資質・能力に関して3つの柱「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」が示され、児童生徒の学習状況の評価もこの3つの柱に対応した3観点「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」で示されています。

私たち教職員は、子どもたちの資質・能力を育てていくために、習得・活用などの学習過程全体を見渡しながら、学習指導を行っていく必要があります。また、その指導によって育まれる思考力・判断力・表現力等をしっかりと認識し、子どもたちの変化・成長等を踏まえつつ指導方法を絶えずチェックし、改善していくことが求められています。

本校では、一昨年度から「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」を校内研究の統一テーマとして3年間の実践研究に取り組んできました。今年度がそのまとめの年となりました。この3年間、本校における「主体的学びとは」「対話的学びとは」「深い学びとは」を整理しながら、改めて知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」はどうあるべきかを明らかにしていく取組を展開してきました。校長が授業者を指名して取り組んだ研究授業、また、各学部や学年において授業者を決め、年間1回以上実施した公開授業がその取組になります。そして、この取組に際して、管理職、各学部主事、研究部長等のメンバーで「授業改善チーム」を編成し、研究授業を参観し、授業後の授業研究協議において、児童生徒のキャリア発達を促す「主体的・対話的深い学び」を意識した授業が展開されていたかについて評価・検討を行ってきました。また、昨年度、群馬大学教授 霜田浩信 先生のご助言をいただきながら作成した「学習過程分析表」を、前年度末の反省に基づき「注目してほしい学習活動」や「注目してほしい児童生徒の評価」の項目を新たに記載するなどの改良を加えて、より活用・評価しやすいものとしてきました。「学習過程分析表」につきましては、今年度末の反省を受けて、さらに改善を図っていくこととしています。

子どもたちの将来の自立や社会参加に向けて、子どもたちのキャリア発達を一步步着実に促していくためには、「何ができるようになるのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を意識した授業づくり・授業改善が必要です。私たち教職員は、子どもたち一人一人の「自ら考え、自ら判断し、自ら行動できる力」を育てていくために、自らの専門性を高め、「チーム日高」として様々な教育課題に取り組む、本校の特別支援教育のますますの充実に向けて精進してまいります。

最後になりましたが、校内研修において貴重なご指導、ご助言をいただいた、群馬大学教授 霜田浩信 先生をはじめ、関係の皆さまに厚くお礼申し上げますとともに、この実践集録の編集を担当された研究部の先生方のご労苦に深く感謝申し上げます。

令和2年3月

高知県立日高特別支援学校長 利岡 徳重

《目 次》

はじめに

I	本年度の教育	1
II	校内研究の取組	3
III	小学部の研究	7
	A組：井上潤、金平もと、佐伯一美、鈴木晴乃、山部三規子	
	B組：刈谷亜希、立間好枝、阿部果穂	
	C組：中村明美、藤原陽色	
	D組：上田瑞里、小島愛子、大元勝平、吉田暁	
	E組：西原雄公、阪本久世、北川千裕	
IV	中学部の研究	35
	1年：宮川真由、福川綾、永野千沙、高橋謙吾、武内薫子、中川利彦、池上智子、山形和江	
	2年：長尾哲也、筒井啓子、黒木彰子、日向晴彦	
	3年：明神靖彦、井上さくら、森野知佳、井澤陽子、角田勝藤田和佐子	
V	高等部の研究	60
	1年：伊與田幸請、鎮西知代、宮中浩充、坂本綾子、清家倫夫、矢野知佐	
	2年：小川佐帆、長尾和隆、前田紀生、入野律、前田美奈、葛岡政彦、藤野陽子、濱渦崇弘 増井孝弘、中川真希	
	3年：小松文、高橋めぐみ、岡崎幸代、長野いつみ、三浦怜士、河路恭太、前田朝子 大原康司、大石真也、隅田晋成、青山由美子 清岡隆子、大川三千恵、平地正幸、島俊彦、石見聡貴、西村健太	
VI	寄宿舎の研究	86
	橋本章、片岡和砂、門田正子、川口加代、河野紳、コバーン和美、近澤一樹、中司朱美 松本一幸、山岡あゆみ、澤田暁、田中秀典、中嶋志乃、西野嘉晃、藤岡正子、松本有美子 山端治奈、山中真奈美、大野淳子、岡本雅代、勝原真紀、竹池恵子、竹内由紀、中村智美 濱田詩野、渡邊可奈、佐藤証、内川隆一、西川瑞輝、堀川廣美、櫻木香織	
VII	本年度の研究のまとめ	103

I 本年度の教育

1 校訓

明るく、正しく、たくましく

2 教育方針

子どもの学ぶ楽しさや、生きる喜びを育てる教育を通して、教育目標を達成する。

3 教育目標

- (1) 児童生徒一人一人の能力・適性に応じた教育活動を充実させる。
- (2) 児童生徒の自立する力をつけ、社会参加に向けての適応力を高める。
- (3) 家庭や地域、関係機関と連携し、安全で安心できる学校づくりを進める。

4 目指す学校像

- 子どもたちが楽しく学べる学校
- 保護者が安心して子どもを任せられる学校
- 地域にとってなくてはならない存在の学校
- 教職員一人一人が力を発揮できる学校

5 重点取組項目と具体的方策

- (1) 専門性の向上 <主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業改善>
 - ア 「主体的、対話的で深い学び」の視点に基づいた研究授業を年間2回実施するとともに、公開授業を各学年、年間1回以上実施する。
 - イ 「授業改善チーム」を編制し、研究授業及び公開授業の参観、授業後の授業研究協議を行うことで、授業づくり・授業改善に取り組む。
 - ウ 学習過程分析表等の活用とその改善に取り組む。
 - エ 外部専門家と連携し、専門的な知識・技能の向上を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の検証を行う。
- (2) キャリア教育の充実 <キャリア教育の推進及び進路指導の充実>
 - ア キャリア発達段階表や就労アセスメントシートを活用し、児童生徒のより適切な実態把握及び評価を行い、系統性のある一貫した指導につなげていく。
 - イ 小学部段階から各地域の福祉サービスに関する情報を収集するとともに、保護者への情報提供を積極的に行い、保護者と情報共有しながら進路に関する意識を高める。
 - ウ 構築したアフターケア体制を関係機関との連携により推進し、本校独自スタイルとして定着させる。
 - エ 進路学習会の計画的実施及び生徒の就労に対する意識・意欲を高めるための生徒による各事業所等の施設見学を実施する。
- (3) 障害者スポーツ・生涯スポーツの推進
 - ア 体育の授業に障害者スポーツの競技種目を積極的に導入し、生涯スポーツへの興味・関心を高める。

- イ 地域の総合型スポーツクラブとの連携した取組を進め、様々な競技を知ることで、地域の総合型スポーツクラブ等の利用につなげていく。
 - ウ 保護者や関係者への理解啓発を行い、休日における「総合型地域スポーツクラブ」の利用を促進する。
 - エ 各種運動、スポーツ大会に積極的に参加し、社会性や豊かな人間性を育み、共生社会の実現を目指す。
- (4) 働き方改革
- ア 各分掌部において、業務の平準化を意識した業務分担を行う。
 - イ 各分掌部・委員会での業務内容の点検を行い、改善に努める。
 - ウ 学校行事等の企画・実施に当たり、複数の部署が連携して取り組むなどして、業務の軽減を図る。
 - エ 夏期一斉学校閉庁日の完全実施に向けて、準備を進める。

II 校内研究の取組

【令和元年度の研究テーマ】

「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」（3年次/3年計画）

1 平成30年度までの研究成果と課題

平成29年4月に特別支援学校幼稚部及び小学部・中学部における新学習指導要領が公示され、平成31年2月には特別支援学校高等部における新学習指導要領が公示された。

こうした新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」に本校では注目し、「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」をテーマに設定し、研究に取り組んできた。

初年度となる平成29年度には、外部講師による講義を交えながら、各学部による実践を通して基礎的な理解を深めた。

計画2年目となった昨年度には「主体的・対話的で深い学び」を授業の中にどのように位置づけていくのか整理し、以後の授業改善につなげるため「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程分析表」を作成した。

この分析表を、各学部の研究授業で活用することを通して、日高特別支援学校としてどのように「主体的・対話的で深い学び」の視点から学習過程を改善し、日々の授業につなげていくのか学校全体で共通理解を深めることができた。

しかし一方で、課題についても多くの意見が出され、特に分析表をより効果的に活用するために各項目を改善していく必要性や、授業評価にもつながるような活用の在り方を検討する必要性等に関する意見が多く見られた。

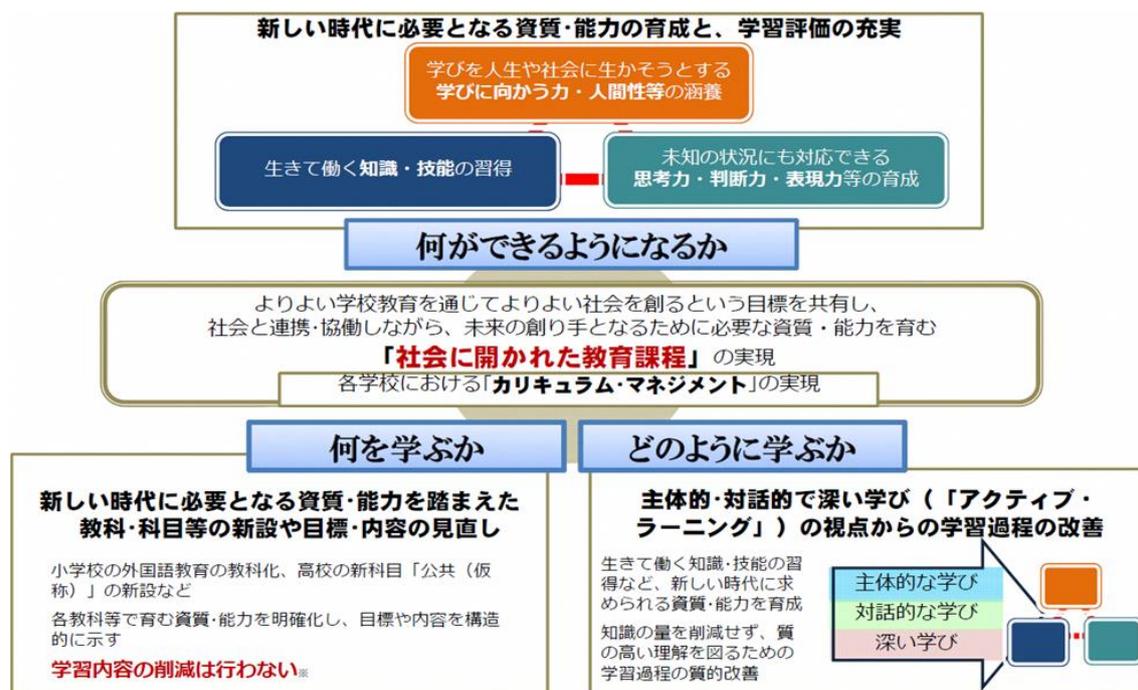


図1 新学習指導要領改訂の方向性「育成すべき資質・能力の三つの柱」（新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施—文部科学省 HP）

2 令和元年度の校内研究方針

(1) 校内研究の目的

「日々の学習活動に『主体的・対話的で深い学び』の視点を効果的に位置付け、授業改善につなげることにより、児童生徒が豊かな学習活動を展開できる」との仮説をもとに、授業分析・評価ツールの作成・改善等を通して、教職員の専門性の向上を図る。

(2) 取組内容

ア 学部・寄宿舍ごとの研究テーマ設定

昨年度と同様に全校テーマを受けて、学部・寄宿舍ごとに以下のようにテーマを設定し、研究活動に取り組む。

- ・小学部：主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり～評価を生かした振り返り・授業改善～
- ・中学部：主体的・対話的に学び、生活に必要な力を身に付ける取組
- ・高等部：主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習
- ・寄宿舍：主体的・対話的で深い関わりの視点を生かした仲間づくり

イ 校内研修会及び学部研の実施

年間を通して、表1のように校内研修会及び学部研を計画し研究活動を進める。

表1 校内研修会及び学部研 年間計画

月	日	研修内容
4	中旬	学部研究テーマ等の協議
5	30	学部・寄宿舍ごとのテーマ・研修計画締切
6	7	第1回校内研修会 講演会「学習過程分析表に基づく授業改善」 講師：群馬大学 霜田浩信 教授
7	23	第2回校内研修会 人権研修会 ・講演「ペアレントトレーニングのすすめ」 講師：高知県療育福祉センター 心理判定士 加納 真理 氏 ・講演「いじめ問題への対応」 講師：元高知地方法務局四万十市局長 片岡 義久 氏、土佐市人権擁護委員
8	26	第3回校内研修会 特別支援学校教育課程研究集会 高知県教育委員会
11	29	第4回校内研修会 全校授業研：中学部 講師：群馬大学 霜田浩信 教授
2	28	第5回校内研修会 実践研究発表会 講師：群馬大学 霜田浩信 教授

※学部・寄宿舍ごとの研究日は月1回を目途に実施。詳細は各部署の研究経過・研究計画参照。

ウ 研究・公開授業の実施

各学部で研究授業（年2回）及び公開授業（年1回）を実施する。なお、研究授業を担当する教員は管理職との協議により決定する。

研究・公開授業では、学習指導案において学習過程分析表を活用するとともに、学部ごとに事後協議を実施し、以後の授業改善につなげていく。

エ 学習過程分析表の改善

研究・公開授業で活用する学習過程分析表について改善を行い、表2の様式を作成した。

改善にあたっては、昨年度の実践集録において、各学部から出された意見をもとに項目追加及び内容の見直しを行った。

また、事後協議における話し合いでテーマの焦点化及び授業評価につながるよう「注目してほしい学習活動」、「注目してほしい児童生徒の評価」の欄を新たに追加した。

オ 事後協議の実施

先に述べた研究・公開授業で事後協議を実施し、教職員間の共通理解を深めるとともに以後の授業改善につなげていく。

実施にあたっては、第1回校内研修会において講師である群馬大学の霜田浩信教授より指導・助言いただいた図2の内容をもとに、小学部から高等部まで基本的な流れを統一して取り組む。

日高特別支援学校における授業研究は？

学 習 活 動	I 主体的な学び	学んでいた様子	つまづいていた様子	感想
【導入】	1 日直がはじめのあいさつをする。	ウ		オ
	2 お好み焼きを作ることを知る。			
【展開】	3 お好み焼き作りについて知る ・お好み焼き作りの流れを確認する。 ・材料と担当する役割を確認する。	ア	ウ	オ
	4 野菜を切り、生地を作る。 ・手順書をもらう。 ・材料と道具を準備する。 ・材料の準備に取り組む。 ・できた材料をT1に渡し、使った道具を片付ける。 ・机を拭く。	ウ	イ	オ
【まとめ】	5 できた材料の確認をする。	ア	ウ	オ
	6 具材を混ぜる。	ウ	エ	オ
【まとめ】	7 お好み焼きを焼く。 ・型に流し入れ、ひっくり返す。 ・お皿にのせ、ソースと鰹節をかける。	ア	エ	オ
	8 お好み焼きを食べる。	ウ	エ	オ
【まとめ】	9 食べ終わった皿を片付ける。	ア	エ	オ
	10 日直が終わりのあいさつをする。	ア	エ	オ
	II 対話的な学び			
	①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。			
	②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。			
	③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。			
	④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。			
	⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。			
	III 深い学び			
	学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。			

図2 事後協議の在り方について（令和元年度第1回校内研修会霜田先生講義資料より抜粋）

Ⅲ 小学部の研究

小学部テーマ「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり

～評価を生かした振り返り～

1 はじめに

昨年度、本学部では研究テーマを「子どもの主体的・対話的で深い学びをつくる授業づくり」と設定し、生活単元学習での研究・実践を推進した。その方法として各クラス年2回の公開授業と授業の様子を撮影したビデオや学習過程分析表を活用した事後協議を行った。その結果「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点から授業者の手立て、他の学習や家庭における児童の変容を考察することができた。その一方で、授業における児童の変容や評価の在り方をどのように捉えていくのか課題が残った。

そこで本年度の研究テーマを「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり～評価を生かした振り返り～」と設定し、生活単元学習で取り組むことにした。昨年度の反省により改善された学習過程分析表を用いて授業づくりや事後協議を行い、授業改善に取り組んでいく。

2 研究経過

(1) 研究内容

- ア 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点から、目標を達成するための手立てを検討する。
- イ 手立てが有効であったか、目標が達成できたか等の分析を行い、以後の授業改善につなげる。

(2) 研究方法

- ア 各クラス年1回の公開授業又は年2回の研究授業を行う。
- イ 研究及び公開授業をうけ、授業風景等の動画を活用した事後協議を実施する。
- ウ 学習過程分析表の注目してほしい学習活動や児童生徒の評価等の欄を活用し、事後における検討ポイントを明確化する。
- エ 事後協議では、学習過程分析表中の注目してほしい児童を中心に、手立てが有効であったか、目標が達成されたか検討・評価する。
- オ 実践集録の作成を通して日々の授業実践につながる研究・公開授業、事後協議、学習過程分析表等の検討をすすめる。

(3) 研究計画

ほぼ月1回設定されている学部研を研究の柱とし、各クラスの公開授業や研究協議、実践集録の作成を行った。なお、研究授業は事情により実施していない。

月日	研修内容
5/10	・本年度の研究テーマの検討
6/3	・年間の研究計画の確認 ・各クラスの授業者、授業日の確認
6/21	・D組公開授業研究協議
7/12	・B組公開授業研究協議

9/10	・クラス検討
11/18	・A組公開授業研究協議
11/26	・C、E組公開授業研究協議
12/3	・実践集録について
1/17	・実践集録原稿読み合わせ・検討
2/7	・本年度の反省並びに来年度の方向性の検討
3/4	・児童の実態把握並びに引き継ぎ資料として「キャリア発達段階表(2017)」「新しい教育課程と学習活動Q&A」「高知大学附属特別支援学校 成長の記録」を活用

3 研究事例

(1) 公開授業 1

ア 3年生における取組

(ア) 取組にあたり

本学級は、小学部3年生の女子1名と男子2名で構成されており、そのうち2名は自閉症を併せ有している。児童3名を以下、A、B、C児と表記する。また、医療的ケアが必要な児童と耳の聞こえが難しい児童がおり、3名の障害の実態には幅がある。コミュニケーション面では、全員発語はないが、身近な日常の場面では、繰り返しの中で簡単な声掛けに応じることができる。生活全般に関して支援が必要な児童、写真カードを指差したり、教師の手を引いたりして要求する児童、ジェスチャーや周りの状況を見て活動できる児童がいる。また、見通しをもちづらい場面などで不安定になることも多いため、1日のスケジュールをイラストカードなどの視覚支援を受けて活動している。

昨年度は生活単元学習で遊びの活動を中心に取り組んだ。児童は、遊具遊びなど体を動かす活動は好きで、大人からの働きかけで遊ぶことができるが、個々で好きな遊びをする平行遊びの段階であり、自ら友達と関わることは少ない。日常生活の場面では友達を手招きしたり、関わりを求めて近づいたり、友達の様子を見たりするなど友達同士の関わりも見られ始めている。しかし、遊びなどの中で教師に要求を伝えること、友達と一緒に遊ぶ、交代するなど関わりながら活動すること、見通しをもって自分でできることを増やしていくことなどの課題を確認した。

そこで本年度の生活単元学習では、年間を通して遊びに限定しないで、制作活動や調理、畑の活動など、いろいろな体験を通して、自分でできることを増やし、友達や教師と関わって、集団での活動に取り組める児童になってほしいと考えた。

また、以下に取り上げるなつまつりについては、2年生まで出店した経験はないが、お店を見て回り、教師や保護者と一緒にゲームをしたり、かき氷やおもちゃを買ったりした経験はあり、楽しんでいる様子が見られた。したがって、今年のなつまつりに出店することで、経験の幅を広げることが期待できると考えた。

(イ) 単元計画

本年度の生活単元学習の年間計画はaに、公開授業の「なつまつりにお店を出そう」の単元計画はbに記す。

a 生活単元学習の年間計画

	1学期				2学期				3学期			
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
生活単元学習	3年生スタート! ・遊具遊び ・公園遊び	おやつを作って食べよう① ・買い物 ・ポテトチップス調理	おもちゃを作って水遊びをしよう① ・夏祭に水族館出店		おもちゃを作って水遊びをしよう② ・魚すくい	おやつを作って食べよう② ・買い物 ・調理(ホットケーキ、大根もち、さつまいもスティック)	秋の作品を作ろう ・「ぞうくんの秋のさんぽ」大型絵本作り	作品展に行こう (変更)育てた大根を食べよう ・買い物 ・調理(手打あう)	冬の遊びをしよう ・風あげ ・こま回し ・カルタ ・けん玉	卒業生を送る会の準備をしよう ・出し物「さつまいも」 ・プレゼント作り お別れ遠足に行こう		
	カレンダー4	カレンダー5	カレンダー6	カレンダー7	カレンダー9	カレンダー10	カレンダー11	カレンダー12	カレンダー1	カレンダー2	カレンダー3	
	野菜を育てよう1(じゃが芋)			野菜を育てよう2(さつまい)		野菜を育てよう3(大根)						
	壁面制作1		交流相手に手紙		壁面制作2		敬老の手紙		壁面制作3		交流相手に手紙	
	防災学習1		防災学習2		防災学習3		防災学習4		防災学習5			

b 実践事例の単元計画

「なつまつりにお店を出そう」(全19時間)

第1次	「おもちゃを作って水遊びをしよう」	・・・5時間
第2次	「なつまつりのお店の準備をしよう」	・・・6時間(本時5, 6/6時間目)
第3次	「なつまつりの練習をしよう」	・・・4時間
第4次	「なつまつりの飾りつけをしよう」	・・・1時間
第5次	「なつまつりにお店を出そう」	・・・1時間
第6次	「なつまつりを振り返ろう」	・・・2時間

イ 実践事例

(ア) 単元名「なつまつりにお店を出そう」

(イ) 単元設定の理由

本単元では、自分たちで制作したおもちゃを使って水遊びを楽しむ活動から、その楽しい活動をお店屋さんにしてお客さんに来てもらい楽しんでもらおうとするなつまつりへの出店につなげていく。暑い時期、水は心地よいものであり、その感触を楽しもうとする姿が多く見られる。好きな活動の1つである水遊びや水遊びで使うおもちゃの制作では、児童の興味・関心が高く、意欲的に取り組み、気付きや要求の表出を促しやすい。準備をしたり、片付けたりの場面でも友達と一緒に見通しをもって取り組むことができると考えた。そして、なつまつりでは、「すいぞくかん」のお店を出す。魚すくいのゲームの道具や、看板、飾り付けなどを通して、みんなで作り上げていくことを意識しながら活動できると考えた。また、なつまつりに出店することで、お客さんにも楽しんでもらい、簡単な役割を通して、人と関わろうとすることをねらいとした。

(「知識・技能」)の観点では、おもちゃの制作を通して「形や色などに気付き、材料や用具などを使おうとするようにする。」ことを目標とする。(「思考力・判断力・表現力」)の観点では、水遊びの活動を通して「簡単な決まりのある遊びについて知ること。」を目標とする。(「学びに向かう力・人間性等」)の観点では、お店屋さんの簡単な役割を通して、「身の回りの人との関わり方に関心をもつこと。」を目標とする。

児童の主体的な活動を引き出すために、どのように活動するのか分かりやすいように、写真カードや手話を使って、視覚的に児童に働きかけ見通しをもちやすくする。本時では、作る魚は児童が自分でできる活動を取り入れて、折り紙をちぎったり、はさみで切ったりする活動ではタイムタイマーを提示して時間一杯取り組み、一人で作れた喜びが味わえるようにしていきたい。また、制作した魚のおもちゃを使って魚すくいを楽しんだり、友達や教師と関わろうとしたりすることができるように、必要に応じて声掛けや指差しの支援を行いながら少しずつ支援を減らしていき、できるだけ自分たちで活動できるように取り組んでいきたい。なつまつりに向けての練習の活動では、挨拶やお金のやりとり、道具を1つずつ渡すこと、景品を渡すことなど、それぞれの役割の練習やポスター作り、教室の飾りつけをしていく。振り返りの活動では、動画でなつまつりのお客さんの様子や自分の役割の様子を見て振り返る。そして、その売り上げで自分の好きなものを選んで買うという買い物学習を行う。さらに、人と関わることや役割を果たすことが楽しみにつながることを感じ、活動への意欲につなげていきたい。

また、単元全体を通して、水遊びの時の水着への着替えなどの生活動作について、順番など集団活動に必要な決まりを守ることについて、「貸して」、「ありがとう」、「ごめんなさい」などのコミュニケーションについて、総合的に取り扱って指導を進めたい。

(ウ) 本時における目標

○魚すくいの魚を作ることが分かり、ちぎったり、はさみで切ったりした折り紙をのり付けできる。(「知識・技能」)

○魚がなくなるまで魚すくいをすることができる。(「思考力・判断力・表現力」)

(エ) 学習活動の展開

■学習過程分析表

学 習 活 動		I 主体的な学び
【導入】	1 始まりの挨拶をする。	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	2 本時の学習内容を知る。	
	3 先生の話聞く。 ・魚の作り方を知る	
	4 道具の準備をする。 ・折り紙と魚のイラストの紙、はさみ、手順書の入ったかごを作業机に運ぶ。	
	5 魚を作る。	
【展開】	① 折り紙をちぎる (A児・B児) 折り紙を切る (C児) *①をタイマーが鳴るまで行う	②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援 (手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
	② のりをぬる	③興味・関心を高める題材及び活動設定
	③ はる	④興味関心を高める教材教具の活用
	6 片付けを行う。	II 対話的な学び
	7 振り返りをする。	①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
	8 終わりの挨拶をする。 ～休憩 (トイレ・水分補給)～	②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
	9 始まりの挨拶をする。	③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
	10 先生のはなし	④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
	11 お店屋さんごっこをする。 ・財布とカバンを受け取り、受付で百円を払い、おみやげをもらう。魚すくいのコーナーに行き、道具をもらう。	⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
	12 魚すくいをする。 ・自分のたらいの中に魚がなくなるまで行う	III 深い学び
【めいど】	13 大きなたらいで魚すくいをする。 ・すくった魚を大きなたらいに入れてみんなで魚すくいをする。	・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。
	14 片付けをする。	・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。
	15 終わりの挨拶をする。	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「5 魚を作る」① 折り紙をちぎる 折り紙を切る	折り紙をちぎる、はさみで切る活動は、一人のできる好きな活動である。タイムタイマーで見通しをもち、時間一杯取り組めるようにする。
展開「5 魚を作る」② のりをぬる ③ はる	どの児童も手元に注目することが難しいときがある。ちぎった折り紙の白い面にのりをつけて貼ることができるように、のりをつける面が間違っていたら、指差しや声掛けの支援を行うようにしたり、次の折り紙やイラストを取るときには、指差しの支援をする。

授業全体を通して、児童が見通しをもって主体的に活動ができるように、学習の流れをスケジュールで掲示し、終わったカードは外し、次の活動への見通しがもてるようにする。耳の聞こえが難しい児童

がいるため、始まりと終わりの挨拶で手話を見せたり、簡単な手話やジェスチャーを使って伝えたりするようにする。また、タイムタイマーを提示するなど視覚支援を行う。「3 せんせいのはなし」の中で、活動内容の手本をT1がやって見せ、これからの活動が分かるようにし、手順書を児童の見える位置に設置して、見通しをもって活動できるようにする。環境面では、一つの作業机で活動をすることで、友達の活動の様子を見ることができるようにし、共同でなつまつりの準備をしていくことを意識できるようにする。必要に応じて声掛けや指差しの支援を行うが、児童ができるだけ一人で活動できるように見守りを行い、できたことをその都度褒めて、活動への意欲につなげていきたい。



(写真1) 折り紙をちぎる、切る活動 (タイムタイマーで視覚支援を行う)



(写真2) ちぎったり、切ったりした折り紙を台紙に貼る活動 (次の工程に移る時は手順書で確認する)

(オ) 成果と課題

■注目してほしい児童生徒の評価 (※【目標達成度について】 A:十分達成できた。 B:ほぼ達成できた。 C:あまり達成できていない。 D:達成できていない。)

児童名	本時の評価規準 (抜粋)	学習活動に関する分析	目標達成度
A児	・ちぎった折り紙の白い面にのりをつけて貼れたか。	指差しや声掛けの支援は必要であるが、白い面にのりをつけて貼ることができていた。	B
C児	・印を見て、はさみで紙を切れたか。	取り掛かりは遅く準備された半分量しかできなかつたが、印の線に沿って切ろうとする様子が見られ、印を見て切ることができていた。	C

A児については、教師の指差しや声掛けの支援は必要であったが、白い面にのりをつけて貼ることができ、時間一杯活動することができた。C児については、はさみで紙を切ることへの取り掛かりに時間がかかり準備された半分量しかできなかつたが、切り始めると印を見て線に沿って切ろうとする様子が見られた。反省点としては、はさみで切ることの手本を示すなどの支援が必要であったと考える。また、ちぎったり切ったりした折り紙の大きさの見本や、折り紙のちぎり方、のりのつけ方など、正しい方法を示して、その方法で活動に取り組めるように支援していきたい。

事後協議では、一つの作業机で友達の様子が分かる環境設定ができていてよかったが、周りが気になる児童には、落ち着いて活動できる場所を用意すればよかったのではないかという意見を得た。また、作り方の説明や振り返りの時に、動画を活用して提示するなど、視覚支援における工夫についても参考意見が得られた。振り返りでは、カードを選択して児童が発表するようにするなど、自己評価へつなげていきたいと考える。一人でできる好きな内容を取り入れて、手元を見て活動できることが多かったの

で、今後も継続して児童の興味・関心を大切にした教材や活動を工夫して授業を展開したい。さらに、折り紙の色や魚のイラストを選ぶなど、自分で選択する活動を取り入れて、教師や友達とのコミュニケーションや簡単な役割を果たすことなど、社会性につながる目標を重点に置いて、今後の課題として取り組むことが確認できた。

ウ 3年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

生活単元学習「なつまつりにお店を出そう」では、なつまつりの道具作り、飾り作りなどに共同で取り組んだ。みんなと一緒に活動する中で、友達の様子を見て活動する場面が見られた。また、自分たちで作った道具（おもちゃ）を使ってみんなで時間一杯遊ぶことができた。初めてのなつまつりの出店では、それぞれの役割を教師と一緒に取り組むことができた。また、お金を大切に扱う経験ができ、その後の校外学習や買い物学習に生かすことができた。



(写真3) 作った道具（おもちゃ）で遊ぶ



(写真4) お店の飾りつけ



(写真5) 道具を渡す係



(写真6) 道具を並べる係



(写真7) 受付係

年間を通して、制作活動や調理、畑の活動などに取り組んだ。まず、制作の活動では、季節の壁面飾りや大型絵本などを共同で作った。簡単な工程に繰り返し取り組むことで、刷毛や筆で隙間なく塗ることや、見通しをもって時間一杯、友達と一緒に取り組むことができるようになり、共同作品を完成させることができた。大型絵本作りでは、完成した大型絵本を小学部のクリスマス会で発表するなど、自分たちの作品を使って楽しむ活動ができた。

調理の活動では、ホットケーキやさつまいもスティック、大根もち、おでん、手打ちうどんに取り組んだ。簡単な工程を繰り返すことで、声掛けや指差しの支援があれば、フライ返しを使ってひっくり返したり、おろし金を上手に扱って大根をすりおろしたりすることができるなど、見通しをもって一人でできる活動が増えてきている。包丁を教師と一緒に使うことも経験できた。収穫した野菜を使っておやつや昼食作りに取り組み、作ることを体験し、その過程を見ることで、どれもおいしく食べることができたのは、大きな成長であった。家庭からも、偏食が減ったといううれしい声が聞かれた。

畑の活動では、土を運んだり、種をまいたり、収穫したりすることを体験した。一輪車では、土が入

っていない時には、短い距離ならバランスをとって一人で押せるようになってきた。

今後もいろいろな活動に取り組むことを継続し、活動の中で選択したり、要求したりする場面を設定して、教師や友達とのコミュニケーションや簡単な役割を果たすことなどの力を伸ばし、日常で般化させることが課題である。学年を重ねるごとに新しい経験を積み、自分の役割を果たすことができる力をつけられるきめ細やかに分かりやすい指導を継続して行い、児童の成長へとつなげていきたい。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

「Ⅰ主体的な学び」、「Ⅱ対話的な学び」の項目では、支援方法や活動につなげることなど、具体的な項目になっていて、活用しやすくなっていたが、項目が細くなるほど、授業の重点が分かりにくくなる点もある。「注目してほしい児童生徒の評価」については、学習指導案の個人目標にもあるので、それを活用してはどうかという意見が出た。

事後協議では、授業の様子をビデオで見てのグループ協議を行った。グループの中で一人一人の意見や感想が聞くことができ、その後の全体協議では、グループごとに発表することで、他のグループの意見なども共有できた。授業での「良かった点」、「つまずいた点」については、分析表と関連付けて、「注目してほしい学習活動」で挙げられている活動に絞って、事後協議していけばよいのではないかと考える。

(2) 公開授業 2

ア 4年生における取組

(ア) 取組にあたり

本学級は小学部4年生の男子児童4名で構成されている。そのうち2名は自閉症を、2名が先天性の遺伝子疾患を併せ有している。本学級は昨年度まで複式学級であったが1名の転校生を迎え単独の学級となった。そのため年度当初は頑張ろうとする気持ちが空回りする場面も見られたが、徐々に落ち着いて活動できるようになった。児童の実態としては、こだわりや衝動性などが見られ学習に集中できないことがある。また、日常生活においては、指示待ちであったり、遊びに夢中になり次の活動に移れなかったり、1つのことに集中できないなどの課題がある。コミュニケーション面では、全員に発語があり、簡単な要求を言葉で伝えたり、言語指示で行動したりすることができる。休み時間にダンスを全員で踊ったり、タブレット型端末のアプリで盛り上がりやすくなるなど児童同士の関わりが増え言葉でのコミュニケーションの場面も見られる。また、ぬり絵をしたり、簡単なおもちゃを作ったりすることに意欲的に取り組むことができる子どもたちである。しかし、制作活動においては、1名を除き細かな作業もこなすことができるが、拇指対抗が不十分であったり、手元を注視して作業をしたり、一定時間集中して作業をすることが苦手だったりする面が見られる。

今年度の生活単元学習においては、できるだけ畑から調理へ、畑から制作へと関わりをもたせるように題材を選び、生活経験を増やすこと、手順書に沿って一人で活動すること、手指の巧緻性を高めること、コミュニケーション力を高めることなどをねらいとして取組を行った。

(イ) 単元計画

年間指導計画

a 生活単元学習の年間計画

1学期				2学期				3学期		
4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ゴーゴー4年生!	型抜き名人になろう ①(クッキー作り)	型抜き名人になろう ②(オーナメント作り)	畑の野菜でクッキング①	作って遊ぼう	作品展に出展しよう		畑の野菜でクッキング② クリスマス会に向けて	畑の野菜でクッキング③	卒業生を送る会に向けて	もうすぐ5年生
野菜を植えよう		野菜を収穫しよう		野菜を植えよう			野菜を収穫しよう	野菜を収穫しよう		
(年間) カレンダーを作ろう 交流相手に手紙を書こう 防災学習 散歩										

b 単元計画

- 第1次 紙すきをしよう・・・10時間
- 第2次 ちぎり絵作品をつくろう・・・12時間 (本時9、10/12時間)
- 第3次 作品展にいこう・・・5時間
- 第4次 作品展の振り返りをしよう・・・1時間

イ 実践事例

(ア) 単元名「作品展に出展しよう～ちぎり絵にちょうせん!～」

(イ) 単元設定の理由

本単元では、作品展に向けてちぎり絵の作品作りを行う。転入生を除く3名は昨年個人作品としてちぎり絵を作成し、全員が意欲的に取り組み、出来上がりや展示されることの喜びを味わうことができた。今回のちぎり絵は、絵の素材を学級の畑で育てた野菜とした。1学期の畑は実りがはっきりとしており児童の興味を強くひいた。2学期も人参やほうれん草、玉ねぎの栽培に取り組みしており、制作の意欲をより高めることができると考える。更に牛乳パックでの再生和紙作りにも取り組み、一部ではあるが自分たちで作った再生和紙を使うことで興味の持続を図りたい。再生和紙は牛乳パックのパルプとお花紙や色紙を混ぜて制作する。再生和紙作りの練習として、はがきやコースター作りにも取り組みたいと考えている。ちぎり絵は指先の細かな動きや集中力を必要とする。そのためこの活動を通して手元を見ることや手指の巧緻性を高める、集中して時間いっぱい取り組む力をつけていきたい。また、これまでの本学級の制作や調理はカレンダー作りや型抜きでのオーナメント作り、クッキー作りなど個々の取組が多かったが、今年度4名の小集団となったこと、児童の実態が似通っていること、児童同士の関わりが増えてきたことなどから共同制作とした。しかし共同作品とは言え1枚の紙の上で同時に作業を行うことは難しいと考えられるため、自分の作りたいちぎり絵を選んだり、話し合いにより個々のちぎり絵を決めたりしたうえで作業を行い、最後に一つの物にまとめ、仕上げの作業は全員で行う。そのため、学習の終わりにはできたちぎり絵を台紙に並べ、出来上がりのイメージ作りと進行具合の確認を行い、お互いの励みとしたり、コミュニケーションの場としたりしたい。また、自分の作ったちぎり絵や頑張った点などが発表できるように取り組む。作業の支援は最小限にとどめるが、手作りの紙のため児童の実態によってちぎりにくさなどがあれば、支援を行う。最後に作品展で自分たちの作品を鑑賞し、完成の喜びを味わい個々の自信につなげていきたい。それぞれが自分の分担部分を作り一つの作品にしていくことで、さらに4人の関わりが深まってくれることを期待している。

(「知識・技能」)の観点では、制作活動を通して「様々な材料や用具を使い、工夫して絵をかいたり、作品を作ったりすること」を目標とする。(「思考力・判断力・表現力」)の観点では、自分の活動を選んだり、作品について発表したりすることを通して「人との関わりの中で伝えあい、自分の思いをもつようにする」を目標とする。(「学びに向かう力・人間性」)の観点では、自分の選んだちぎり絵を丁寧に仕上げることで「様々な集団活動に進んで参加し、簡単な役割を果たそうとすること」を目標とする。

(ウ) 本時における目標

- ・和紙を丁寧にちぎったり、隙間なく台紙に貼ったりすることができる。(「知識・技能」)
- ・作りたいちぎり絵の台紙を選んで伝えたり、感想を発表したりすることができる。

(「思考力・判断力・表現力」)



ちぎり絵個人作品

(エ) 学習活動の展開

■学習過程分析表

学 習 活 動		I 主体的な学び
【導入】	1 初めのあいさつをする 2 本時の学習内容を知る 「ちぎり絵をしよう」 ・スケジュールを確認する	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	①作りたい絵をえらぶ ②ちぎり絵をする ③きょうけい ④ちぎり絵をする ⑤かたづけをする ⑥ふりかえりをする	②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
	3 本時の目標を知る。 『紙を小さくちぎる』 『隙間なく貼る』	③興味・関心を高める題材及び活動設定 ④興味関心を高める教材教具の活用
【展開】	4 作りたい絵の台紙を選ぶ。 5 道具を準備し、作業を始める。 筆、糊、和紙、台紙、ケース、手拭き、広告紙	II 対話的な学び ①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
	~休憩~	②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
	6 作業を再開する。 ・本時の目標の再確認をする。 『紙を小さくちぎる』 『隙間なく貼る』 ・作業時間を知る。(25分) ・ちぎり絵をする。	③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
	7 片付けをする。 ・残った紙やカゴを前の机に返す。 ・道具を洗う。 筆、糊、手拭き	④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
	8 振り返りをする。 ・作品と感想を発表する。 ・台紙の作ったちぎり絵を並べる。 ・目標が守れたか確認する。	⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
【まとめ】	9 終わりのあいさつをする。	III 深い学び ・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「6 ちぎり絵をする」 (見本の大きさに紙をちぎって貼る)	A児は、作業能力は高いが、指定された紙の大きさを無視したり、丁寧に欠けたりする面がある。そのため見本を手元に置くことで、常に大きさを意識できるようにすると同時に、みんなで作品を作っていることを意識させることで、丁寧に作品が作れるよう支援をする。
展開「6 ちぎり絵をする」 (作りたい台紙を選んで伝える)	C児は、おうむ返しや模倣が中心のため、自分で選ぶことが苦手である。そのため選択肢を2種類にして野菜の写真で提示し、選びやすくする。さらに「何を作るの」「これは何」などの問いかけの対し、選んだものを言葉で伝えることができるように支援する。

本時の学習を知る場面では、指名した児童は答えることができなかったが、代わって指名された児童はいつになくはっきりと答えることができ、他の児童からも「ちぎりえ」という声が聞かれた。目標の確認では、提示した2つのちぎり絵を見て、一方は「隙間があります」もう一方は「きれいです」との発言があった。作りたい絵の選択場面では、1名に対し選び直しを指示したため、本人の混乱と児童目標とのそごができてしまった。他の児童は、提示を2種類に絞る必要のある児童もいたが、それぞれに自分で選ぶことができた。友達に向けての発表は全員が支援を受けずに言葉にすることができた。前半

の作業は、個々に必要なものを前の机から準備して作業を行い、休憩に入る際には、強めの指示を必要とする児童もいたが、全員で休憩に入ることができた。

作業再開の際終了時間の確認を行った。指導者からの質問の前にA児から時間の発言があり、学習用の時計の針を合わせることも迷うことなくできた。作業については、A児は紙の大きさの確認はしていないが、台紙に合わせて和紙をちぎり丁寧に作業を行うことができた。時々友達の作業を見て手を休めたり疑問を口にしたりすることがあり、教師に確認を求めることも多かった。B児は、和紙やのりがないことをそばの教師と確認をすると、主指導者に「〇〇ください」と声を掛けることができた。ちぎること貼ることもそばの教師の声掛けに従って、小さくちぎったり、和紙を重ねるように貼ったり、和紙を滑らせて動かしたりしながら貼ることができた。C児は、一人で黙々と作業を行い、隙間についても全体を貼り終わったあと自分で埋める作業を行っていた。和紙や糊の要求が支持なしではできず、はじめは教師のモデル提示で模倣を促したが、時間の終わりには自ら主指導者に「紙をください」と声を掛けることができた。D児は、よそ見や手が止まることが多く、集中力のなさが目立った。作業は丁寧に端から順に貼り、ところどころ違う色を入れる様子も見られた。振り返りについては、はっきりした言葉で伝えることができない児童もいたが、全員が作ったものの名称を発表することができた。A児、D児については頑張ったところも発表することができた。B児、C児については難しく、教師からの評価になった。

(オ) 成果と課題

■注目してほしい児童生徒の評価 (※【目標達成度について】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。)

児童名	本時の評価規準 (抜粋)	学習活動に関する分析	目標達成度
A児	見本と同じ大きさに紙をちぎり、貼ることができたか。作業終了の時間を答え、時計の針を合わすことができたか。	見本への意識は少なく、教師からの働き掛けも少なかった。台紙の大きさに合わせて紙の大きさを変えながら丁寧な作業ができた。大きさを合わせてから貼る工夫が見られた。終了時間は把握できていて、時計の針を合わせることもできた。時計が読めるようになってきているため、自信をもって答えることができた。	B
C児	提示した2種類の写真から、自分で選んで、伝えることができたか。	複数提示では自己選択できなかったが、2種類提示にすると時間を置かずに選び取ることができた。選んだものの名称を答えることもできた。	B

本時はちぎり絵を始めて9、10時間目にあたり、児童に示した目標も定着しそれぞれに成長した姿を見ることができた。和紙を丁寧にちぎったり、隙間なく台紙に貼ったりすることについては、前回から大きさの見本を準備したことで児童の意識も向きやすくなり、声掛けも最小限にすることができた。見本を見ることで小さくちぎってしまうことが減り、きれいに仕上がり作業効率も上がった。貼る作業は、端から詰めて貼っていく児童、大まかに貼って後から隙間を埋める児童など自分のスタイルで作業を進めることができた。教師の声掛けに従って和紙を動かしながら貼ったり、ちぎる紙の大きさを変えるなどの工夫をしたりする様子も見られた。時間いっぱい取り組むという点では、途中で集中力が途切れることがあった。研究協議の中でも集中力が切れ作業が雑になった児童がいたとの指摘があり、動きを入れることなどの助言をいただいた。和紙やのりの補充などの場面設定はしていたが、児童の状態の把握や対応をその都度変更しながら、集中できる環境を整える必要があると考える。

作りたいちぎり絵の台紙を選んで伝えたり、感想を発表したりすることについては、ちぎり絵選びや使う色の選択などで2種類からの選択にするなど多少の支援を必要とする児童もいたが、全員が自分で決め友達に向けて発表することができた。振り返りでも何を作ったかについては支援がなくても発表することができた。感想発表については、自分からは発表することができない児童もおり、課題が適切であったか、視覚支援などの他の支援方法がなかったかなどの検討が必要である。しかし、本人なりの表

現で自分の作ったもの、頑張ったところなどを発表しようとする様子も見られているため、今後も発表の機会は作っていききたい。

導入時のD児への対応については、成功体験で終われるようにする必要があるとの指摘をいただいた。今後は単元カレンダーの活用や作品に提示などで答えを引き出し、成功体験を重ねていけるようにしていきたい。



ウ 4年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

本単元は、自分たちが畑で育てた野菜を素材として作品展に出品する作品作りに取り組んだ。ちぎり絵にする野菜や構図についても児童の意見を取り入れ、ちぎり絵に使う再生和紙の一部を自分たちで作成し、作品展に出品することを毎時間確認することで、時間のかかる細かい作業が続いたが、最後まで興味を失うことなく取り組むことができた。作業中は自分のことで精一杯の児童が多かったが、振り返りや最後の仕上げの時には、他の児童の作品にも関心を寄せる様子も見られた。作品展の見学では、自分たちの作品をみんなで探し鑑賞することができた。時間はかかったが思った以上の出来となり、満足している様子を見せる児童もいた。

作業面では、ちぎり絵では回を重ねることでちぎったり、貼ったりといった作業効率や正確さが増し、手指の操作性や注視といった面に成長が見られた。個々に作業の進め方は違ったが、それぞれに力を発揮することができたと考える。紙すきでは、流れをすぐに理解し作業することができた。ミキサーの操作やかくはんの様子が楽しく、出来上がりがその場で確認できるため意欲的に取り組む様子が見られた。紙すきでは手順をホワイトボードで示す形をとったが、作業が分からなくなればホワイトボードを確認して作業を続ける姿も見られ有効に活用できていた。手順書については、個人に一覧で示したものを中心に使用してきたが、児童の実態や学習内容によってどのような手順書が適切か今後も検討していきたい。

コミュニケーション面では、ほとんどの児童が作りたいちぎり絵や使いたい色、配色などを自分で決め、表現することができた。「できました」「〇〇ください」などの言葉が難しかった児童もモデル提示や繰り返し練習することで、自分で言葉を選んで伝える場面も見られるようになってきている。振り返りの感想発表にはまだ課題が多い。この単元では目標の中の言葉が出ることを期待していたが難しかった。一人一人にあった課題の設定、教師の言葉掛けの工夫、視覚支援の活用など検討していく必要がある。

今年度生単では、自己選択、自己決定の場面も多く設定して取り組んだ。色を選ぶ、形を選ぶ、数を決める、順番を決めるなど簡単なものではあり、選択肢を絞ったり友達の活動を参考にできるように工夫したりする必要もあったが、全員が少しずつではあるが自分で決めることができるようになってきた。

順番を決める場面では、これまで受け身だった児童が自分から進んで順番を選んだり、友達に譲ったりといった変化も見られた。選んだものを言葉で伝えることにも取り組み、自分の意思をはっきりと主

張したり、場面に合った言葉を自分で考えたりすることが増えている。全員に発語があり学習以外の場面ではお互いにコミュニケーションを取りながら活動する様子も見られた。生活経験を増やすという点では取組内容の検討が今後も必要と考えるが、畑作りや作品作りを通して今まで気付かなかった植物の生長に関心を寄せる児童もおり、深く学べる部分もあったのではないかと思う。集中力のなさや、自己中心的であるなどの課題はあるが、児童の作業能力の高さや意欲には感心させられることが多い。これらの力を一層伸ばし、自己肯定感を高め苦手なことも取り組める力をつけ、友達それぞれを認め合いながら学習できるよう授業改善に努めたい。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

学習過程分析表の活用によって、どの要素が本学級の児童に必要なのか、設定した学習がどの要素とつながるのか等を確認することができた。今回の単元では主体的な学びや対話的な学びについては、その内容を設定することができていたが、深い学びについては十分ではなかった。どの活動が深い学びの項目と結びつくのか、どこを深い学びととらえるのか等分析する必要があると考えた。振り返りの発表に、友達の活動や作品を評価することで自分を振り返るきっかけ作りにもなればとの思いから一人の児童には他者評価の活動を設定した。ねらいの達成は難しかったが、他者評価についても項目設定があってもいいのではないかと思う。



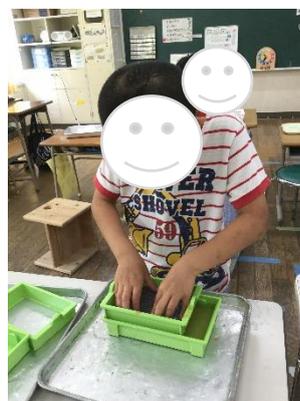
全員で仕上げ



完成作品



紙すきの様子



(3) 公開授業 3

ア 5年生における取組

(ア) 取組にあたり

本学級は小学部5年生の男子児童6名で構成されている。そのうち2名は本年度からの転入生であり、1名は聴覚障害を併せ有している。今では、2名も少しずつ学校での生活に慣れ、全体の活動に合わせて行動することができるようになってきた。児童の実態としては、簡単な指示やスケジュールを手掛かりにして自ら行動することができる児童から、個別の声掛けや促しが必要な児童がおり、実態には幅がある。聴覚障害と知的障害を併せ有する児童や自分の思いと違うことが起きると気持ちを切り替えることが難しい児童、時間一杯活動することが難しい児童がいる。そのため、スケジュールなどの視覚支援の提示やそれを見るように促すこと、タイマーを使って終わりを知らせるなどの支援を行いながら授業を行っている。また、ほとんどの児童が簡単な言葉でのコミュニケーションはできるが、人との関わり方に課題があったり、教師や友達に自分から関わろうとする様子があまり見られない児童がいたりする。そのため、日常生活や授業の中で、「できました。」や「〇〇をください。」等の決まったやりとりを繰り返し、児童が教師や友達とコミュニケーションを取る場面を設定している。

本学級では、「運動をする習慣をつけ、健康で丈夫なからだをつくる」「自分のことは自分で行うことができる」「学校や身近な社会のきまりを守る」「友達と集団で取り組む力を高める」の4つを学級目標として、様々な学習に取り組んできた。生活単元学習では、転入生を迎えた新しい集団の中で、児童が関わり合いながら学び、様々な経験ができるようにしている。

(イ) 単元計画

a 生活単元学習の年間計画

生活単元学習の年間計画は以下の表のとおりである。なお、今回取り上げるのは4月～7月に取り組んだ「なつまつりに向けて」の単元である。

1学期				2学期				3学期		
4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
なつまつりに向けて(スノードーム) 学校探検 壁面作り	なつまつりに向けて(鍋敷き) 調理活動(サンドイッチ・サラダ・フルーチェ)	なつまつりに向けて(看板づくり、お店やさんごっこ)	なつまつりに向けて(振り返り・レストランにいこう)	運動会に向けて(ポスター・うちわ・スローガン作り) 調理活動(シャリーチェ)	さかなつりゲームに向けて 秋をみつけよう(木の実や落ち葉拾い)	秋をみつけよう(ローラーあそび・どんぐりごま・どんぐりカー・作品 展見学に向けて)	感触あそび1(片栗粉) クリスマス会に向けて(かざり作り・出し物の練習) お楽しみ会	感触あそび2(氷と湯) 冬をみつけにいこう	卒業生を送る会に向けて(練習・プレゼント作り)	交通公園に行こう(事前学習～事後学習) もうすぐ6年生
いす取りゲーム	→	ドミノ倒し	→		ボウリング	→				
(年間) カレンダー作り・防災学習										

b 単元計画 (全 34 時間)

- 第1次 なつまつりについて知ろう・・・1時間
- 第2次 スノードームを作ろう・・・・・・7時間
- 第3次 タイルの鍋敷きを作ろう・・・・・・16時間 (本時 14/16)
- 第4次 商品をラッピングしよう・・・・・・2時間
- 第5次 看板を作ろう・・・・・・2時間
- 第6次 お店やさんの練習をしよう・・・・2時間
- 第7次 お店を出そう・・・・・・2時間
- 第8次 振り返りをしよう・・・・・・2時間

イ 実践事例

(ア) 単元名 「なつまつりでお店を出そう ～タイルで鍋敷きを作ろう～」

(イ) 単元設定の理由

本単元では、なつまつりに向けてスノードームやタイルを使った鍋敷きなどの商品作りや看板作りなどを行う。昨年度はなつまつりでの出店を経験し、児童が自分たちで作ったものを売る楽しさや喜びを味わい、人との関わり方を学ぶことができた。本年度は転入生も加わり、新たな学級集団でなつまつりでお店を出す活動を通して、教師や友達と一緒に活動し役割を果たすことや保護者、地域の人などに関わる経験をしてほしいと考えた。タイルの鍋敷きとスノードームは、昨年度のなつまつりや卒業生を送る会で製作した経験があり、繰り返し取り組むことで実態や経験に幅のある児童がそれぞれのペースで時間一杯取り組む力、手元を見ること、手指の巧緻性を高めることができると考えた。

授業の導入では、昨年度作った鍋敷きやなつまつりの写真を見て振り返りを行い、児童がなつまつりの様子を思い出したり、なつまつりで販売を行うことが分かり、見通しをもって単元に取り組むことができるようにしたりする。そして、タイルの鍋敷き作りでは、見本を見てタイルの数を自分で数えたり、色や形の違いに気付いたりできるよう声掛けなどの支援を行う。昨年度経験している児童には、支援は最小限にして、タイルを小さいものにしたたり、自分で好きなタイルを選んで並べるようにしたりする。また、製作活動を通して、スケジュールを提示して終わった活動は外すようにしたり、タイムタイマーを使ったりして、見通しをもって時間一杯活動することに繰り返し取り組むようにする。商品ができた材料がなくなったりした時は、言葉や肩をたたくなど児童に応じた方法で教師に報告することにも繰り返し取り組んでいく。

(「知識・技能」)の観点では、製作活動を通して「用具を使って切る・ぬる・はることや工夫して作品を作ることを経験し」、児童に応じて「数の概念を身に付けたり、ものの形や色、大きさに着目したりすること」を目標とする。(「思考力・判断力・表現力」)の観点では、製作や販売の練習を経験することで「人との関わりの中で伝え合う力」を養っていく。(「学びに向かう力・人間性」)の観点では、「集団活動に参加し簡単な係や役割をしようとする事」を目標とする。

(ウ)本時における目標

- ・筆でボンドを付けタイルをはることができる。
- ・タイルの数、形や色の違いに気づき、見本と同じように作ることができる。

(エ)学習活動の展開

授業の実施にあたり、本時の注目してほしい児童としてA児とC児を設定した。A児は教師の指示や手順書を手掛かりにして自ら活動できる児童である。昨年度もタイルの鍋敷き作りを経験しており、いろいろなタイルを使った複雑なものでも見本と同じようにタイルを並べることができていた。そのため、今回は自分でタイルの並べ方を考え、必要な数のタイルを準備して作る活動に取り組むことにした。A児には、写真で示した見本と同じ数だけタイルを置くこと、どのタイルを選んで置くかは自分で考えて決めることを説明した。また、タイルは4、5種類用意した。C児は見本や友達の様子を見て活動できる児童であり、活動に慣れてくると一人で作業することもできる。ま



(写真1) タイルの見本

た、細かい作業が得意である。昨年度もタイルの鍋敷き作りに取り組んでおり、正方形の鍋敷きは一人でも見本通りに作ることができるようになったため、今回は円形の鍋敷き作りに取り組むことにした。同じ色のタイルを並べるだけではタイルの数を間違えたり見本と同じように配置することが難しかったりしたため、色や形の違うタイルを間に入れ、そのタイルを目印にして正しい配置や数でタイルを並べることができるようにした。

■学習過程分析表

学 習 活 動			I 主体的な学び
【導入】	1 初めのあいさつをする。	}	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	2 本時の学習内容を知る。 ・鍋敷き作ることを確認する。 ・スケジュールを確認する。 ① タイルをはる ② かたづけ ③ ふりかえり		②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) 音声言語による支援
【展開】	3 本時の目標を確認する。 【見本と同じものを作る。】	}	③興味・関心を高める題材及び活動設定
	4 道具を準備し、鍋敷きを作る。 ・道具の準備をする。 筆、ボンド、タイル、ケース、 鍋敷きの土台、見本		④興味関心を高める教材教具の活用
【まとめ】	・鍋敷きを作る。 ・ボンドがなくなったらT1に報告する。 ・できたらT1に渡す。	}	II 対話的な学び
	5 片付けをする。 ・筆とボンドが入った皿を洗い、バケツに入れる。 ・タイルや鍋敷きを前の机に置く。		①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
	6 振り返りをする。 ・見本と同じように作ることができたかを確認する。 ・いくつできたかを確認する。		②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
	7 終わりのあいさつをする。		③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
			④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
	⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。		
	III 深い学び	・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開4「道具を準備し、鍋敷きを作る」	A児は見本通りに置くことができるようになったので、自分で工夫して作ることを目標にしている。タイルの数は見本に合わせることを確認し、様々なタイルを用意して、いろいろな組み合わせを考えられるように支援する。
展開4「道具を準備し、鍋敷きを作る」	C児は円形の鍋敷き作りに取り組んでいる。タイルの形や数を考えて作ることができるが、円になると外枠がないため見本通りに置くことやタイルの数を正しく数えることが難しくなる。そのため、数える時の基準になるように間に違う形や色のタイルを置いたり、置き終わったタイルは見本に印を付けたりしている。

授業の導入では、鍋敷きを作ることやなつまつりに出店し販売をすることを確認してから、児童がそれぞれ必要なタイルや道具を準備して活動に移った。A児以外は必要なタイルと見本、鍋敷きの土台となる板をケースに入れてそれぞれの名前を書いておくことで、児童が自分の名前が書いてあるケースを取るようにした。A児には4、5種類のタイルを用意し、そこから必要な数だけ取るように設定した。

注目してほしい児童であるA児とC児の学習活動の様子について説明する。A児は、見本に写ったタイルとその日用意していたタイルが同じだったため、見本と同じように作り始めたが、数だけ見本と同じになるように作ることを説明し直すと、板の上にタイルを置いてみながらタイルの配置を考え始めた。

また、必要なタイルの数を計算し、その数だけタイルを取ることができていた。「一番外側のタイルは白いのを4つ並べたら黒いタイルを1つ置く。」と工夫するポイントを教師に伝えながら取り組んでいた。C児は、自分の名前が書かれたケースと筆やボンドを取ってくると、円の外側から見本と同じように順番にタイルを並べ始めた。途中、見本と違う数のタイルを置き始めたので教師が支援に入り、ペンで見本に印を付けながらタイルの数を一緒に数えると、間違いに気付きタイルを置き直す様子が見られた。その後は黙々と一人で活動を続け、途中タイルの下に見本が隠れていることがあったが見本通りに作ることであり、本児は並べ方を覚えていたようだった。

その他の児童については、B児とD児は名前を呼ばれると自分の名前が書かれたケースや道具を一人で取ってくることができた。製作では、並べ方を間違えている時には指差しや声掛けを行ったが、ほとんど一人で活動することができた。E児は一人で活動することは難しかったが、教師と一緒に道具を準備したり、教師が指示したタイルに自分でボンドを付け、指差ししたところにタイルを置いたりすることができた。F児は道具の準備の時や集中が切れてしまった時には促しが必要であったが、タイルを見本通りに並べて一人で鍋敷きを作ることができていた。

また、教師とのやりとりや報告の場面では、ボンドがなくなった時に「ボンドをください。」と伝えることや、鍋敷きができた時に「できました。」と報告することに取り組み、できた鍋敷きは教師が見本と同じタイルの数や色、配置になっているか、鍋敷きを裏返してもタイルが落ちてこないか等を確認した。A児はどちらも自ら報告することができた。B、C、D児は、ボンドがない時には「ボンドがついてないよ。」や「ボンド少ないよ。」等の声掛けや促しが必要であったが、タイルの鍋敷きが完成したときには、一人で教師



(写真2) 自分の好きな色のタイルを選ぶA児



(写真3) 授業風景

のところまで来て報告することができていた。E、F児は発語がないため、教師と一緒に肩をたたいたりカードを用いたりして報告を行ったが定着は難しかった。

(オ)成果と課題

■注目してほしい児童生徒の評価 (※【目標達成度について】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。)

児童名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
A児	・タイルの数を考え、配色を工夫して作ることができたか。	タイルの数は計算をして、必要な数を用意することができた。工夫するという点では、「一番外側のタイルは白いのを4つ並べたら黒いタイルを1つ置く」と工夫するポイントを話しながら取り組んでいたが、評価の規準や支援方法など課題が残った。	C
C児	・色や数が見本と同じになるようには作ることができたか。	見本を見てほとんど一人で作ることができた。間違えた時には教師と一緒に数を数えることで間違いに気づき、置き直すことができた。	A

タイルの鍋敷き作りでは、タイルの数や色に注目し、見本と同じように作ることに取り組んできた。個別学習の時間にも並行して数字の学習を行っている児童もおり、見本を見て数えたり、児童によっては計算をしてタイルを数えたりすることができた。また、自分で見本との違いに気づきタイルを貼り直す様子も見られ、数や色の違いに注目し、見本や手順書を見て製作する力が伸びたと感じる。

一方で、A児の「工夫して作る」という点では多くの課題が残った。まず、見本として提示したものに色が付いていたため分かりづらく、児童に見本と同じ色のタイルで作る活動だと誤解させてしまった。事後協議の中で、見本を白抜きのものにしたり、どんなタイルの配置で作るかイラストを描かせてみたりしてはどうかという意見をいただいた。また、「工夫する」ことに対する評価が難しく、何が達成できたら工夫できたことになるのかという規準が設定できていなかったと感じる。さらに、授業の導入で、見本と鍋敷きを提示し「同じものを作る」ということを目標として提示したり、振り返りで見本と同じものができたかを確認したりしたが、この「同じ」という言葉が児童の中でどれほど理解できているのかも課題として残った。一部の児童には理解できていたと思うが、そこで理解できていない児童に対して視覚支援等を工夫して伝えたり、目標自体を見直したりする必要があると考える。児童にとっても教師にとっても、ゴールが明確な目標を設定することが今後の課題である。

また、「商品としての合格ライン」についても意見があった。本単元では、できた鍋敷きは教師が見本と同じタイルの数や色、配置になっているか、鍋敷きを裏返してもタイルが落ちてこないか等を確認していたが、児童全員がそのことを意識できていたとは言い難い。今後商品作りや販売に取り組む時には、キャリア教育の視点から小学5年生が作る商品としての質をどこまで求めるのか、またそれをどのように児童に伝えていくのかを考えていきたい。

ウ 5年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

本単元では、なつまつりに向けて商品やお店の準備、接客の仕方等の学習を行った。なつまつりでの出店に向けて商品作りを行ったことは児童の活動意欲につながり、その商品をなつまつりでお客さんに販売できたことは児童の達成感につながったと考える。また、その中でそれぞれのペースで時間一杯取り組むことや手指の巧緻性を高めること、手順書や友達の様子等を手掛かりにして自ら活動すること、人とのやりとりやコミュニケーションを学ぶこと等をねらいとして取り組んできた。単元が始まったころは時間一杯活動することが難しかった児童も、徐々に離席が減って集中して取り組むことができる時間が長くなり、2学期には周りの児童と一緒に活動できるようになってきた。また、自分で必要な道具を準備して取り組むことにも回数を重ねるうちに慣れ、単元の終盤にはほとんどの児童が一人で必要な道具を準備して取り組むことができるようになった。報告の場面では、4名の児童は決まったやりとりではあるが自発的に報告することができ、他の単元や日常生活でもそういった場面が見られる。E、F

児は本單元の中では教師が介入してのやりとりであったが、その後トイレや給食の場面で、教師の肩をたたいたり絵カードを使ったりして自発的に要求を伝える場面が見られるようになってきた。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

学習過程分析表を活用して事後協議を行うことで、注目してほしい児童に焦点を当てて協議を進めることができ、発表する内容や話し合う内容が明確で分かりやすかったと感じる。内容については、注目してほしい学習活動の「授業者のねらい及び工夫ポイント」の項目を「授業者のねらい及び支援のポイント」に変更してはどうかという意見が出た。



(写真4) なつまつりで販売する様子

(4) 公開授業 4

ア 6年生における取組

(ア) 取組にあたり

本学級は、小学部6年生5名で構成されている。全員が知的障害の他に自閉症等を併せ有し、気持ちの切り替えが苦手であったり、慣れないことや場所に抵抗があったり、集団での活動に参加することが難しかったりする児童もいる。また、児童の中には、その日の体調や、気温・湿度、見通しの立たない中での活動等の環境を要因として気持ちが不安定になる者もいるため、安定し、かつ落ち着いた環境で活動できるようにすることが重要である。

実態としては、一対一のやりとりであれば、簡単な口頭指示の理解や質問への受け答えができ、文字を使ったスケジュールを手掛かりに行動できる児童や、絵や写真等の視覚的情報を入れたカード等を使って自分の意思や要求を伝えたり、スケジュールカードを手掛かりに行動したりすることができる児童がいる。

生活単元学習では、時間いっぱい活動することや、役割分担して友達と一緒に取り組むことなどを課題とし取り組んでいる。1学期には、ホットケーキ作りやパフェ作り、ラスク作り等、様々な調理活動を行ってきた。食べることが好きな児童が多く、調理活動自体も楽しい活動となっていることもあり、スケジュールを確認したときから調理のカードを指差す等、意欲をもって取り組む姿が見られる。また、児童が自分でできる活動を取り入れ設定することで、教師の声掛けやモデリング、手添え等の支援によって、フライ返しやお玉、泡だて器等を安全にかつ適切に使用することができている。

また、買い物学習では、教師が声掛けをしたり、用意していた写真と照らし合わせたりすることで、買いたい物、買うべきものを見つけたり、確認したりすることができた。支払い時には、声掛けや指差しが必要な児童もいるが、用意された金銭を手渡し、お釣りをもらうこと等もできている。1学期末には、夏祭りで開いた店の売り上げから利益を給料としてもらい、買い物に行った経験もある。

販売学習については、今年度は初めて取り組む活動となるが、1学期の夏祭りの出店で、受付係になった児童は、挨拶をしたり、手順表をもとに店内のゲームを案内したり、お金を受け取ったりする活動に取り組んだ経験がある。

(イ) 単元計画 (年間)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
制作活動	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作	毎月カレンダー制作
仲良くなろう	名刺づくり	夏祭りしよう (ゲーム屋)	夏祭りしよう (ゲーム屋)	夏祭りしよう (ゲーム屋)	運動会しよう ・ポスター制作	クッキーやさん をしよう	作品を作ろう クリスマス	クリスマス会 に向けて	卒業に向けて (制作、発表、 中学部体験など)		
オリエンテーリング	ハーバリウムづくり	道具製作 学級農園	お菓子袋詰め	・うちわ制作	・買い物 ・調理 ・販売	紙かご制作 学級農園 サツマイモ収穫	クリスマス会 に向けて				
公園遊び	作って遊ぼう 迷路づくり	サツマイモの 植え									
防災学習											
調理活動											
ホットケーキ	・パフェ	・ラスク	パフェ	ポップコーン フルーツポンチ							

公開授業 (クッキーやさんをしよう)

- ① 10月 4日 (金) 3限：作りたいクッキーを決めよう！
- ② 10月 9日 (水) 2・3限：クッキーの材料を買いに行こう！
- ③ 10月 11日 (金) 2限：クッキー作りの練習をしよう！
- ④ 10月 11日 (金) 3限：クッキーを作ろう！①
- ⑤ 10月 16日 (水) 2限：販売の準備をしよう！
- ⑥ 10月 18日 (金) 2限：販売練習をしよう！①
- ⑦ 10月 23日 (水) 2限：クッキー作りの練習をしよう！

- ⑧ 10月23日(水) 3限:クッキーを作ろう!②
- ⑨ 10月25日(金) 2限:販売練習をしよう!②
- ⑩ 10月25日(金) 3限:クッキーを売ろう!①
- ⑪ 10月30日(水) 2・5限:クッキーを作ろう!③
- ⑫ 11月1日(金) 2限:販売練習をしよう!③
- ⑬ 11月1日(金) 3限:クッキーを売ろう!②
- ⑭ 11月6日(水) 2・5限:クッキーを作ろう!④・・・(本時)
- ⑮ 11月8日(金) 2限:販売練習をしよう!④
- ⑯ 11月8日(金) 3限:クッキーを売ろう!③
- ⑰ 11月20日(水) 2・3限:好きなお菓子を買に行こう!
- ⑱ 11月22日(金) 2・3限:打ち上げパーティーをしよう!

イ 実践事例

(ア) 単元名「クッキー屋さんをしよう」

(イ) 単元設定の理由

本単元は、児童が自分の力で、あるいは友達と協力して、クッキーを作り、それを販売することで得たお金から給料をもらい、そのお金で、パーティーで食べるお菓子を買、パーティーの中で食べるという流れを体験的に学べるように設定した。調理や片付け、販売等を通して自分が仕事をするための知識や技能を身に付けたり、販売や買い物を通して金銭の大切さや扱いについて学んだりできるようにすることもねらった。

調理活動では、作り慣れたものであれば、自分で手順書を見て活動できたり、教師と一緒に確認したり声掛けを受けたりしながら活動できる姿が見られた。繰り返し取り組むことで、学習内容が定着する姿が見られるので、本単元でも、道具の扱いについて練習したり、クッキーづくり自体も、練習(試食をつくる)回と、本番(商品をつくる)回を設定したりする等して、児童が自分で考え、できる活動を広げるとともに、商品としての質も高めることができるようにした。

買い物学習については、買い物が好きな児童は多いが、自分で目当ての物がある棚を探すことは難しかったり、時間がかかったりする児童がいる。探し方について写真や動画を使って学んだり、友達と協力したりして、目的物を探す力をつけること、また、買い物する機会自体も多くはないので、店員とのやりとりや、支払いのやりとり等の経験を積むことをねらった。

販売学習については、本学級はこれまでに経験はないが、これを設定することで、挨拶や販売時のやりとりで他者と関わる機会をつくったり、お金のやりとり等の経験を積んだりすることができるようにした。

単元の最後には、販売から得た利益から給料をもらい、好きなお菓子を買に行き、パーティーの中で食べるようにし、楽しい活動を最後に迎えることで達成感を得ることができるようにするとともに、将来の職業や余暇活動へとつながる経験も積むことができるようにした。

(「知識・技能」)の観点では、手順書を見たり、適切に道具を扱ったりして、クッキー作りをすることや、販売学習や買い物学習を通して、実体験として、商品や金銭のやりとり、場に応じた挨拶や御礼をする経験を積むことができることを目標とする。(「思考力・判断力・表現力」)の観点では、自分の作りたいクッキーを決めることができることや、調理の材料や自分で買いたいお菓子を見つけ、買い物ができることを目標とする。(「学びに向かう力・人間性等」)の観点では、自ら進んで、調理や買い物等の活動に取り組むことができることや、友達と協力して、作業や活動に取り組むことができることを目標

とする。

(ウ) 本時における目標

○手順書を見たり、道具を適切に扱ったりしてクッキー生地を作ることができる。(「知識・技能」)

(エ) 学習過程分析表

学 習 活 動		I 主体的な学び
【導入】	1. チャイムまたはアラームを聞いて、自席に着席する。 2. はじめのあいさつをする。 3. 本時の学習活動を知る。 4. めあてをつかむ。 5. 手洗いと調理の支度をする。	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
		②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順書や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
		③興味・関心を高める題材及び活動設定
		④興味関心を高める教材教具の活用
【展開】	○生地作り 6. マーガリンを耐熱容器に入れ、レンジで溶かす。 7. 溶かしたマーガリンと砂糖(ココアパウダー・抹茶パウダー)をボウルに入れて混ぜる。 8. 卵を割り入れ混ぜる。 9. 小麦粉をカップいっぱいに入れ、混ぜる。 10. 豆乳を大さじ1入れ混ぜる。 11. 出来上がった生地を冷蔵庫に入れる。	II 対話的な学び
		①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
		②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
		③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
		④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
【まとめ】	12. 振り返りをする。 13. 次の予告をする。 14. おわりのあいさつをする。	⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
		III 深い学び
		・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「6～11：生地作り」	手順書を工程別に分け、写真と平仮名文字で、それぞれの工程ですることと、その際に必要な道具が一目で分かるように工夫して提示することで、見通しをもち、一人で活動できるようにする。
展開「7、9：砂糖や小麦粉を必要量準備する。」	材料を、カップにラインを引き、そこまで入れたり、カップいっぱいに入れたりすることで、必要量を測り取れるようにし、一人で、または声掛け等の少ない支援で活動できるようにする。

本時は、4回目のクッキー作りにあたる。調理の際には、以下の点を工夫しながら取り組んだ。

①毎授業のはじめの単元の流れの確認

本単元は約2か月に渡って行う単元であったので、単元に見通しや関心をもつことができるように、毎授業の冒頭では単元の流れをイラストや写真等を入れて示したカード(写真1)や、単元カレンダー

(写真2)で、当該授業で何をするかを確認して活動に入るようにした。

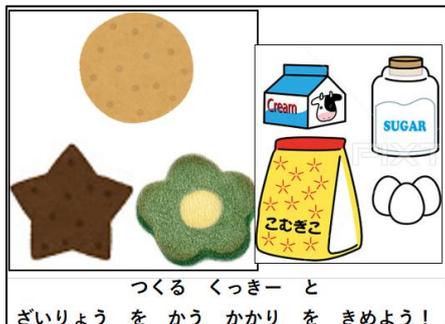


写真1：単元の流れを示すカード

11月 くっきーやさん かれんだー						
月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

写真2：単元カレンダー

②各工程で準備物や、することを写真等の視覚情報を入れて示した手順書の活用。

手順書には、各工程での準備物やすることを、視覚情報を入れて示したものを用意した。手順書の形は、作業中に自分でめくれるように自立するフォトブック（写真3）とし、使用した写真も、実際に使う道具と同じ物（写真4）にした。



写真3：フォトブックの手順書



写真4：実際に使う道具を使用した手順書

③道具の工夫

できる限り自分でできる活動を増やすことをねらって、難易度の高い、卵を割る工程や成型をする工程では、割卵器（写真5）や絞り出し器（写真6）を用意して、握るだけで卵を割ったり、成型したりできるようにした。また、器具を初めて使う際には、直前の授業で先に練習する場面を設定してから取り組むようにした。



写真5：割卵器



写真6：絞り出し器

④机の配置等

机は、各児童の机を、作業台を取り囲むように配置（写真7）し、お互いの活動を見合うことができるようにした。また、作業台の上に調理道具を種類によって分けて配置し、必要に応じてその都度そこから取るようにして、自分の机の上は調理に集中できる空間になるようにした。



写真7：作業台に道具を配置し、その周りに児童の机を配置

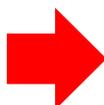
⑤課題分析表の活用

クッキー作りでは、児童の課題に対する実態の把握や指導支援の改善、合理的配慮の整理をねらって、課題分析表（写真8、9）を活用し、活動内容ごとに評価できるようにした。

B児 課題分析表

授業日：令和元年度/0月27日(水)
記入者：[]

活動	内容	評価		
		1：できた	2：概ねできた	3：できる部分があった
マーガリンを耐熱容器に入れる	・トングを使ってマーガリンを入れる。	①支援がなくてもできた。	()	()
		②言語指示でできた。	()	()
		③教師の指差しや動作(ジェスチャー)を見取れた。	()	()
		④教師の手本を見てできた。	(/)	()
		⑤手添えや支持等できた。	()	()
砂糖やココアパウダーをカップに大きじ1入れる。	ココアパウダーをカップに大きじ1入れる。	①支援がなくてもできた。	()	()
		②言語指示でできた。	()	()
		③教師の指差しや動作(ジェスチャー)を見取れた。	()	()
		④教師の手本を見てできた。	()	()
		⑤手添えや支持等できた。	(/)	2



B児 課題分析表

授業日：令和元年度/0月27日(水)
記入者：[]

活動	内容	評価		
		1：できた	2：概ねできた	3：できる部分があった
マーガリンを耐熱容器に入れる	・トングを使ってマーガリンを入れる。	①支援がなくてもできた。	()	()
		②言語指示でできた。	()	()
		③教師の指差しや動作(ジェスチャー)を見取れた。	(/)	()
		④教師の手本を見てできた。	()	()
		⑤手添えや支持等できた。	()	()
砂糖やココアパウダーをカップに大きじ1入れる	ココアパウダーをカップに大きじ1入れる。	①支援がなくてもできた。	()	()
		②言語指示でできた。	()	()
		③教師の指差しや動作(ジェスチャー)を見取れた。	(/)	()
		④教師の手本を見てできた。	()	()
		⑤手添えや支持等できた。	()	()

写真8：クッキー作り第2回目の課題分析表
(オ) 成果と課題

写真9：クッキー作り第4回目の課題分析表

■注目してほしい児童生徒の評価（※【目標達成度について】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。）

児童名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
B児	・道具を適切に使ってクッキー生地を作ることができたか。	教師が手順書の写真を指さすと、それを見て道具を準備したり、割卵器や絞り出し器を使ったりして調理することができた。絞り出しや生地をへらでこねる活動は支援が必要な場面があった。	B
E児	・自分で手順書を確認してクッキー生地を作ることができたか。	時間はかかったが、自分で手順書を確認したり、周りの児童の様子を見たりして活動を進めることができた場面があった。	B

注目してほしい児童生徒の評価については、上記のとおりである。児童Bは、クッキー作りを重ねるごとに道具の使い方が上達したり、何を準備して、どんな活動をするかを、写真を確認することで理解できたりするようになった。絞り出し器やへらは、まだ一人で使いこなすには課題があるが、取組当初と比べると自分でできる活動を大きく増やすことができた。

他方、児童Eも全ての活動ではなく、また、一工程毎に時間はかかる側面はあるものの、自分で手順書を確認したり、周りの児童の様子を見たりして活動を進めることができた。

また、イ(エ)で記した、当該授業での工夫についてもそれぞれ成果と課題があったので、以下では、その点についても考察する。

①毎授業のはじめの単元の流れの確認

単元に見通しや関心をもてるようにすることをねらったこの取組により、児童らには、本時に何をするのか把握できているような様子や、イラストや写真を指差して楽しみにしている様子が見られた。他方、5分ほどの時間ではあったが、集中力が低下してしまった児童もいたので、より簡単、簡潔に確認できるようにする必要を感じた。

②各工程で準備物や、することを写真等の視覚情報を入れて示した手順書の活用

本授業で活用した手順書は、クッキー作りの1回目では冊子型の手順書であったが、作業中にめくりづらかったため、自立するフォトブックに変更した。使用した写真も、実際に使う道具と同じ物にしたことで、自分で手順書を確認したり、教師の声掛けだけで道具を用意して活動に移ったりする児童の様子が見られた。

③道具の工夫

自分で卵を割ったり、型抜きをしたりすることが難しい児童も、割卵器や絞り出し器の使用に繰り返し取り組むことで使用方法が分かり、また、扱いにも慣れ、4回目となった本時では、スムーズに活動できる児童の様子が見られた。他方、本単元では、生地をこねる際に、へらを使用し、徐々に上達が見

られたが、生地が重く、児童の力だけでは難しく、どの児童においても教師の支援が必要であった。粘土をこねるのが好きな児童も多いので、このような場合に備えてポリ手袋等を装着し、手でこねることもできるようにする等、より児童が自分でできる活動を広げていけるようにしたい。

④机の配置等

机の配置の工夫では周りの児童の様子を見て、自分の活動を進めることができた児童や、自分で道具を準備できる児童が見られた。一方で、使った道具をどこに返すかを明確に示していなかったため、使った後の道具をどこに戻すか迷う児童の姿も見られたので、道具を配置する場所には道具の写真を入れる等して、返す場所を自分で見つけられるようにしたい。

⑤課題分析表の活用

課題分析表の活用では、児童のつまずきや、どのようにすれば課題を達成することができたか等をより具体的に把握することができた。また、それをもとに支援を整理、改善することができ、結果としてどの児童も支援度を下げられたことが複数見られた。他方、より児童の実態に沿った分析表にすることや、より具体的に評価項目を設定し、チェックや確認を容易にできるような改善の必要も感じた。

⑥その他

本単元において、改めて課題となったことが、衛生面についてである。本学級は、どの児童もマスクを鼻までかける意識がまだ確立できておらず、本単元の調理においても鼻下までマスクが落ちてきている児童が複数いた。声掛けがあると直すことができるが、鼻水を触ろうとしたり、無意識的に下げてしまったりする様子も見られるので、給食の準備で使用する際等、その都度、声掛けや鏡を見せる等して日頃から意識できるようにしていきたい。

ウ E組における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

本単元では、児童が好きな、食べ物を作ったり、販売した利益で好きなお菓子を買に行ったりすることができるということ等から、児童は、高い意欲をもって活動にあたる様子が見られた。今回の取組で児童らの成長がたくさん見られたのは、このような児童らの自発的な行動（主体的学び）があったからこそだと考えられる。

また、本単元では、三種類の味のクッキーの中から、自分が好きな味の物を選んだり、買い物で好きなお菓子を選ぶ際に自分の気持ちを伝達したり、販売等の機会を設定したりすることで他者と関わりながらいろいろな経験を通した学び（対話的学び）を得ることもできた。

そして、これらの機会を繰り返し設定することで、児童が自ら考え活動できる場面を増やすこと（深い学び）ができるように、調理においても販売においても練習する機会を設定し、実際の調理活動も4回、販売活動が3回と、繰り返し学習し、児童が自分の力でできる活動を広げることができるように取り組んだ。クッキー作りについても販売についても最初は馴染みのある活動ではなかったが、継続して取り組むうちに、例えばクッキー作りでは、手順書を自分で確認して活動を進めたり、新たな道具を使えるようになったりする様子が見られた。中には、家庭に帰ったときに、自分から泡だて器を持ち出してきて、調理しようとする児童もおり、般化につながるようなことも出てきている。また、販売においても、取組当初よりも大きな声で挨拶をしたり、スムーズに商品やお金のやりとりをしたりする様子が見られた。これらのことから、慣れない活動でも繰り返し取り組むことで、知識や技能を習得することができることを改めて確認することができた。そして、繰り返し学習することで、手順書を自分で確認したり、周りの児童の様子を見て活動したりする等、自ら考え、活動できる場面を増やすことができた児童が見られたり、家庭で泡だて器を持ち出して調理をしようとした児童がいたりしたことは、これら

の取組が、深い学びともつながったものと考えることができる。

今後の取組でも、今回の実践を踏まえ、児童がいきいきと、そして様々な経験を通して学ぶ機会を設定し、そこで学んだこと身に付け、それを日常生活へ生かす力を培うことができるようにしていきたい。

他方、課題分析表の活用や授業についての振り返りを毎回行ったことで、手順書の改善や道具の工夫、環境設定や児童への指導・支援を整理し、少ない支援で児童らが活動できる場面を増やすことができたことも大きな成果である。今後もこのような取組を継続するとともに、課題分析表については、より具体的かつ簡潔に記入する案についても研究協議から得ることができたので、改善し、よりよい授業づくりにつなげていきたい。

(イ) 分析表改善に向けて

分析表を用いたことで、自分の設定している内容が主体的学び、対話的学び、深い学びのどの要素に結びついているかを把握したり、不足している要素を確認したりすることができ、授業の流れを整理することに役立てることができた。今後の取組においても、どこを改善していけば良いかを考えるときに有効な資料となるものとする。

改善点としては、「深い学び」の項目が、「学習により得た知識・技能を『応用』し、活動を展開する。」ことと、「学んだ知識・技能を『授業場面以外へ』つなげていく」ことの二つであり、小学部段階の児童には、必ずしもそこまで結び付けられるかどうかは疑問であるため、「自ら考え、活動する」等のより達成可能な項目を設定してはどうかと考える。

4 おわりに

(1) 実践を通して

今年度小学部では、「子どもの主体的・対話的で深い学びをつくる授業づくり～評価を生かした振り返り～」を研究テーマに、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点を活用し、より良い授業改善に向けて実践に取り組んだ。

昨年度の課題であった授業における児童の変容を客観的に評価する方法については、「授業者（MT・ST）による評価」「参観者による評価」「児童自身による評価」などを活用し、事後協議を行い、評価のためのツールとしての側面からも活用することができた。

生活単元学習では、どの学年も活動の中で自己選択、自己決定の場面を設定したことで、児童自ら考え活動する場面が増えた。また、慣れない活動でも繰り返し取り組むことで知識や技能を習得することができることを改めて確認することができた。

その一方で、授業で設定したねらいがどれだけ達成できたのか、目標達成度についての事後協議での検討や達成するために必要な教師の声掛けや手順書等の工夫、視覚支援の活用などを検討する必要がある。また、児童にとっても教師にとっても明確な目標設定をすることやできるようになった力を日常で般化させることなどが今後の課題である。

(2) 分析表改善に向けて

分析表の活用により、どの活動が「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」の要素につながるのかを把握したり、不足している要素を確認したりすることができた。また、注目してほしい児童に焦点を当てて協議を進めることができ、発表する内容や話し合う内容が明確で分かりやすかったという意見もあった。しかし小学部段階の児童に対し、深い学びの項目の内容まで結び付けられるかどうかという点では疑問である。どの活動が深い学びの項目と結びつくのかどこを深い学びととらえるのか、より達成可能な項目を設定してはどうかなど、どこをどう改善していけばよいかを今後も継続して検討していく必要があると考えられる。

IV 中学部の研究

中学部テーマ「主体的・対話的に学び、生活に必要な力を身に付ける取組(2年次)」

1 はじめに

昨年度、本学部では研究テーマを「主体的・対話的に学び、生活に必要な力を身に付ける取組(1年次)」と設定し、生活単元学習での研究・実践を推進した。その方法として各クラス年2回の公開授業と授業の様子を撮影したビデオや学習過程分析表を活用した事後協議を行った。

その結果、実践を通じた授業改善に向けて、本校で試行された「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程分析表(試案)」を用い、目標を達成するために手立てが必ず講じられているか、その手立ては生徒にとって最適であるのかという観点から研究協議を進めることができた。

また、学習指導案の作成時に、本単元・本時の目標と新学習指導要領の教科等の目標・内容と照らし合わせることで、その関連性と評価を確認し明確化することができ、生徒は、学習環境の改善や教材教具の工夫により、より見通しをもって主体的・対話的に授業に取り組むことができた。

昨年度の課題としては、多様な生徒の実態を踏まえ、学習の習熟度を基準としてグループ化していく方法も考えられるが、そのことにより教師も分散されてしまい、個々の生徒への支援に支障が出てくることも予想されるので、各学年とも多様な生徒の実態に応じた「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とは何かを考えた目標設定を準備し、個々の生徒への支援方法の工夫や教師の配置等を考えた取組を検討していくこととなった。

そこで本年度の研究テーマを引き続き「主体的・対話的で深い学び、生活に必要な力を身に付ける取組(2年次)」と設定し、生活単元学習で取り組むことにした。昨年度の反省により改善された学習過程分析表を用いて授業づくりや事後協議を行い、授業改善に取り組んでいく。

2 研究経過

(1) 研究内容

- ア 主体的、対話的で深い学びの視点から授業作りを行う。
- イ 各学年は、年1回の公開授業又は年2回の研究授業を行う。
- ウ 本校のキャリア発達段階表を活用した実践を進める。
- エ 授業実践から課題や改善点を明確にすることで、授業改善を行う。

(2) 研究方法

- ア 各学年で生活単元学習の実践研究に取り組む。
- イ それぞれの授業の実践例について研究を重ねる。
- ウ 公開及び研究授業の後、授業風景等の動画を活用した事後協議を学部全体で実施する。

上述のア～ウを具体化するために他学部と同様に、今年は各学年、年1回の公開授業又は年2回の研究授業を行う。授業後の研究協議については、ビデオを視聴しながら各自が付箋(青：うまく学習できていた様子、赤：学習でつまづいていた様子及び改善案、黄：感想)に記入する方法を導入する。

以上の取り組みを通して、学習過程分析表の注目してほしい学習活動や生徒の評価等の欄を活用し、事後における検討ポイントを明確化することができ、事後協議では、学習過程分析表中の注目してほしい生徒を中心に手立てが有効であったか、目標が達成されたかを検討・評価することができる考えた。

公開及び研究授業後の研究協議における協議内容（授業者・参観者・助言者の意見や質問、助言等）を踏まえ、次回の授業に向けて授業改善につなげる取組を行う。

エ 実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

オ 学部研究日を月に一回設定するほか、各学年での研究日を随時定める。

(3) 研究計画

月1回設定されている学部研を本学部全体で行う他、本年度は学年研を研究の柱とし、公開及び研究授業に向けて学習指導案の詳細な検討や教材研究などについては各学年で行った。

中学部年間研究計画について

月/日(曜日)	研修内容
4/23(火)	・学部会にて、研究テーマの提案等
5/10(金)	・今年度の中学部の研究テーマ、研究体制などについて検討等
6/3(月) 6/7(金) 6/26(水)	・各学年での研究方法、授業研等について話し合い ・第1回校内研(今年度の研究テーマの確認) ・中学部3年第1回公開授業 ・中学部3年第1回公開授業研事後全体協議 ・中学部2年第1回研究授業
7/1(月) 7/12(金) 7/31(水)	・中学部2年第1回研究授業研事後協議 ・各学年研修 ○各生徒のキャリア発達の確認 ・アセスメント第1回「キャリア発達段階表2017改訂版」
8/26(月)	・第3回校内研 平成30年度特別支援学校教育課程研究集会(知的障害部会) ・各学年研修
9/10(火)	・各学年研修、全校公開授業研究会(11月29日(金))準備
10/1(火)	・各学年研修、中国・四国知的障害教育校PTA連合会公開授業(10月4日(金))準備
11/5(火) 11/29(金)	・各学年研修、全校公開授業研究会(11月29日(金))準備 ・第4回校内研(全校公開授業研究会)担当:中学部 ・中学部1年第1回公開授業 ・中学部2年第2回研究授業 ・中学部3年第2回公開授業 ・中学部2年第2回研究授業事後全体協議 (中学部1年と中学部3年公開授業の様子も交えながら)
12/3(火) 12/17(火)	・中学部1年第1回公開授業研事後協議 (中学部2年と中学部3年公開授業の様子も交えながら) ・学部研修(今年度の実践集録作成にあたっての説明会)
1/8(水)	・各学年で実践集録のまとめ
2/7(金) 2/19(水)	・各学年研修 ・実践研究発表会の報告(2/28(金))・中2による実践報告
3/3(火) 3/23(月)	・本年度の反省と来年度の方向性について ・アセスメント第2回「キャリア発達段階表2017改訂版」

3 研究事例

(1) 研究授業

ア 2年生における取組

(ア) 取組にあたり

本学年は、2学級、男子4名、女子3名で構成されている。生徒の中には自閉症スペクトラム障害やADHD、ダウン症の生徒が含まれていて生徒の実態や発達段階には差があり、文字の読み書きや言葉でやりとりができる生徒から、声掛けや視覚的な手掛かりを理解して行動できる生徒まで様々である。

学習中の様子や態度は、教師の説明や友達の発表を最後まで聞くことが苦手で、一方的な思いで関わろうとすることが多い者、自分の見通しと異なると学習に参加できないことがある者、失敗を恐れて、分かっていると思われる内容でも意思表示に消極的になってしまう者などの課題がある。このような学年の実態から、友達や周りの人の存在、自他の良さに気付き、適切に人と関わる力をつけていくことを大切に学習してきた。

そこで、適切な人との関わり方を中心課題にしなが、制作活動、販売学習に取り組むことにした。また、教科学習で取り組んだ学習内容を生活単元学習で繰り返し取り組むことで、知識やスキルが般化し、身に付くのではないかと考え、学年の研究テーマを「教科学習と生活単元学習を相互的に関連付けた取組の研究」とし、教科学習の内容を同時期に生活単元学習の中でも計画的に取り組んでいくこととした。

(イ) 単元計画

今回、生活単元学習において「適切な人との関わり方」をテーマに1学期と2学期に制作活動、販売学習の単元を設定し実践に取り組む。単元の実施時期及び詳細は以下のとおりである。

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		実践事例Ⅰ			実践事例Ⅱ					
		←→			←→					

【実践事例Ⅰ】単元名：なつまつりでお店を開こう ～お店の練習をしよう～ (全28時間)

- ・なつまつりを思い出そう・・・1時間
- ・なつまつりのお店を考えよう・・・1時間
- ・なつまつりのお店の名前を考えよう・・・1時間
- ・看板を作ろう・・・2時間
- ・お店の準備をしよう・・・11時間
- ・お店の練習をしよう・・・9時間 (本時6/9)
- ・なつまつり本番・・・1時間
- ・振り返りをしよう・・・2時間

【実践事例Ⅱ】単元名：ようこそ中2のお菓子屋さん (全47時間)

- ・カップケーキを作ってみよう・・・1時間
- ・お店の名前を考えよう・・・2時間
- ・商品のラベルを作ろう・・・3時間
- ・カップケーキを作ろう・・・6時間
- ・カップケーキを作って販売しよう・・・15時間
- ・販売の練習をしよう・・・3時間 (本時3/3)
- ・練習を生かして販売しよう・・・15時間
- ・振り返りをしよう・・・2時間

イ 実践事例Ⅰ

(ア) 単元名 「なつまつりでお店を開こう ～お店の練習をしよう～」

(イ) 単元設定の理由

本単元では、学校行事「なつまつり」への出店に向けて、制作活動と販売活動を組み合わせ、製品作り、店の準備、販売や接客まで一連の活動を経験することで見通しをもって取り組めるようにする。なつまつりで開く店は、ゲームと雑貨販売の店とし、ゲームの内容については生徒がアイデアを出し合って決め、自分なりに表現することや、自分とは違う意見を聞いたり知ったりすることを目指したい。そして、自分たちで決めた店をみんなで一緒に準備していくことによって、興味・関心をもって意欲的に取り組み、自分の役割を果たすことができるようにする。ゲームと雑貨の販売学習を通して、人との適切な関わり方や場に応じた言葉遣いなどのコミュニケーション能力を身に付けることができるようにしたい。その際、発音や声の大きさ、速さなどにも気を付けることができるようにしていく。また、金銭の扱いに慣れ、お金の大切さが分かるようにしたい。

(ウ) 本時における目標

- ・相手に伝わりやすい話し方に気を付けながら接客をすることができる。
- ・感想を发表或し、意見や考えを発言したりすることができる。
- ・全体練習の流れの中でも自分の担当する係の仕事ができる。

(エ) 学習活動の展開

本時では、なつまつりの出店に向けての全体練習を行う。教師がお客さんとして店を回り、一連の流れを行うことによって、生徒にお客さんの動きやそれに応じた自分たち店員の動き等、全体の流れのイメージがもてるようにする。練習の際は各班に分かれて順番に行い、それぞれの班の友達が接客しているところを見るようにする。その際には、見てほしいポイントを事前に伝え、焦点を絞って見ることができるようにする。また、接客の様子をタブレット型端末で撮影し、後でその映像をみんなで見ることで、客観的に自分の姿を見たり、焦点を絞って友達の様子を見たりし、素直な意見や気づきを引き出すきっかけを作る。

その後、気付いた点を発表できる場面を設けることで、自己評価や他者評価ができるようにし、生徒が何を改善したらよいのかという目的意識をもって練習ができるよう設定した。

活動全体を通しての目標達成に向けた「主体的・対話的で深い学び」の各要素については、表1の通りである。

また生徒2名（A、G）を例に挙げ、本単元に関わる国語と数学の教科学習の取組を表2に表す。生徒Aは会計係、生徒Gは倒れた的を数える係を担当する。

表1 本時における学習過程分析表

学 習 活 動			I 主体的な学び
【導入】	1 日直が始まりの挨拶をする。 2 前時の振り返りを行い、本時の流れを確認する。 3 本時の目標の確認をする。 4 係の確認をする。	}	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
			②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
			③興味・関心を高める題材及び活動設定
			④興味関心を高める教材教具の活用
【展開】	5 全体練習をする。 ・空気砲 ・雑貨屋	}	II 対話的な学び
			①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
			②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
			③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
【まとめ】	6 動画の確認をする。 7 係別の個別練習をする。 8 全体練習をする。 ・空気砲 ・雑貨屋	}	④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
			⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
			III 深い学び
			・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。
【まとめ】	9 学習の感想を発表する。 10 本時の振り返りをする。 11 日直が終わりのあいさつをする。	}	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「5、8全体練習をする。」	生徒Aは空気砲班の会計を担当する。数学や国語でも練習してきたお金のやり取りや接客時の話し方を思い出せるように繰り返し練習したり、マニュアル等を参考にしたリしながら自分の係の仕事に自信をもって取り組むことができるようにする。
展開「5、8全体練習をする。」	生徒Gは空気砲班の倒れた的を数える係を担当する。係の仕事の流れを示した手順書を見て、自分で行うことができるように取り組む。また、倒れた的だけを数えることは端的な言葉がけと指差しで伝えるようにする。

表2 本単元に関わる国語と数学の取組

	国語	数学
生徒A	<ul style="list-style-type: none"> 丁寧な言葉遣い 声の大きさ 読む速さ ※すべてかるたを通して 	<ul style="list-style-type: none"> 硬貨の名前・違い 50円硬貨 10円硬貨の数え方 100円硬貨

生徒G	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧な言葉遣い ・声の大きさ ・読む速さ ※すべてかるたを通して 	<ul style="list-style-type: none"> ・50までの数唱・点つなぎ ・15までの具体物の数数え ・仲間集め ・20以下の数から目的のものを選び数える
-----	--	---

(オ) 成果と課題

本時は、「相手に伝わりやすい話し方に気を付けながら接客をすることができる。」「感想を発表したり、意見や考えを発言したりすることができる。」「全体練習の流れの中でも自分の担当する係の仕事ができる。」の3点を目標に活動に取り組んだ。

「相手に伝わりやすい話し方に気を付けながら接客をすることができる。」については、単元を通して、接客をする際の話し方として、4つのポイント（①声の大きさ②速さ③丁寧な言葉遣い④態度）を伝えるようにした。販売練習をする時には、このポイントを実際に手本を見せながら生徒たちに伝えて、個別練習に取り組んだ。これまで生徒たちは、言葉でのコミュニケーションができる生徒であっても、伝えることに精一杯で、相手にどう聞こえているか、伝わっているかということまで考えられていなかった。また、発音が不明瞭で相手に伝わりにくいという経験がある生徒も、どうすれば聞き取りやすくなるのか、伝わりやすくなるのかということが分からなかった。そこで、本単元で店を出し、店員という立場になることで、お客さんに伝わりやすい話し方や丁寧な態度をとらなくてはいけない、沢山のお客さんに来てもらいたいという気持ちが出てきたことをきっかけに、「相手に伝わりやすい話し方に気を付けながら接客をすることができる。」という目標に向けて主体的に取り組むことができた。このような取組から、緊張しながらも大きな声で言おうとしたり、マニュアルを確認しながら丁寧な言葉遣いで接客しようとしたりと、生徒たちは4つのポイントを少しずつ意識できるようになってきた。

「感想を発表したり、意見や考えを発言したりすることができる。」では、動画を見ての振り返り場面で、自分や友達の販売の様子を見て、感じたことや気付いたことを発言できるということを目指して取り組んだ。その際は、テレビ画面のすぐ下に4つのポイントを書いた紙を張ることで生徒がすぐに確認できるようにした。実際自分たちの様子を動画で見るという振り返りの活動は、自分の姿を客観的に見ることができ、興味津々だった。練習後すぐに動画で確認できたので、良い点や改善点を意識しやすかった（即時評価）。また、画面という限られた枠に映すことで、見てほしいところを焦点化しやすい、という利点があった。生徒からは片言ではあったものの、友達の様子を見て、良かったところを発言することができた。自分や友達の様子を見て、友達からの評価を受けて、次からの自分の練習へと生かそうという意識も生まれたように感じた。

「全体練習の流れの中でも自分の担当する係の仕事ができる。」では、それぞれの係に分かれた個別練習を繰り返し行っていたこともあって、全体練習の流れの中でも自分の担当する役割を務めることができた。また、個人に合わせた手順書は手掛かりとなり、お客さん役の教師に対して練習通りの接客をすることができたことから、有効であった。

以上のことから本時の目標は一定達成することができ、「主体的・対話的で深い学び」にある程度配慮した学習活動ができた。

一方で、今後の課題として、「相手に伝わりやすい話し方や態度」では、ポイントは理解しつつもまだ身に付いていないこと、明確な評価基準がなかったこと、マニュアルを読むことに精いっぱい、棒読みになっていたことが挙げられる。また、「意見や考えを発言すること」では、教師が問いかけないと発言することが少なかったこと、発語がない生徒の参加の体制について、が挙げられる。「自分の担当する

仕事ができること」では、手順書を見て、手順書の情報が多すぎて生徒の実態に合っていないものがあったことが挙げられる。また、もっと生徒主体の授業を進めるため、司会を生徒が行ってはどうかというアドバイスも受けた。これらの課題を見直し、改善が必要であると考えた。

教科学習との関連については、生徒Aはゆっくり話して接客することが目標であったことから、国語ではかるたを通して、札を読むときに適切な声の大きさ、話す速さを学習した。また、金銭の学習については数学で行った。1円から1000円までの金種の名前や見分け、なつまつりの射的の店の料金である50円の学習を行った。生徒Gは国語では同じかるたを通して声の大きさや速さの学習に取り組んだ。数学では数唱や沢山ある物の中から指定されたものを数える学習に取り組んだ。

2名とも、教科学習で基礎的な部分を段階的に行い、生活単元学習でその知識を使って実践的な活動をする→うまくいかなかった部分を教科学習で取り組む→生単で活動する、という流れで取り組むことによって、PDCAサイクルが機能した。また、生徒Aは、教科学習が生活の場面でも生かせることが分かることで、意欲にもつながり、何のためにこの学習をしているか、何をすることが必要なのか、ということを理解しながら取り組むことができたように考える。

■注目してほしい児童生徒の評価 (※【目標達成度について】 A:十分達成できた。 B:ほぼ達成できた。 C:あまり達成できていない。 D:達成できていない。)

生徒名	本時の評価規準 (抜粋)	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくり大きな声で話そうとすることができたか。 ・金種を見分け、金額を正しく数えることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・客に聞こえる声の大きさ、速さで話すことができた。 ・焦りがあり、受け取ったお金をほとんど見ずに受け取った。手順書の改善をする必要がある。 	A D
生徒G	<ul style="list-style-type: none"> ・担当する係の仕事を理解し、流れに沿って行うことができたか。 ・倒れた的の数を数えることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手順書を見て、一人で係の仕事をすることができた。 ・倒れた的を正確に数えることができた。 	A A



図1 生徒Aの会計時の様子



図2 生徒Gの係の様子

ウ 実践事例Ⅱ

(ア) 単元名 「ようこそ中2のお菓子屋さん」

(イ) 単元設定の理由

本単元では、調理活動でカップケーキを作り、その後販売活動をする。製品作り、販売や接客まで一連の活動に繰り返し取り組むことで、見通しをもって取り組めるようにする。また、数学や国語の学習でも本単元と関連付けた学習に取り組んでいく。カップケーキの材料の重さや量の量り方や調整の仕方、販売時に必要な金種やお金の数え方、個数の数え方の学習は数学でも関連付けて行う。また、丁寧な言葉遣いや態度、適切な声の大きさ、聞き取りやすい話し方などは国語の学習でも行う。

教科学習で基礎的な学習に取り組み、その力を生活単元学習の調理、販売学習で般化できるようにしたい。

(ウ) 本時における目標

- ・意見や考えを表現することができる。
- ・相手に伝わりやすい話し方や態度に気を付けながら販売をすることができる。

(エ) 学習活動の展開

表3 本時における学習過程分析表

学 習 活 動		
【導入】	1 日直が始まりの挨拶をする。	<p>I 主体的な学び</p> <p>①学習活動への展開構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等) <p>②見通しを高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援 <p>③興味・関心を高める題材及び活動設定</p> <p>④興味関心を高める教材教具の活用</p> <p>II 対話的な学び</p> <p>①モノと関わり、活動につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。 <p>②他者に情報を伝え活動につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。 <p>③他者からの情報を活動につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。 <p>④仲間と活動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。 <p>⑤活動を評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。 <p>III 深い学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。
	2 前時の振り返りを行い、本時の流れを確認する。	
【展開】	<p>・本時の目標の確認をする。</p> <p>販売の様子をふりかえり、練習をしよう</p>	
	3 1班、2班、3班の順で前時の販売の時の動画を見て振り返る。	
【まとめ】	4 各班に分かれ、自己評価シートと他者評価を見比べる。	
	5 班ごとに販売練習をする。	
	6 1班、2班、3班の順で、販売の模擬練習をする。	
	7 本時の振り返りをする。	
	8 日直が終わりの挨拶をする。	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「3動画を振り返る」 「5班ごとに販売練習をする」	生徒Aは1班で会計を担当する。数学や国語でも学習し、100円の理解とお客さんのやりとりが模擬練習でもできるようにする。また、動画を見て、自分や友達の販売の様子を評価し、良かったところを見つけられるよう、ポイントを事前に伝えるようにする。
展開「5班ごとに販売練習をする」	生徒Gはお客さんが指定したカップケーキの種類を選んで取り、渡す役割を担当する。カップケーキの種類と個数を視覚的に示し、せりふや流れを手順書で示すことで見通しをもって取り組めるようにする。支援は端的な声掛けと指差し、イラスト等を用いて行う。

本時では、カップケーキの販売場面の動画を見て、適切な言葉遣いや態度で接客することができた

かをみんなで確認し、次の販売活動に生かすことをねらいとする。

展開では、3つの販売グループごとに、順に前時で行った販売時の様子を動画で見て、みんなで確認していく。声の大きさ、言葉遣い、態度、表情というポイントに絞り、自分たちで評価をしていく。これは1学期の行事のなつまつりのお店の練習でも取り組んできたポイントである。また、関連する内容を国語でも学習していく。本単元では販売学習に取り組んだ後、自己評価シートに販売時の自分の評価を記入するようにしている。そこで本時では、前時に記入した自己評価シートを見せることで、自分で思っていた評価と周りの人が見て感じた評価との一致や不一致についても意識できるような声掛けをしていく。友達から評価を受けたり、自分を客観的に見たりすることで、本来の自分の姿を的確に捉えられることをねらいたい。動画を見て評価をする時には、「いいね」のプレートを上げることで、発語がむずかしい生徒にも意思表示ができるようにする。さらにどこが良かったのかを発言できる生徒には問いかけて、自分の考えや気持ちをみんなの前で発言する練習となることも期待している。展開時は生徒が司会を務め、生徒主体の授業ができることを目指す。

その後、班別に分かれて教師と一緒に自己評価シートと他者評価とを比較し、改善できるところを探すようにする。そして、各班で販売練習をし、それぞれの課題に応じた練習をすることによって、生徒が何を改善したらよいかという目的意識をもって練習ができるようにしたい。

本単元に関わる国語と数学の取組を表4に示す。生徒Aは会計係、生徒Gはカップケーキを取って渡す係を担当する。

表4 本単元に関わる国語と数学の取組

	国語	数学
生徒A	<ul style="list-style-type: none">文章の音読主語・述語の文章構成	<ul style="list-style-type: none">数の大小100円の学習重さ
生徒G	<ul style="list-style-type: none">文章の音読主語・述語の文章構成	<ul style="list-style-type: none">物の種類を分け、数える学習数の大小量

(オ) 成果と課題

本時は、「意見や考えを表現することができる。」「相手に伝わりやすい話し方や態度に気を付けながら販売をすることができる。」の2点を目標に取り組んだ。

「意見や考えを表現することができる。」では、前時のカップケーキ販売の様子を動画で振る活動場面での目標である。実践事例Ⅰでの取組では、同じように動画を見て振り返る場面で、教師の問いかけがないと、自分から発言することが少なかったこと、発語がない生徒の意見の表し方について課題となっていたことがあった。そのため、実践事例Ⅱでは「いいねプレート」を活用するようにした。まずはいいと思ったらプレートを上げて意思表示をする。そして、どこが良かったかを発表できる生徒は意見を言うという段階的な流れにしたことによって、前述の課題は発語がない生徒の意思表示ができるようになったり、意見を出しやすくなったりし解決することができた。

「相手に伝わりやすい話し方や態度に気を付けながら販売をすることができる。」では、自分たちの様子を動画で振り返った後、課題となったところをグループに分かれて練習する場面での目標である。その際、実践事例Ⅰから取り組んできた、販売時の声の大きさ、言葉遣い、態度、表情というポイントにおいて、「いいねプレート」が上がった数と自己評価を見比べて、自分の課題に沿った練習を行った。練

習を行うときには販売マニュアルや声の大きさグラフ等の視覚支援を用意して取り組んだ。生徒は評価が目に見えて分かったことにより、課題意識をもって練習をすることができたことは、対話的で深い学びへとつながったと考える。

教科学習との関連については、生徒Aは接客時にゆっくり大きな声を意識して受け答えができたかという目標から、国語では 文章を音読し、声の大きさや発音、読む速さについての学習をした。また、販売時の言葉遣いを意識できるよう、主語と述語が入った文章を作る学習にも取り組んだ。数学では、金種を見分け、金額を正しく数えることができたかという目標と関連付け、1学期から取り組んでいるお金の学習に引き続き取り組んだ。カップケーキは1個100円と設定したため、100円硬貨はもちろん、50円硬貨2枚や10円硬貨10枚が100円であることも学習した。生徒Gは声の大きさの調整が目標だったため、国語では 声の大きさに気を付けながら文章の音読に取り組んだ。また、3種類のカップケーキからお客さんが指定した種類を選び、正確に数え取ることが目標だったため、数学では1学期から引き続き、20以下の数から指定されたものを選び数える学習を行った。

教科学習で学んだ内容を生活単元学習でも取り組むことによって、双方から一つの目標に向かって取り組むことができたことから、生徒Aは実践事例Iと同じくそれぞれの学習が単体で終わらず関連しているという意識をもって取り組むことができた。そのことから教科学習にも、生活単元学習にも目的意識をもって意欲的に取り組むことができた。生徒Gは取組当初、生活単元学習の販売の手順がすぐには身に付かず、不安定になっていたことがあったが、数学の時間にカップケーキの模型を使って3種類の中から指定されたカップケーキを選び数える練習をすることでやり方が分かり、生活単元学習でも落ち着いて取り組むことができるようになった。

■注目してほしい児童生徒の評価（※【目標達成度について】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。）

生徒名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒A	<ul style="list-style-type: none"> 接客時にゆっくり大きな声を意識して受け答えができたか。 金種を見分け、金額を正しく数えることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ゆっくり大きな声で販売練習をすることができていた。 金種を見分け、正しく数える機会を作れなかった 	A D
生徒G	<ul style="list-style-type: none"> 声の大きさを調整し、販売練習をすることができたか。 指示されたカップケーキを正確に数えて客に渡すことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 声の大きさのグラフを見て、大きな声で販売練習をすることができた。 ペアの友達が書いた用紙を見て、指示されたカップケーキを正確に数えることができた。 	A A



図3 評価基準の提示の様子



図4 生徒が司会をしている様子

エ 2年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

これまで年間の取組を計画するときには、各教科、生活単元学習、特別活動といったようにそれぞれ

に学習内容を計画し、取り組むことが多かった。そのため、教科学習で取り組んでいる内容はその時間内だけに留まり、本当に必要な生活場面での力へとつなげることが難しかった。

そこでこのような課題を解決するために、今年度は「教科学習と生活単元学習を相互に関連付けた取り組み」をテーマに学年で取り組んできた。国語と数学の学習内容と生活単元学習の単元を連動させて計画していくことによって、同時期に同じ内容の学習が双方でできるようにした。

今回の実践を通して良かったことが三つある。一つ目は、販売学習を通して、生徒は自分の言葉遣いや態度などを意識することができたことである。今回はお客さんに対する態度であったため、今後は限られた場面ではなく生活場面にもつなげていきたい。二つ目は、教科で学習したことを生活単元学習で応用的に取り組む、そこでうまくいかなかったところを、また教科の時間に個別的に学習することで、教科と生活単元学習の間に PDCA サイクルが生まれ、横断的な学習を進めることができたことである。そのため、教科と生活単元学習を関連付けて取り組む方が、より丁寧に生徒の実態に応じた取組を行うことができ身に付きやすかった。三つ目は、教科学習に取り組んでいる生徒が、目的意識をもって学習することができていたことである。何を何のために学習しているのかということ、生活単元学習を通して理解し、見通しをもって主体的に取り組む意欲へとつながった。

以上のことから教科と生活単元学習を関連付けることによって、知識やスキルがより般化し、身に付いたと考える。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

学習過程分析表を記入することにより、授業の流れが一目で分かり、また、主体的、対話的で深い学びの観点も確認することができた。参観者にとっても指導案のような長い文章で説明したものを読むよりも、分かりやすいのではないだろうか。今後は公開授業では、略案と学習過程分析表を併せるような形のものを作成することで、授業者の負担も、参観者の負担も減ると思う。但し、学習過程分析表は一回の授業の分析はできるが改善にはつながりにくかった。単元が変わると流れや視点も変わってくるため、負担がない程度に同単元で何度か記入をし、分析をしていくことで授業改善を図り、学習過程分析表を作成する意味を深めていく必要があると考える。

(2) 公開授業 1

ア 1年生における取組

(ア) 取り組みにあたり

本学年は、中学部1年生の3学級14名(男子7名、女子7名)の生徒で構成されている。そのうち10名は、本校小学部以外の小学校からの入学生である。生徒の実態は、自閉症9名、肢体不自由2名(重複)である。会話でのやりとりや手順書を理解して活動できる生徒、視覚支援や個別の指示があれば活動できる生徒、言葉はないが視覚支援や声掛けで活動でき、イラストカードで要求できる生徒、体力的にも歩行が不安定なため、長距離を歩くことが苦手な生徒、場面によっては不安定となりなかなか集団に入りにくい生徒、教室環境が気になり離席することもあるが、見通しをもつことや安定した状態であれば授業に参加することができる生徒など、実態や支援の内容に幅がある。

4月当初、学年の目標を生徒たちが話し合い、「友達や先生の名前を覚える」「仲良くする」「勉強をがんばる」に決まった。生徒同士の関りなどを深めていくことをねらいとし、学年の研究テーマを「友達や教員と関わりながら、主体的に対話的に活動できる授業を目指して」と決め、全員が学習する生活単元学習を中心に取り組むことにした。

(イ) 単元計画

a 生活単元学習の年間計画

4月	5月	6月	7月	8月	9月
<ul style="list-style-type: none"> ・1年生スタート ・校内探検 ・日高村探検 〔図書館・スーパー・郵便局〕 ・実のなる木 	<ul style="list-style-type: none"> ・買い物学習 〔苗購入〕 ・学級農園 ・夏まつりに向けて 〔事前学習〕 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏まつりに向けて 〔看板・ポスター・ゲーム・チケット等制作活動〕 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏まつりに向けて 〔ゲーム等制作活動・お店準備〕 ・学級農園 ・調理学習 〔カレーライス作り事前学習〕 〔畑の野菜のカレーライスとサラダ作り〕 ・アルバム整理 ・実のなる木 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏休み 	<ul style="list-style-type: none"> ・実のなる木 ・お楽しみ会 ・映画館体験学習
10月	11月	12月	1月	2月	3月
<ul style="list-style-type: none"> ・ものづくり名人 〔和菓子作り〕 ・宿泊学習事前学習 ・カレーライス作り ・宿泊学習事後学習 ・芋掘り ・日高中交流学習事前学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・日高中交流学習事前調理 ・調理学習 〔畑のさつま芋スイーツ〕 ・映画館体験学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・校外学習事前学習 ・調理学習 〔カレーライス作り事前学習〕 〔カレーライス作り買い物学習〕 〔カレーライス・畑のさつま芋サラダ作り〕 ・アルバム整理 ・実のなる木 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALT事前学習 ・正月遊び ・校外学習事前学習 ・映画館体験学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・校外学習 ・調理学習 〔畑の野菜〕 	<ul style="list-style-type: none"> ・調理学習 〔畑の野菜〕 ・アルバム整理 ・実のなる木 ・映画館体験学習

*一年を通じて【貯金学習・販売学習・買い物学習・調理学習・誕生日会】

【学級農園(ピーマン・ナス・トマト・きゅうり・さつま芋・大根・ブロッコリー)】

b 実践事例の単元計画(全11時間)

第1次 さつま芋を収穫しよう・・・・・・・・・・2時間

第2次 収穫したさつま芋でスイーツを作ろう・・・・9時間(本時8/9)

※さつま芋は、6月につるを植え、水やりや観察は各クラスで行った。

イ 実践事例

(ア) 単元名 「収穫・食欲の秋！ ～さつまいもスイーツを作ろう③～」

(イ) 単元設定の理由

本学年の教科体制は、クラス別ではなく、生徒の実態に合わせて3グループに分かれて学習を行っている。本単元は2グループの生徒を対象とする。学習環境や生活環境の違いにより、日常生活や学習態度に必要な力に差が見られた。こだわりがある生徒、自分の思いのまま行動してしまう生徒、指示待ちの生徒、細かい作業が苦手な生徒、学習活動が理解できると落ち着いて参加できる生徒など様々である。また、語彙の幅が狭く、会話のキャッチボールが成立しないことが多い。それぞれの興味・関心は異なるが、食べることに限っては、全員が興味・関心をもっている。その中でも調理は好きな学習活動であり、集団（小集団）の中で意欲的に活動に参加できると考える。調理をする経験が少なくいろいろな場面で教師の支援が必要である。調理の基本である、材料を洗う、切る、混ぜるなどの簡単な工程を繰り返し調理器具の扱いに慣れることや、手順書を見て確認することまた、友達と関わりをもちながら楽しく調理を進めることができるように支援したいと考えた。本単元では、食べることに興味・関心があることを生かし、一つの活動に集中して取り組めること、苦手なことに挑戦しようとする気持ちを引き出すこと、また、手順書をもとに、友達とやりとりをしながら取り組めることをねらいとする。調理活動を通して得た力を日常生活に生かすことができるように、「切る」「計る」「混ぜる」などの工程を個々に合った支援で取り組み、「できた」「もっとやってみたい」という気持ちを高めていきたい。また、手順書を見て確認したり、分からない時は内容の説明を聞きに来たりして、自ら行動できるようにしていきたい。任されたことは責任をもって最後まで取り組むことはもちろんだが、それと同時にグループ活動をしていることを意識させ、仲間のことも考えて行動できるように声掛けをしていきたい。作る工程において、「切る」「計る」「混ぜる」などを分担して行う。自ら進んで活動できるように、材料や調理器具、手順書を準備する。「切る」工程では、包丁を安全に使えるように持ち方をしっかり教える。包丁の柄をしっかりと持てるようになることで、怖さがなくなり力を抜いて切る動作を身体で覚えることができ「できた」と自信につなげたい。調味料が正確に計量できていないとスイーツの味が変わることを考えさせたい。一人一人が責任をもって活動することで、一つのスイーツが完成する喜びを味わうことができるようにしたい。この調理活動を通して、「できた」という自信や「やってみたい」「楽しい」という気持ちを生活のいろいろな場面で生かし、将来の自立した生活の基礎になる生きる力につなげていきたい。

(ウ) 本時における目標

- ・ さつまいもを切ったり、調味料を計ったり、材料を混ぜ合わすことができる。
- ・ 手順書を確認しながら、スイーツを作ることができる。
- ・ 自分の役割を果たすと同時に友達とも協力することができる。

(エ) 学習の展開

過程	学習活動	指導上の留意点	
		全体	各生徒
導入 (10分)	1 挨拶 2 前時の振り返り 3 本時の活動内容確認 ※1グループは中1A、3グループ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時間どんな調理をしたかグループごとに確認する。 ・ 本時も同じ調理活動を行い、役割も同じこ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意見を発表する時の約束を確認する。(2、3グループ)

	は中1Cの教室に移動する。	とを確認する。	
展開	<p>(展開1)</p> <p>4 準備</p> <p>○身支度をする。</p> <p>○手を洗う。</p> <p>5 スイーツ作りの説明を聞く</p> <p>○役割をホワイトボードで確認する。</p> <p>○手順の確認</p> <p>○調理器具の準備</p> <p>・各班の台に準備する。</p> <p>(1班：A、B、F)</p> <p>(2班：C、D、E)</p> <p>○調理器具の使い方</p> <p>(展開2) <公開授業></p> <p>6 調理</p> <p>「さつま芋マフィンを作ろう」</p> <p>○各班で始める。</p> <p>【手順】</p> <p>①材料(バター・砂糖)を混ぜる。 (ハンドミキサー使用)</p> <p>②溶き卵を加える。 (ハンドミキサー使用)</p> <p>④材料(薄力粉・BP)を加えて混ぜる。(ゴムべら使用)</p> <p>④型に生地を入れて焼く。 (オーブン使用)</p> <p>7 トイレ休憩</p> <p>(展開3)</p> <p>8 収穫祭</p> <p>※1, 3グループは、完成したスイーツを持って調理室に集合する。</p>	<p>・調理を始めることを意識させる。</p> <p>・役割が何かを一人一人発表させる。</p> <p>・手順書を見ながら確認する。</p> <p>・めくり式の手順書とA4の手順書を用意する。</p> <p>・各班で協力して探して、提示例のように各調理台に並べる。</p> <p>・実際に使い方を模範する。</p> <p>・手順書に沿って調理を進める。できるだけ自分たちでできるように声掛けをする。</p> <p>・スイーツが完成したグループは報告をし、収穫祭ができるようにお皿にきれいに並べる。</p> <p>・2グループが並べているお皿にそれぞれのスイーツを並べる。</p>	<p>・身支度が素早くできるように声掛けをする。(全)</p> <p>・自分の役割を教師と確認する。(C、F、)</p> <p>・調理台3に提示してある物を見て準備するように声掛けをする。(全)</p> <p>・包丁の正しい持ち方(C、D、E、F)</p> <p>・正しい計量の仕方。(A、B)</p> <p>・友達と関わりをもちながら調理できるような場面を多く設定する。(B、E)</p> <p>・紙皿に置く位置の見本を提示する。</p> <p>・提示している見本を見てきれいに並べる。</p>

	○ 3種類のスイーツを食べる。 9片付け 10投票	・友達の作ったスイーツの感想を伝えるように促す。 ・食べ終わった生徒から、お皿を洗って片付けるように声掛けをする。 ・片付けが終わった生徒から、おいしかったスイーツにシールを貼る。	
まとめ	11本時の振り返り ・投票の発表 12次時の学習について 13挨拶		

表1 本時における学習過程分析表

学 習 活 動			I 主体的な学び
【導入】	1 挨拶 2 前時の振り返り 3 本時の活動内容確認	}	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	【展開】		②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
			③興味・関心を高める題材及び活動設定
【まとめ】	(展開1) 4 準備 ・身支度をする 5 説明を聞く	}	④興味関心を高める教材教具の活用
	(展開2) <公開授業> 6 調理 ・自分の作業を確認する ・各班でマフィンを作る		II 対話的な学び
	7 トイレ休憩		①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
	(展開3) 8 収穫祭 ・持ち寄ってスイーツを食べる 9 片付け 10 投票		②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
	11 本時の振り返り 12 次時の学習について 13 挨拶		③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
		④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。	
		⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。	
		III 深い学び	
		・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。	
		・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開2「グループでマフィンを作ろう」	生徒Eは、食べることに関心が強く、その気持ちを自分たちで作って食べることに結びつける。友達と関わり合いながら調理を楽しみ、基礎的な技能を身につけられるようにする。

■注目してほしい児童生徒の評価（※【目標達成度について】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。）

生徒名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒E	<ul style="list-style-type: none"> ・正確に計量することができたか。 ・手順書の内容を読み取ることができたか。 ・手順書を見て調理ができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分量表を見て、確認して計量することができた。 ・手順書を見て、自分から活動することができた。 ・専門語は難しかったが、その他の内容は読み取ることができた。 	A B B

（オ）成果と課題

本単元の「収穫・食欲の秋！ ～さつま芋スイーツを作ろう③～」では、生徒6名の食べることに興味・関心が共通していた。そのことにより各教科とのつながりをもたせながら学習を進めた。例えば、調理器具の名前や手順書の読み取りは「国語」、材料の数字の見方は「数学」といった教科を通して関連付けて学習できるようにすることで、生徒の興味・関心を引き出すことができた。

自分たちで苗を植え、育て、収穫したさつま芋を使って、手順書を確認し友達と助け合いながら、調理をする「楽しさ」「できた」喜びを感じることができた。

教師が見本に提示した調理器具と見比べながら準備することができた。調味料の種類と分量の分量表（写真①②）を準備したことにより、手際よく主体的に材料を整えることができた。さらに、手順書を読みながら（写真③）楽しく活動できた。

指示するのではなく、考えることができる問いかけをすることで、自分で気づき行動ができ「できた」という自信につなげることができた。（写真④）「また、お菓子作りをしたい」と全員が振り返りをした。

今後の課題は、この活動を通して学んだ、「できた」という自信や「やってみたい」「楽しい」という気持ちを日々の生活や学習の場面に般化させることである。また、自立に向けた基礎を生活単元の授業だけではなく、国語・数学などの教科に結び付いた内容を取り入れることである。

ウ 1年生における取組のまとめ

（ア）実践を通して

1学期当初は、外部からの新入生が多いこともあり、学級ごとに「校内探検」を行った。その中で本校からの新入生の一人が校内を案内することができた。また、「なつまつり」に向けては、お店の準備（名前・内容・景品等）や、当番の役割を練習する中で、友達に声掛けをするなど、協力できてきた。そして看板を作製する中でも、友達が色塗りをしやすいように看板の向きを変える姿も見られた。特に当日のお店当番では、お客さんへの対応もでき、自信をもって活動できるようになってきた。

2学期の運動会、宿泊学習、校外学習などに取り組む中で、自分の役割を果たす喜びや達成感を得ること、生徒同士や教師との関わりを深めたりすることができてきた。

映画館体験学習では、今までは教師がチケットや、売店で販売を行ってきた。3学期には、生徒自らがやってみたい気持ちに変化してきたので取り組みたい。

このように、学級を基本として、教科グループでのつながり、学年全体での学習を通して生徒同士の関りはより深まっていった。自分から手を挙げ、意見を発表することや友達の困っていることに寄り添うことも見られるようになってきた。

我々教師は、「待つ姿勢」「必要最小限の言葉掛け」などを大切にしながら、生徒の成長を支援していきたいと考える。

(イ) 学習過程分析表の改善に向けて

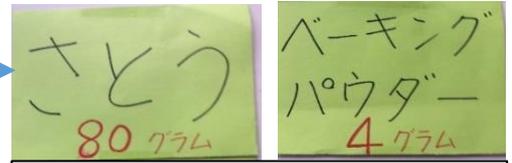
学習過程分析表を活用することは、生徒の活動を考える機会とはなったが、今回の授業の中では全て活用することは難しかった。

注目してほしい学習活動や注目してほしい生徒の評価については、一人の生徒に焦点を当てることができたのはよかった。



大きな文字で分かりやすく表示されたメモを見ながら計量している

写真①



分量表を真ん中に置くことで、両側から確認することができ、計量済みの容器を分量表の横に並べることができた。

写真②



手順書を読み上げて活動している。友達に聞こえる声で読んでいる。

写真③



生徒たちだけで活動しているのを少し離れた場所から教師が見守っている。

写真④

(3) 公開授業 2

ア 3年生における取組

(ア) 取組にあたり

昨年度、本学年は、テーマ「生徒が主体的に意欲をもって、達成感が得られる授業を目指す取組」から授業づくりを行った。発達段階に差異が大きい生徒がペアで同じ係活動を行うことで、活動への見通しや意欲に変化がみられ、一定の成果となった。しかし、集団での学習場面で「主体的な学び」や「対話的な学び」に個人差があり、生徒の実態に応じた達成感や評価において課題が見られた。

そこで、本年度は、学部テーマ「主体的・対話的に学び、生活に必要な力を身に付ける取組（第2期）」から、学年テーマを「みんなで作る一つのお店～自立活動の観点から～」として、集団での学びの場面に焦点を置き、自立活動の観点から生徒の実態に応じた手立てを行うこととした。発達段階や特性の違いから様々な学び方をする生徒一人一人が集団での「役割」や「協力」を意識しながら、お互いに学び合うことができるような学習計画を行うこととした。

また、①生徒それぞれが自己の力を発揮できる学習活動、②将来の生活に般化できる学習内容の2点から授業づくりを行い、生徒の発達段階に応じた深い学びを実現したいと考えた。

生徒の実態から学習計画を行う上での自立活動の観点は以下である。

①生徒それぞれが自己の力を発揮できる学習活動（主体的な学び）

「心理的な安定」

- (1) 情緒の安定に関する事。
- (2) 状況の理解と変化への対応に関する事。

「環境の把握」

- (1) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関する事。

②将来の生活に般化できる学習内容（対話的な学び）

「人間関係の形成」

- (1) 他者とのかかわりの基礎に関する事。
- (2) 他者の意図や感情の理解に関する事。
- (3) 自己の理解と行動の調整に関する事。
- (4) 集団への参加の基礎に関する事。

「コミュニケーション」

- (1) コミュニケーションの基礎的能力に関する事。
- (2) 言語の受容と表出に関する事。
- (3) 言語の形成と活用に関する事。
- (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関する事。
- (5) 状況に応じたコミュニケーションに関する事。

(イ) 単元計画（全 30 時間）

第1次「お店を作ろう。」（20 時間）

第1時 なつまつりオリエンテーション・・・2時間

第2時 装飾作り・・・・・・・・・・・・・6時間

第3時 製品作り・・・・・・・・・・・・・12時間

第2次「販売しよう。」（6 時間）

第1時 接客オリエンテーション・・・・・・・・・・2時間

第2時 接客練習、お客さん体験・・・・・・・・・・4時間

第3次「宣伝しよう。」（4 時間）

第1時 「よさこい日高」広報活動①・・・3時間

第2時 「よさこい日高」広報活動②・・・1時間

イ 実践事例

(ア) 単元名「みんなで作る一つのお店～お店を作ろう～」

(イ) 単元設定の理由

a 生徒観

本校の中学部3学年は、2クラスで構成されており、男子6名、女子3名の計9名で構成されている。個人の特性によって実態は様々であり、支援度の高い生徒は、特に情緒の安定に課題が見られることから、それぞれ自立活動の観点に基づいた手立てを行っている。本学年は、中学部1学年から作業学習を通して、「挨拶、返事、質問、報告をする」「作業に集中する」「準備、片付けをすすんでする」「時間を守る」の4つの目標に取り組んできた。しかし、働く目的についての意識は低く、称賛されることで自分の役割を果たそうとしている。また、自分たちが作った製品や接客対応など、他者評価に関心をもつ姿は見られなかった。知識や経験が断片的になる特性から、活動の目的や成果、他者評価に関心を向けることが難しく、理解を促す上で工夫が必要であると考えられる。

b 単元観

「なつまつり」は、生徒が毎年楽しみにしている学校行事である。生徒は、販売や接客を行うことのみならず、他店の催しへの参加や品物の購入を楽しみにしている。

本単元は、中学部3年間の作業学習で積み重ねた経験を踏まえ、各教科で身に付けた知識や技能を般化させて、出店準備を行う学習活動である。中学部最上級学年であることから、学校生活に見通しをもち更なる成長を促せる機会であると考えた。保護者のみならず地域からの参加者も多いことから初対面の人への臨機応変な対応「思考力・判断力・表現力」が必要である。この単元を通して、「自分の知っていることやできることをどう生活に使うか」と考える場面を設定し、様々な場面で主体的に行動ができるようになることを目指したいと考えた。

c 指導観

学習習熟度や個々の課題を基に2つのグループに分かれて出店準備活動を行う。それぞれのグループの発達段階に応じた学習内容で、生徒が自ら学習を進めることができるように過度な支援にならないことを十分に留意していきたい。自分の姿を客観的に見ることや生徒がお互いに評価することができるような場面を設定することで、他者評価に関心をもつことができるようになることを考える。支援度の高い生徒は、情緒の安定を図りながら、自立活動の観点からスモールステップで学習を行っていき、社会性や認知の概念形成を行っていく。生徒自身が「何ができるようになるか」を理解し、授業後に「〇〇ができるようになった」と視覚的に示し、言葉にすることで、働く目的を意識させたい。また、出店活動に自信をもつことで達成感を感じられるようにしたい。自分の役割から得意なことを意識すると共に、友達の役割や得意なことについて確認し合うことで、自主性や他の意見を聞こうとする姿勢を育てたいと考えた。活動内容の振り返りを丁寧に行うことで、深い学びへとつなげたい。

(ウ) 本時における目標

a 単元目標

- ・活動に必要な物を自分で準備することができる。（「知識・技能」）
- ・みんなでお店を作るという目的を理解し、他者の意見を受け入れることができる。（「思考力・判断力・表現力」）
- ・多くの人に来客してもらうことに期待感や達成感をもち、工夫することができる。（「学びに向かう力・人間性等」）

b 本時における目標

- ・製品作りをすることができる。(「知識・技能」)
- ・自分の役割を発表することができる。(「思考力・判断力・表現力」)
- ・友だちの役割について考えることができる。(「学びに向かう力・人間性等」)

(エ) 学習活動の展開

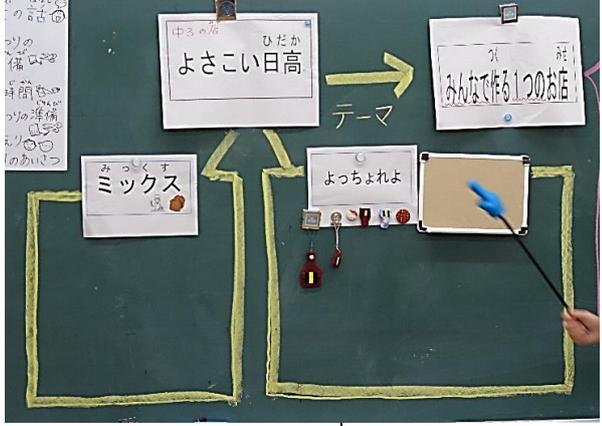
a 学習活動分析表

学 習 活 動		I 主体的な学び
【導入】	1 始めの挨拶をする。	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	2 本時の学習の流れを確認する。	
【展開】	3 「なつまつり」の確認をする。 ・お店の名前を確認する。 ・テーマを全員で読み上げる。	②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
	4 自分の役割を知る。 ・自分のグループに名札を貼る。 ・各グループのメンバーを確認する。	
【まとめ】	5 販売の準備をする。 「ミックス」グループ ・ラベルを貼る。 ・販売の練習をする。 ・校内販売をする。 ・売上計算をする。 「よっちょよれよ」グループ ・作業目標の確認をする。 ・作る物を選ぶ。(看板・製品・ラッピング) ・作る。 ・片付ける。	③興味・関心を高める題材及び活動設定 ④興味関心を高める教材教具の活用
	6 集合する。	II 対話的な学び
	7 本時の成果を発表する。	①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
	8 次時の確認をする。	②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
	9 終わりの挨拶をする。	③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
		④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
		⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
		III 深い学び
		・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。 ・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開 「5 販売の準備をする。～校内販売をする～」	生徒Cは、販売学習での接客がやや苦手であることから、事前に商品アピールや場面に応じた対応の練習を行うことで自信をもって接客できるようにする。また、「チーフ」としての役割を明確に伝えることで、友達に協力できるようにする。
展開 「5 販売の準備をする。～作る物を選ぶ～」	生徒Fは、環境の変化に敏感であり、情緒の安定が課題である。興味関心のある教材教具を準備することで、自分から活動を始められるようにする。

b 学びへの手立てと成果

I 主体的な学び	・具体的な手立て ○成果	●改善点
<p>①学習活動への展開構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等) 	<p>【導入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の所属するグループを確認するため、自分の名前カードをグループに貼る。 ○全員が可能な活動であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ●「みんなで」を意識するためには、今後の学び方として、グループ名を隠した状態で自分のカードを貼る、グループメンバーで集合するなどへ変更していく。
<p>②見通しを高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・視覚情報による支援 (手順表や見本、ジェスチャー等) 	<p>【導入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の流れを視覚情報を含めて確認する。 ・お店の名前の確認をする。 ・活動グループの確認をする。 ・テーマ「みんなで作る一つのお店」をゴールとして、そのために必要な活動レベルでの目標を提示する。 ○授業の目的（働く目的）を意識づけることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●目標の提示を行い、生徒の具体的なイメージにつなげる。 ①事前に確認する。 ②目標設定と関連付ける。 ③機会ごとに指導する。 ④評価の機会を設ける。
		
<ul style="list-style-type: none"> ・活動レベルでの目標として作業学習での共通目標を提示する。 ①時間を守る。 ②作業に集中する。 ③準備、片付けを進んでする。 ④あいさつ、返事、質問、報告をする。 ○具体的に学び方を意識して授業に取り組むことができた。 ○生徒Fが友達と一緒に製品作りに取り掛かることができた。 		
		

Ⅱ 対話的な学び	・具体的な手立て ○成果	●改善点
<p>③他者からの情報を活動につなげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に生かす。 <p>・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。</p>	<p>【展開】</p> <p>「ミックスグループ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・接客の対応マニュアルを事前に伝える。 <p>○目的意識をもち、真剣な表情でマニュアルを見ることができた。</p> <p>「よっちょれよグループ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マグネットの包装を開けられない生徒Ⅰに教師が直接開け方を教えるのではなく、「Gくんを見てごらん」と声を掛ける。 <p>○友達の手本を真似て、一人でパッケージを開けることができた。</p> <p>「よっちょれよグループ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員がボンド付けの手順を見せて教え、完成見本を示す <p>○生徒Ⅰは、1回の経験と見本を見ることで一人で製作できた。</p> <p>○支援を減らし、一人で取り組むことで、生徒自身が達成感を感じることができた。</p> <p>「ミックスグループ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・販売の身支度を3つの手順で学ぶ。 <ol style="list-style-type: none"> ①身支度の必要性 ②身支度のポイント ③自身で鏡で確認 <p>○生徒自身で身支度を考えて行うことができた。</p> <p>○マニュアルにないお客さんの質問「どれくらい日持ちしますか？」に対し、生徒Cは、緊張した表情になるが担当教師に視線を送り情報を求めて答えることができた。</p>	<p>●改善点</p>   <p>●教師は手だて（学び方）のレパートリーをもち、状況に応じて学び方を調整することが必要である。</p>  <p>○エプロンを正しく着用するために、生徒が互いに評価する機会を設定する。（他者評価）</p>  <p>●その状況に応じた学び方の修正を行っていく。</p> 

<p>④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。</p>	<p>「ミックスグループ」 ・役割を事前に伝える。 ○生徒Cは、とても緊張していたが、チーフとして、生徒Bをフォローすることができた。</p>	
<p>⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。</p>	<p>「よっちょよれよグループ」 ・製品の仕上がりの確認は、生徒の発達段階に応じた質問をする。 生徒I「どっちがいい？」 生徒D「買ってもらうには、どちらが良い？」 ○仕上がり確認の様子を見ていた生徒Gが「直します」と振り返りのやりとりの中で自ら気づき行動することができた。 (他者評価から自己評価)</p>	<p>●目当てに向けた振り返りを行う。</p>
		
<p>Ⅲ 深い学び</p>		
<p>・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。</p>	<p>「ミックスグループ」 ・作業学習の共通目標を提示する。 ○購入しない人に対して、「また、お願いします。」と言うことができた。 ○作業学習での販売活動経験から応用と般化が見られた。</p>	

(オ) 成果と課題

■注目してほしい児童生徒の評価 (※【目標達成度について】 A:十分達成できた。 B:ほぼ達成できた。 C:あまり達成できていない。 D:達成できていない。)

生徒名	本時の評価規準 (抜粋)	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒C	<p>・接客では、場面に応じた対応ができたか。</p>	<p>・自立活動の目標は、「相手の思いを考えたコミュニケーションができる。」「周囲の状況に応じた行動ができる。」「自分の意見を言うことができる。」であり、授業目標として妥当であったと考えられる。 ・「場面に応じた対応」とは、どのような対応か判断基準が曖昧であった。しかし、接客マニュアルにない質問や対応をできた点で目標が達成できたと考えられる。 ・事前に練習を行うことで見通しをもち、緊張を緩和することができたと考えられる。今後、学習経験を積むことが効果的であると考えられる。</p>	A
生徒F	<p>・自分から活動を始めることができたか。</p>	<p>・自立活動の目標の手立てである「活動時間を示し、徐々に傍を離れることで、一人で活動に取り組む時間を増やす。」「休憩時間にタイマーを活用し、好きな活動を行うことで時間を守るようにする」「不適切な行動については、刺激を減らし、適切な行動を視覚的に称賛することで正しい行動の強化を行う」が情緒の安定に効果的であった。 ・情緒の安定を図り、興味関心のある教材を準備することで自分から活動を始めることができた。</p>	B

ウ 3年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

a 生徒の行動の記録と変化

授業づくりを行う上で、①生徒それぞれが自己の力を発揮できる学習活動、②将来の生活に般化できる学習内容の2点について自立活動の観点から生徒の実態把握を行った。生徒一人一人の個別の指導計画の自立活動の目標から生徒の苦手な部分が明らかになり、それぞれの課題から関連する項目を抜粋して、授業の個人目標に反映させることで一定の成果が得られた。

また、①生徒それぞれが自己の力を発揮できる学習活動を準備したことによって、生徒の言動に主体性がみられるようになった。「授業実践Ⅰ」の取組後、製品作りをする際に生徒から「お金?」「映画?」「売上は?」等、自分たちの活動目的を意識して、見通しをもって活動に意欲的に取り組もうとする言葉が聞かれるようになった。また、②将来の生活に般化できる学習内容を取り入れた授業計画を行ったことで、これまで学校生活に受け身の姿勢であった生徒たちに変化が見られた。授業前には、「今日は、何をするの?」「何を用意して、持っていくの?」「はさみを持って行った方が良いと思う。」等、活動に見通しをもち、自ら行動しようとする姿勢が見られるようになった。それを見た他の生徒たちも真似をして自ら行動することができるようになった。

b 成果と課題

本取組は、作業学習で学んだことを生活単元学習の場面で般化させ、その後、特別活動の場面で般化させるという三段階の構想であった。今後の取組として、集団学習の場面で、個人思考する活動から集団思考させる活動につなげることで、「より深い学び」を促せると考えられる。

また、将来の生活に向けて、学習の基礎を積み上げて応用と般化をさせていくことや実生活で活用することが重要であると考えられる。授業ごとに生徒の実態把握や目標設定を行うのではなく、生徒の生活を含めた全体像をとらえて自立活動の観点から実態把握をすることで、発達段階に応じた手立てを行うことができた。「主体的・対話的で深い学び」を引き出すためには、生徒の情緒が安定した状態であることが必要不可欠であると考えられる。支援度の高い生徒の教科学習の面での成長は、緩やかであり、学びにおいても、その授業時の情緒による影響が大きい。しかし、生活と関連付けたことや興味・関心のある教材教具を準備したことで、認知面の幅が広がり、生活単元学習の学習に系統性をもたせることで、生徒の意欲やモチベーションなど心理的な部分で大きく成長が見られた。

また、経験を積み、達成感を感じることで生徒は自信をもち、自分の考えを言葉にして伝えることができるようになったと考えられる。

今後は、このようにして身に付けた力を様々な場面で発揮できるように、発達段階に関わらず情緒をコントロールするスキルを身に付けていくことが課題である。

(イ) 学習過程分析表改善に向けて

「学習過程分析表」を活用し、授業の全体目標から生徒の個々の実態に応じた個人目標の設定を行った。生徒の特性や個々の課題から授業目標達成の姿を想定する点では、1枚の用紙にまとめることで、活用しづらい結果であった。また、発達段階に大きな差異がある集団学習の場面では、生徒の個々の実態に応じた「主体的」「対話的」「深い学び」とは何かを検討する必要がある。そこで、個別の指導計画の自立活動の目標を活用する等、生徒の実態把握から課題を確認し授業づくりを行うことで、その子どもにとっての「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を検討することで改善されると考える。

4 おわりに

(1) 実践を通して

今年度、中学部では研究テーマを「主体的・対話的に学び、生活に必要な力を身に付ける取組(2年次)」と設定し、引き続き、生活単元学習での研究・実践を推進した。

各学年とも年1回の公開授業又は年2回の研究授業を行い、実践に取り組んだ。昨年度の反省から新しい学習過程分析表の中に注目してほしい学習活動や生徒の評価等の欄を設け、事後協議における検討ポイントを明確化することができた。

その結果、事後協議では、注目してほしい学習活動や生徒の評価等を中心に手立てが有効であったのか、目標が達成されていたのかを確認することができた。

昨年度の課題としては、多様な生徒の実態を踏まえ、学習の習熟度を基準としてグループ化していく方法も考えられるが、そのことにより教師も分散されてしまい、個々の生徒への支援に支障が出てくることも心配されたが、各学年とも多様な生徒の実態に応じた「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とは何かを考えた目標設定を準備し、一人一人の生徒が気付き行動する授業内容を盛り込む等、個々の生徒への支援方法の工夫や教師の配置等を考えた取組を行うことができた。

今回の生活単元学習の授業を通して、各学年とも「主体的」「対話的」「深い学び」の取組が授業の中で学び得た知識や技能を他の作業学習や教科学習(国語、数学等)、日常生活の場面でも「応用」「般化」ができたという願いを込めて授業に取り組んできたと思う。今後、生活単元学習の授業以外の場面でも生徒が力を発揮した良い事例があれば、それをまとめていくことも大切であるとする。

(2) 分析表改善に向けて

今年度、新たに改善した学習過程分析表を活用することによって、設定した学習内容が一人一人の生徒にとってどこにどうつながる学習内容なのか等を確認することができた。また、教師側の支援のポイントも明確に分りやすくすることができた。

一番良かった点は、注目してほしい学習活動や生徒の評価等の欄があり、授業者にとっての願いや参観者に向かってのポイントやメッセージを発することができたことである。

特に「Ⅰの主体的な学び」や「Ⅱの対話的な学び」の項目では、生徒の支援方法や活動につなげることなどが具体的な項目の内容になっていたので授業の中で活用することができ、授業の流れを整理するのも役に立った。今後、項目が細かくなった場合、この授業は、どこに重点をおいて取り組んでいるのかを明確にする必要がある。

また、どの学年とも支援度の高い生徒にとっての「深い学び」の項目が難しかったのではないだろうか。支援度の高い生徒にとって、学習過程分析表の項目を見ながら、どの活動の内容が「深い学び」の項目と結びつくのか、どこを「深い学び」ととらえるのが難しかったように思う。来年度の課題であるとする。

V 高等部の研究

高等部テーマ

「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習」

1 はじめに

高等部では卒業後の自立と社会参加に向け、生徒一人一人に必要な資質能力を育むために様々な取組を進め、「自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身に付けた生徒」の育成をめざしている。

今年度は「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習」というテーマを設定した最終年（3／3年目）となる。

過去2年間で「主体的・対話的で深い学び」について基礎的理解を深めつつ、研究授業における学習過程分析表の活用を通して、日々の授業にどのように「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れ、授業改善につなげるか研修を重ねてきた。

こうした取組により、「主体的・対話的で深い学び」の視点について整理が進んだ一方で、各要素について日々の実践と関連づけていくだけでなく、授業で設定したねらいがどれだけ達成できたのか、そのために授業者の工夫がどれだけ効果的だったのか、生徒の目標達成度も含めながら事後協議の中で検討していくことが必要であるとの課題が出された。

こうしたことを受け、今年度は、昨年度までの研究を踏まえ、研究授業（年2回：対象3年生）及び公開授業（年1回：対象1、2年生）の中で学習過程分析表を活用し、「主体的・対話的で深い学び」の視点について整理を進める。

あわせて、今年度新たに追加された「注目してほしい児童生徒の評価」等を参考に、事後協議の中で教師による分析・協議を行い、以後の授業改善につなげていく。

なお、学部テーマに沿って学年ごとに研究テーマを設定し実践に取り組む。学年ごとの研究テーマは下の通りである。

高等部1年テーマ：役割を通してつながりを広げる集団づくり～主体的・対話的で深い学びに向けて～

高等部2年テーマ：体験学習を豊かにするための主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり

高等部3年テーマ：卒業後の社会参加を目指す「主体的・対話的で深い学び」の視点を生かした授業づくり

2 研究経過

(1) 研究内容

ア 将来の自立と社会参加に必要な資質・能力の育成に向け、生徒一人一人に応じた支援や指導の在り方を検討する。

イ 「主体的・対話的で深い学び」の視点について教師間の共通理解を深めるとともに、授業改善にどのように結びつけていくかを検討する。

ウ 実践から問題点や課題を明らかにする。

(2) 研究方法

- ア 各学年で実践研究に取り組む。
- イ 研究・公開授業及び事後協議を行い、授業についての検証・改善を行う。
- ウ 学習過程分析表を活用し、改善について検討する。
- エ 実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

(3) 研修計画

- ア 学部研究日を月1回設定する他、学年での研究日を随時定める。
- イ 研修の日程

月日	研修内容
4/23	学部研究テーマ等協議
5/10	年間研究計画等協議
6/4	学部研テーマ、年間研究計画の確認、各学年での実践
6/12	研究授業① 高等部3年生
7/2	事後協議
7/31	アセスメント①「キャリア発達段階表 2017 改訂版」
9/12	公開授業 高等部2年生
10/1	事後協議
11/6	研究授業② 高等部3年生
11/19	事後協議
12/4	公開授業 高等部1年生
12/10	事後協議
1/8	実践集録原稿作成
2/7	実践集録内容確認
3/3	研究の反省、アセスメント②「キャリア発達段階表 2017 改訂版」

3 研究事例

(1) 研究授業

ア 高等部3年生における取組：「卒業後の社会参加を目指す『主体的・対話的で深い学び』の視点を生かした授業づくり」

(ア) 取組にあたり

本学年の取組も3年目となった今回は、卒業した後の生活で必要となる人との関わり方を今一度確認するとともに、しっかり身に付けていけるよう生徒が主体的・対話的に参加できる授業内容の組み立てを目指して「卒業後の社会参加を目指す『主体的・対話的で深い学び』の視点を生かした授業づくり」をテーマに決定した。

実践にあたり現場実習に向けての取組、社会のきまりと制度、これから生活していく中で不可欠な人とのコミュニケーションの取り方等を大単元とし、年間を通した学習計画を立てた。ここでまず課題となるのが、高等部3年生では24名が在籍しており、ほぼ自立して学習や生活に参加できる生徒、声掛けや教師の確認等の支援を必要とする生徒、学習のほとんどで教師の支援を必要とする生徒と、その実態の幅はかなり大きいことである。

そこで生活単元学習の計画を練る教師間での話し合いの中で、内容に応じて2～3グループに分けて学習に取り組むこととした。本実践で主に取り上げるのは、このうち将来的に地域の就労継続支援B型作業所での就労や、生活介護型の福祉施設を希望している実態の生徒12名を対象とするグループである。

生徒の実態としては、お互いに挨拶を交わしたり気遣えたりできる仲間意識をもっている反面、自分の思いをうまく表出できない時や思いが通らなかつたりした時に、不安定になり離席やトラブルを起こしてしまったり、相手に対して適切な態度を取ることがまだ難しかったりする生徒たちである。発語の少ない生徒も4名含まれ、発語以外での代替コミュニケーションの必要性も感じている。

本卒業後に仕事をする上で必要な態度とはどのようなものなのか、実際の現場実習での生徒の動画と写真を使い、支援員への返事の仕方や声の大きさ、説明を聞く時の自分たちの態度等、仕事での相手との関わりや、日常の学校生活の中でよくあるトラブルの場面で、一体どうしてトラブルになったのか、どのように回避すればよかったのか、相手とトラブルにならない関わり方学習を通して、卒業後社会参加で必要となるスキルの獲得を目指していきたい。

(イ) 単元計画

生活単元学習「卒業後の社会参加を目指そう」の年間指導計画は表1のとおりである。

本実践では、この中から6月と11月にそれぞれBグループで実施した「身に付けよう、仕事に必要なコミュニケーション力」と「相手との関わり方」を取り上げる。

イ 実践事例 I

(ア) 単元名「卒業後の社会参加を目指そう～身に付けよう！仕事に必要なコミュニケーション力」

(イ) 単元設定の理由

5月に全員が2週間の現場実習を終えたタイミングで、実際に自分たちの実習中の様子を動画や写真で見て振り返り、将来必要となる身に付けたい力の中でも今回の現場実習中の課題点であった、支援員の声掛けに対して正しい態度を取れているか、返事の声の大きさは適切か、又はアクションで合図に替えて答えられているかを確認し、正しい態度等を身に付けることができるよう学習に取り組む。

知的障害や自閉症スペクトラムを併せ有する生徒が、教師の呼びかけに注目しながら授業を進めることができるよう、自分たちの現場実習中の様子や教師が支援員役と生徒役として課題点をピックアップ

表1 生活単元学習「卒業後の社会参加を目指そう」における年間指導計画

1 学期	1	現場実習にむけて①	5 時間
	2	事前あいさつ	1 時間
	3	現場実習にむけて②	3 時間
	4	お礼状作成	2 時間
	5	・状況に合わせた行動の仕方～人との距離間～ (A グループ) ・身に付けよう、仕事に必要なコミュニケーション力 (BC グループ) (実践 I)	1 時間
	6	現場実習にむけて③	4 時間
	7	お礼状作成	2 時間
2 学期	8	現場実習にむけて④	4 時間
	9	お礼状作成	2 時間
	10	自分の良さや弱さを学ぶ	1 時間
	11	正しい態度や言葉遣いの振り返り	1 時間
	12	・健康管理 (A グループ) ・相手との関わり方 (B グループ) 【実践 II】 ・余暇を見つける (C グループ)	1 時間
	13	知っておきたいきまりや制度① (A グループ) (BC グループ)	1 時間
3 学期	14	知っておきたいきまりや制度②	2 時間
	15	知っておきたいきまりや制度③	1 時間
	16	・知っておきたいきまりや制度④ (AB グループ) ・お金の使い方① (C グループ)	1 時間
	17	・お給料と生活の場について (AB グループ) ・お金の使い方② (C グループ)	1 時間
	18	〇年後の自分を考えよう	1 時間
	19	働くみなさんへ	1 時間

した場面等を動画でスクリーンに映すことにより注視しやすい環境を設定する。

動画を見て、発語が難しい生徒や一人で選択することが苦手な生徒も、移動アクションで授業に参加できるようにクイズ形式を取り入れ、生徒が答えを選択できるようにする。

本実践で特に注目する生徒は、恥ずかしさから場面に合わせて声を出して返事や挨拶をすることが難しい生徒 E と、普段より話を聞く態度や言葉遣いが守れないことが多い生徒 J である。生徒 E は相手を見て合図することが返事の代わりとなることや適切な声の大きさを知ること、また、生徒 J は話を聞く正しい姿勢を知ったり自分の態度を客観的に振り返ったりできることを期待している。

(ウ) 本時における目標

- ・返事をする時の声の大きさや話しを聞く態度を知り、正しく使うことができる。 (全員)
- ・クイズの内容を理解して一人で、又は教師と一緒に正解を選ぶことができる。 (9名)
- ・選択した色のゾーンに移動することができる。 (3名)

(エ) 学習活動の展開

本時の学習活動は、表2のとおりである。

表2 「学習過程分析表」及び「注目してほしい学習活動」

■学習過程分析表

学 習 活 動			I 主体的な学び
【導入】	1 あいさつをする。	}	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	2 本時の目標を知る。 ① 目標を知ろう ② 現場実習のようすを見てみよう ③ クイズに答えよう ④ やってみよう ⑤ 自分はどうかだったか考えてみよう		②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
	3 本時の目標の確認 ① 目標を知ろう		③興味・関心を高める題材及び活動設定
【展開】	4 活動 ② 現場実習のようすを見よう ・写真と動画を見る。	}	④興味関心を高める教材教具の活用
	③ クイズに答えよう ④ やってみよう ・動画をみてクイズに答える。 ・クイズ1をやる ・正解の位置へ移動する。 ・正解の動画を見る。 ・正解のやり方を実際にやってみる。 ・正解の理由を教師と一緒に確認する		II 対話的な学び ①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
	④ やってみよう ・動画をみてクイズに答える。 ・クイズ1をやる ・正解の位置へ移動する。 ・正解の動画を見る。 ・正解のやり方を実際にやってみる。 ・正解の理由を教師と一緒に確認する。		②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
【まとめ】	5 本時の振り返り ⑤ 自分はどうかだったか考えてみよう ・動画を見る。 ・気づいたことや感じたことを発表する。	}	③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
	6 あいさつをする。		④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
			⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
			III 深い学び ・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。
			・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開 「4 活動 ③クイズに答えよう」	現場実習で課題点として挙げられた返事や態度は、どうすれば相応しい行動なのかを気づけるように、身近な教師がモデルとなって場面設定をした分かり易いクイズを動画で撮影し、それを見ながら授業を進める。また、どの生徒も答えを選択しやすいうように、クイズを赤と緑で色分けし正解を色で選ぶようにする。
展開 「5 本時の振り返り⑤自分はどうかだったか考えてみよう」	自分や友達の返事をする時の声の大きさや話しを聞く態度はどうか気づけるように、最初に見た実習中の2名の動画をもう一度見る。良いところと直したいところとを、動画を見ながらヒントの声掛けをし、自分自身を振り返られるようにする。

現場実習中の課題点として挙げられた「指示を出された時の返事の声が小さかったり適切でなかったりする」場面や、「説明を受けているのに違うところを見ていたり手遊びをしたりしている」等の場面が撮影されている。

どの生徒にも動画として提示することは有効で、よく注視できていた。

クイズは赤の問題と緑の問題として出題し、教室には色付きのテープで赤と緑のゾーンをそれぞれ作っておいて、馬蹄形に座っている生徒たちが動画を見た後で自分が正解と思った（もしくは選択した）、赤か緑のゾーンに移動するだけで回答できるようにした。自分で正解を選択できる生徒は、自主的に正解を選び移動していた。

振り返りの場面では、展開の最初に見た現場実習の動画（2名）をもう一度見ることで、学習の最初と最後ではどのように感じ方が変わったのか、本時の学習が身に付いたのかを確認できるようにした。

本実践で特に注目する生徒EとJの実習中の動画を流したことで、生徒Eはきちんと正しい態度を取っているつもりだった返事や合図が、相手にはうまく伝わっていないことが分かったようだった。同じく生徒Jは、説明を受ける時に手遊びをしたり顔を背けたりする自分の様子が、相手に対して失礼だと気付いたようで自分から正しい態度を模範できていた。2人とも客観的に自分の様子を見て、どこがいけないのかどうすれば良かったのかを理解できていた。

（オ）成果と課題

動画をクイズ形式にすることでゲーム性を取り入れ、生徒の意欲を刺激し興味を引き出せた参加型の授業となったと感じた。

先に述べたように知的障害や自閉症スペクトラムを併せ有する生徒が、教師の呼びかけに注目しながら活動に参加できるよう動画を活動の助けとしたことに加え、自分たちの現場実習の様子や親しい教師が登場したことが、生徒の興味・関心を一層高めることにつながったと思われる。

クイズ場面では、クイズの正否が難しい生徒にS Tが赤と緑のカードを用意してそれを選択しながら、正解・不正解のゾーンに移動するマッチング形式に工夫したことにより、幅広い実態の生徒の参加につながった。また、友達の顔が見られるよう馬蹄形での座席配置にし、友達と一緒に参加する喜びや授業への期待も高まるのではと考えた。

この学習で特に効果的と感じたのが、実際の実習中の動画を最初と最後に流したことだった。同じ動画を繰り返すことで、明らかに2回目の際には改善点や感想が多く聞かれ自己評価や他者評価ができた活動となった。

注目してほしい生徒E、Jの本時の評価は表3のとおりである。

表3 注目してほしい児童生徒の評価

生徒名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒E	・相手の顔を見たり頷きや返事をしたりして、話しを聞く時に正しい態度を取ることができたか。	・クイズで正解を見た後に、自身の実習中の返事をする声が小さい様子を動画で見ると、話している相手の方を見て返事を返す大切さを感じられたようだ。恥ずかしさから声が小さくなるため、相手を見て頷くだけでも返事や合図になることを伝えていく必要がある。	B
生徒J	・話しを聞く時には、姿勢を正して聞くことの大切さを知ることができたか。	・クイズを見て学習した後に、自身が実習中に説明を受けているのに手遊びしている動画を見て、どこがダメなのか、どうすれば良かったのかが分かり、授業中の姿勢も素晴らしく良くなった。	A

生徒Eは、恥ずかしさから顔を伏せたり声が小さかったりしたが、動画で客観的に自分の様子を見たり友達の意見を聞いたりしているうちに、話している相手の方を見ることでうなずきや返事と同じような役割があることを知り、話し掛ける教師の顔を見ながら返事ができるようになった。

Jは、自分の話を聞く態度を動画で確認したり授業の内容が進んだりするにつれ、最初は足を組みながら教師の話を聞いていたが、段々と椅子にもたれた姿勢から前のめりに話を聞く姿勢になり、最後は

背筋をぴんと伸ばして両手を膝の上に置いて話を聞ける等、態度を自分から正せるようになっていた。

一方、課題としては、内容の理解が難しい生徒をどう参加させるのかという意見が上がった。今回は色のマッチングで参加できるよう工夫したが、それでも内容的に難しい部分があり活動が止まるという様子から、学習集団が大きいのではという指摘があった。

生徒によっては、授業に参加するだけになってしまうことも懸念され、学習保障の点からは集団をさらに分けることがベストと感じた。そして、学習過程分析表を見ても明らかなように、対話的な学びにつながる活動が弱かったことも挙げられた。こうした点にどのようなアプローチをするべきなのか、ここが次回への課題となった。

ウ 実践事例Ⅱ

(ア) 単元名 「卒業後の社会参加を目指そう～相手との関わり方～」

(イ) 単元設定の理由

3年生では年間を通して卒業後の生活を見据えた取り組みを行っており、2学期の半分を終えた11月の段階で、日々の学校生活の中で自分たちの様子を振り返りながら、将来必要となる身に付けたい力の中でも特に課題として挙げられる、相手との関わり方について学習したいと考えた。

3年生の中には、日ごろ友達を相手に自分の思いを通そうとしてトラブルにつながる行動をとってしまう生徒が多く見られるため、人との関わりの中でトラブルにならず相手と仲良く付き合っていくにはどうすればいいのか、ではそういう場面で状況に応じた行動や態度の取り方とはどのようなものなのかを学び、コミュニケーションスキルを高めることをねらいとする。

授業では、日頃トラブルにつながる場面を再現した動画を見ていく。自分勝手な行動をして相手を怒らせてしまったトラブル発生場面を見て、まずトラブルの原因となる場面を写真カードで提示しチェックする。

次にワークシートでトラブル回避と思われる行動を確認し、トラブル回避の方法をクラスでチームになり話し合いで確認しあう。

ここでは、場面緘黙の生徒や自閉症スペクトラムの生徒のように、他者とのコミュニケーションが苦手な生徒には、会話の中でのうなずきや話している相手の方を見ること、補助具を使ってのコミュニケーション等、自分に合わせた人との関わり方を知っていきながら、また、授業を受けることで人との上手な関わりができる練習の場面となるように、グループ活動も取り入れる。

話し合った意見をチームの代表1名に、できれば全体の前に来て発表してもらおう。全チームの発表が終わったらトラブルにならない場合の動画を見て、自分たちの考えとどうだったかをMTの説明で比べていく。

話し合いで自分以外の考えを知ったり、自分の気持ちを相手に伝えたりすることで、相手の気持ちを知ることや、人との関わり方の学習となることを期待している。また、この授業で状況に応じた行動や態度のとり方を知る機会にもなり、これからの生活に是非とも生かして欲しいと期待した。そして、今までの自分を振り返り、これから相手のことを考えた上でも行動できるように意識付くことを期待する。

本グループの生徒については、実践Ⅰで課題に挙げた学習集団を再考する観点から、就労継続支援B型作業所での就労を希望している9名へと対象生徒を絞った。特に注目する生徒については、普段より友達とトラブルになりやすい生徒Eと生徒Hを挙げ、学習を行うことでトラブルにつながる行動で相手が嫌がっていることや、トラブルを回避するための行動を知る機会となることを期待した。

(ウ) 本時における目標

- ・相手とトラブルにならない態度や行動をとることができる。 (全員)
- ・チーム活動や全体の場で、自分の意見を発表することができる。 (8名)
- ・ホワイトボードや意思表示カードを使って、自分の意見を相手に伝えることができる。 (1名)

(エ) 学習活動の展開

本時の学習活動は、表4のとおりである。

表4 「学習過程分析表」及び「注目してほしい学習活動」

■学習過程分析表

学 習 活 動		I 主体的な学び	
【導入】	1 あいさつをする。	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)	
	2 本時の内容を知る。		
	⑥ 目標を知ろう		
【展開】	⑦ 普段のようすを見てみよう	②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援	
	⑧ 動画を見てみよう		
	⑨ 考えよう、話し合おう	③興味・関心を高める題材及び活動設定	
	⑩ 発表しよう		
	⑪ ふりかえり		
	3 本時の目標の確認	④興味関心を高める教材教具の活用	
	⑥ 目標を知ろう		
	【まとめ】	4 活動	II 対話的な学び
		⑦ 普段のようすを見てみよう ・自分たちの写真等を見る。	
		⑧ 動画を見てみよう ・「人との関わり方。こういう時自分ならどうする？」を見る。	①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
⑨ 考えよう、話し合おう 1:動画を見て、どうしてトラブルになったのかをワークシートにチェックする。 2:クラス別のチームで、チェックしたワークシートを見せ合い、トラブルの回避方法を話し合う。			
⑩ 発表しよう ・チームの代表が話し合ったことを発表する。 ・他のチームの意見を聞く。		②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。	
5 本時の振り返り			
⑪ ふりかえり 1:各チームのポイント数を見る。 2:トラブルを回避できる行動をとれたか、話し合いで意見を発表できたかを振り返る。		③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。	
6 あいさつをする。			
		④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。	
		⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。	
	III 深い学び		
	・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。		
	・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。		

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「4活動 ④ 1:どうしてトラブルになったのかをワークシートにチェックする」	・ワークシートには笑顔や怒った顔等いくつかのマークを並べておくので、場面に合わせた正しいと思うマークにしるしをつけることで、トラブルになる行動とならないための行動を理解していると評価できる。
展開「4活動 ④ 2:クラス別のチームで、チェックしたワークシートを見せ合い、みんなでトラブルにならない行動を話し合う」	・言葉で説明することが難しい場合、チェックしたワークシートを見せることで自分の考えを相手に伝えられる。また、ワークシートを元にしてチーム内での発表につながるかもしれないし、手元に残るためお互いの意見の比較もしやすい。

動画を全員で視聴した後、図1のワークシートの質問事項に、まず一人で正解と思う項目をチェックする。

そのワークシートを元に、次はグループで見せ合ってお互いの解答を共有する。一人で答えをチェックする際に、STの補足説明が必要な生徒もいたが、ほぼ一人で解答することができていた。中には間違った答えにチェックする生徒もいたが、その後のグループでの話し合いの中で友達の意見を聞いていくうちに、自分

とは違う意見を受け入れて解答を書き直す様子や、友達の意見を聞いて自分と同じ場合は共感したり感想を言い合ったりする姿も見られた。

注目する生徒については、生徒Eと生徒Hともに文字を読んで理解することが難しいため、文字よりはイラストを見て答えられるよう配慮した。

グループ内での話し合いでは、生徒Eは教師の励ましを受けて自分の解答を発表していたが、教師に聞き返すことが多く自信の無さが見受けられた。

また、全体の場での発表者を決める話し合いでは、自分から希望することはなかった。一方生徒Hは、ワークシートのチェックやグループでの話し合いは積極的に参加できた。特に、全体の場での発表者を決める話し合いでは、自分から立候補し2回とも発表したいと希望するほどだった。



図1 本時のワークシート

表5 6月と11月の授業の比較・改善点

展 開	活動・教材等		展 開	活動・教材等	
②動画を見てみよう	・動画	I 主体的な学び ①学習活動への展開構成。 ②見通しを高める。 ③興味・関心を高める題材及び活動設定。	③動画を見てみよう	・動画	I 主体的な学び ②見通しを高める。 ③興味・関心を高める題材及び活動設定。
③クイズに答えよう (一斉)	・正解への移動 ・カード	II 対話的な学び ①モノと関わり、活動につなげる。 ③他者からの情報を活動につなげる。	④-1 ワークシートをチェックする(個人)	・ワークシート	
④やってみよう (一斉)	・教師の後に 続き模倣		④-2 チームでワークシートの見せ合い・話し合い(グループ活動)	・ワークシート ・見せ合い ・話し合い	II 対話的な学び ①モノと関わり、活動につなげる。 ②他者に情報を伝え活動につなげる。 ③他者からの情報を活動につなげる。 ④仲間と活動する。
			⑤発表しよう	・動画 ・ワークシート ・見せ合い	

6月の授業

11月の授業

(オ) 成果と課題

今回の授業に当たり、実践Ⅰの反省から表5のように授業改善を行った。

前回の実践で課題として残った対話的な学びへのアプローチとして、ワークシートを活用することと個人活動だけでなくグループ活動も取り入れた。

その結果、学習過程分析表にある「対話的な学び」の多くの要素を関連付けた学習活動を展開することができた。

中でも、個人の考えをワークシートに記入し、次にワークシートをベースにグループで話し合いを設け、最後はまとめた結果を全体で発表するという活動が、予想よりはるかに真剣に自分から意見を出せたり、友達の考えを聞いたりできた。

クラスごとにグループにしたことで、気心が知れた相手だから良かったのかもしれない。また、文字を読むことが難しい生徒も含まれるため、ピクトグラムのイラストも使った。

注目してほしい生徒の評価について表6の通りである。

表6 注目してほしい生徒の評価

生徒名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒E	・ワークシートを正しくチェックしたり、トラブルにならない行動を言葉かジェスチャーで説明したりできたか。	ワークシートは、質問の意味がどちらも受け取れる内容だったため、1枚目の問2は間違ったが、トラブルにならない行動を言葉で説明することはできた。ワークシートを見て、自分の答えの番号をチームの仲間に伝えることができた。	A
生徒H	・ワークシートを正しくチェックし、トラブルにならない行動を言葉やジェスチャーで説明したりできたか。	ワークシートでは、2枚目の問3以外は正しくチェックすることができ、問3についても話し合いの中で正解に気づくことができた。トラブルにならない行動を言葉で説明したり、全体の場で正しく発表したりすることができた。	A

生徒Eのように文字を読むことが難しい生徒でも、ワークシートを一人で記入して自分の考えを話し合いで発表することができていた。生徒Hは、どうしてトラブルになったのかを実演しながら、「ごめんね」と謝罪する言葉や態度がトラブルを回避することを全体で発表できた。そして普段の自分たちの行動がトラブルにつながっていないか振り返り、教師の発問に対して正しい態度等を学習することができた。

課題としては、生徒の答えたワークシートと動画の解答例がぶれてしまったことと、話し合いや発表でMTが主導となってしまったことである。

動画の解答例のぶれは編集箇所改善できるため、質問と解答例は確実にリンクさせるべきと改めて感じた。そしてワークシートで、悪い例として入れた「えー」や「無視する」選択肢が、生徒によっては「えー」は残念がる意味で使う時があり、「無視する」に関してはカムダウンの点から決して悪いことではないと受け取っていることに気付いた。生徒の受け取り方の多様性から、質問が教師側の思惑とは全く違ったものになってしまう難しさを感じた。

また、話し合いや発表に関しては授業改善チームからも指摘されたように、この授業を何度か繰り返せば生徒が次の展開に見通しがもてて、きっと生徒主体で授業を進めていけるようになるのではと感じたが、この授業内ではMTが主導となってしまっていた。

エ 3年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

まず、実践Ⅰでは仕事に必要なコミュニケーション力を身に付けるために、仕事での正しい態度や返事の声の大きさに注目した。

授業にあたり計画を練る段階でまず、授業形態は高等部1年と2年で経験しているクイズ形式や発表

の仕方を取り入れることとし、内容は高等部3年生という段階を考慮して仕事でのコミュニケーションの場面に特化した具体的なものとするに決めた。

特に課題として挙げられる部分をクラス担任から出してもらいそこでピックアップされた、指示を出された時の返事の声が小さかったり適切でなかったりすることや、話している人を見ずに違うことをしている場面に注目し、この2点に重きを置いて進めることに決まった。

授業を終えて実際に3年生1回目の現場実習での事業所からの評価を活用したことや、生徒が課題として普段から改善に取り組んでいる部分を扱ったことで、より身近に感じられ自分のこととして捉えられたのではないだろうか。

また、友達や自分が映った動画を見ることで主観的に感じられると同時に、スクリーンを通して見ることで客観的に見直せた。このように自分のこととして捉えられたからこそ、対象の生徒Jの授業中の話を聞く姿勢は、足を組んでいる姿から最後は背筋をびんと伸ばした姿勢へとどんどん良くなったし、生徒Eも授業後も声のボリュームの意識を継続しながら学校生活を送ることができている。

課題として挙げられた点だが、実際にこの内容で授業を行ってみて学習集団の実態の幅が大きいと感じられたため、次回の実践Ⅱでは実態に合わせてさらに2グループに分けられるよう改善することとし、そうすることでもう一つの課題である対話的な学びにつながるような学習活動の幅も広がるのではと考えた。

実践Ⅱを行うにあたり、生徒集団の再検討と学習内容の計画、補助となる教師の配置について話し合いを設けた。

その結果、実践Ⅰの対象生徒を8名と4名に分けることにし、転校生1名を含む9名を対象に絞った。ここから、実態に合わせて課題と思われる部分を絞り込み、全員が対象となれる授業づくりを考えることができた。

そこで次の課題である対話的な学びにつながる学習の弱さへのフォローとなるが、ここをどうカバーしていくかを話し合い、3年生という点から個人活動だけでなくグループ活動を取り入れてみることにした。

その結果、MT主導になってしまっていたという課題点はあったものの、グループ内で活発な意見の出し合いや発表する生徒を決める話し合いがなされていたという成果が見られた。何より対話的な学びにつながる授業づくりという視点からは、実践Ⅱでは飛躍的に改善された実感できた。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

指導案を見る側としては授業者の主たるねらいがよく分かり、学習活動と「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」との相互性が分かりやすい。作成する側としては、授業改善の際のツールとして活用できた。例えば学習活動を組み立てながら、活動の一つ一つがどの部分に該当するのかが一目で分かるため、参考にすることも多い。指導案を作成する機会が少なくても活用できるように、もう少し簡略化したりチェック式にしたりできれば、学年や教科でも気軽に活用できるのかもしれない。

今回の実践Ⅱの指導案で、本時の目標の後に「本時に関わる教科及び自立活動の内容」として学習指導要領より、該当する教科の内容・段階と自立活動の内容を盛り込んだ。生徒の実態を分かりやすく反映した指導案となればなるほど、浮かび上がってくる項目なので今回試験的に入れてみることにしたため、内容や反映の仕方についてはこれから改善の余地がある。

(2) 公開授業 1

ア 1年生における取組：「役割を通してつながりを広げる集団づくり～主体的・対話的で深い学びに向けて～」

(ア) 取組にあたり

今年度、高等部1年生には、2学級14名の生徒が在籍している。学習形態としては、教科等の一部は学年合同で、生活単元学習については主に各学級で行っている。学年の生徒の中には、情緒面や対人関係に課題があり、思春期も相まって、新しい環境への不安や葛藤を抱きながら学校生活を送る姿も見られる。

今回はこのうちA組7名（男子6名、女子1名）の実践について取り上げる。

A組の生徒の中には自閉症やダウン症、ADHD、難聴を併せ有する者が含まれる。生徒の出身校は、4名が本校中学部、3名が地域の中学校で、皆、入学当初の緊張感がほぐれ、友達同士の関わりも見られるようになってきた。明るく優しい気持ちをもつ生徒が多く、困っている友達に優しい声掛けができる者もいるが、経験不足や障害特性から相手の気持ちを考えたコミュニケーションには支援が必要な者もいる。また、発語の不明瞭さから話すことに自信が無く、教師や慣れた友達との関わりに偏り、新しい友達との関係を築きにくい者もいる。

指示理解については、口頭指示をおおむね理解できる生徒から、視覚支援や個別の支援が必要な生徒まで幅広い。理解力はあるけれども、関心の無い活動には意欲が乏しく、活動を継続できない生徒や、気持ちの切り替えに時間を要し、時々集団から外れてしまう生徒もいることから、題材に興味や見通しをもたせる工夫が必要である。

今年度の1年生のテーマは、「役割を通してつながりを広げる集団づくり～主体的・対話的で深い学びに向けて～」である。学級全体でより良い仲間意識を育てていくために、集団の中で自分の役割を果たすこと、友達と助け合う経験を広げること、主体的に行動することを年間の目標として取り組んだ。

(イ) 単元計画

今回取り上げる実践は、生活単元学習「出品しようキーラック～みんなで作ろう！にこにこふれあいフェアに向けて～」である。

主に11月から12月にかけての取組であり、集団の中で自分の役割を果たす中で、主体性を育て、友達と助け合う経験を広げることが目標としている。

なお、詳細については表1の通りである。

表1 生活単元学習「出品しようキーラック～みんなで作ろう！にこにこふれあいフェアに向けて～」年間指導計画

単元名「出品しようキーラック～みんなで作ろう！にこにこふれあいフェアに向けて～」		
第1次	「自分のキーラックを作り製作工程を知る」	4時間
第2次	「キーラックの出来栄えについて意見をもらう」	1時間
第3次	「キーラックの意見をもとに話し合いをする」	1時間
第4次	「キーラックをたくさん作ろう」	7時間（本時5／7時間）
第5次	「にこにこふれあいフェアへ製品を見に行く」	2時間
第6次	「振り返りをしよう」	2時間

イ 実践事例

(ア) 単元名 「キーラックをたくさん作ろう」

(イ) 単元設定の理由

1学期に行われた学校行事「なつまつり」に向けて、クラスで木工製品のキーラックを試作的に製作、販売をした。工程の中には、個々が興味をもって取り組むことができる活動が含まれていた。

そこで、本単元では、県下の特別支援学級や特別支援学校の作品が出品される「にこにこふれあいフェア」での販売に向けて、生徒が得意な工程を生かし、「キーラック」の製作を行うことにした。

単元では、まず、自分のキーラック作りを通して、色を塗る、ボンドをつける、ねじで固定する、やすりで整える、フックを取り付けるという製作工程を理解し、正しい道具の使い方や、自分の得意な工程に気付いていく。

次に、製作や販売に関してアドバイスをもらうために、自分たちで考えた質問を、校内で知識の豊富な教師に聞く活動を通して、製品の良さや面白さに気付き、製作への意欲を高めていく。

そして、製品作りでは、工程をグループごとに分業し、生徒同士で道具の準備から製品チェック、片付け、振り返りまで行う。グループ内で、互いに質問や報告をし、協力して取り組むことや、一人一人の役割を明確にし、責任をもって取り組むことを目指していく。

本時は、キーラックを製作する3回目となる。授業では、①色を塗る、②やすりをかける、③接着、ねじ固定、フックをつける、の3グループに分かれて製作を行う。

導入では、製作で注意することとして「製作の確認が必要な場合は、手順書やチェックシートを見る。」「友達と協力して作り、優しい言葉を遣う。」「タイマーが鳴ると作業を止め、片付けをする。」「振り返りシートを使いながら、各グループで反省をする。」をスライドで示し、全員で確認を行う。

展開では、各グループが、生徒同士で道具の準備から活動の振り返りまで、手順表を活用しながら行う。グループの構成は、作業内容が生徒の実態に適していることに加え、日頃の様子から、言葉の掛け方や友達への理解を広げて欲しい組み合わせを考えた。

本時のまとめでは、話し合いの進行を補助者の教師が行いながら、生徒が自分で活動を振り返り反省をしながら振り返りシートにシールを貼ることにより、感想や意見を言う活動を促したい。

今回は、①色を塗るグループに所属する生徒D、E、F（以下、「生徒」は省略する）の3名の中から、特にD、Fを注目する生徒に設定する。

Dは工程を理解し、むら無く色塗りができる。友達との関わりが増えてきているが、相手の気持ちを考えずに一方的な言葉の掛け方をすることから、グループの友達と協力して製品の点検を行う中で、優しい言葉遣いで点検結果を伝えて欲しいと考えた。

Fについては、苦手な活動には参加をちゅうちょすることがあり、木工で使うペンキや工具に関心を寄せている実態から、意欲や見通しをもって色塗りの活動に責任をもって取り組む力を伸ばしたい。また、あわせて自分の役割に気付くことや、活動を通して達成感を得ることも期待したい。

(ウ) 本時における目標

- ・作業を理解し、自分の与えられた作業について役割を果たすことができる。
- ・シートを使って、仲間と振り返りを行うことができる。

(エ) 学習活動の展開

本時の学習活動は、表2のように計画した。

各グループは、準備から片付けまで、生徒は見通しをもって取り組むことができている。製作3日目ということで、必要な材料や道具は覚えており、友達の様子も見ながら準備物をそろえることができた。

表2 本時における学習過程分析表

■学習過程分析表

学 習 活 動			I 主体的な学び
1 あいさつをする。 2 前回までの取り組みを振り返りかえろう。 3 本時の内容を知る。 ⑫ 目標を知ろう ⑬ 作業内容を確認しよう 4 製作活動 ⑫ 色を塗るグループ ⑬ ヤスリをかけるグループ ⑭ 接着、ネジ固定、フックを付けるグループ ・ 道具を準備する。 ・ 作業分担の希望を友達に伝えたり相談したりする。 ・ 製作する。 ・ できたらグループで点検をする。 ・ 必要があれば、修正をする。 ・ 片付け・清掃 道具を元の場所に返す。 机ふき。 床のゴミ拾い、箒をかける。 5 まとめ ・ 本時の振り返り ・ 次時の確認をする。 ・ 終わりの挨拶			①学習活動への展開構成 ・ 物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・ 自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
			②見通しを高める。 ・ 動作補助を含む身体的支援 ・ 視覚情報による支援 (手順表や見本、ジェスチャー等) ・ 音声言語による支援
			③興味・関心を高める題材及び活動設定
			④興味関心を高める教材教具の活用
			II 対話的な学び
			①モノと関わり、活動につなげる。 ・ タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・ プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
			②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・ コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・ 質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
			③他者からの情報を活動につなげる。 ・ 周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・ 他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・ 他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・ 他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
			④仲間と活動する。 ・ 仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・ それぞれの役割を行う。
			⑤活動を評価する。 ・ 活動を振り返り、自己評価する。 ・ 他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。
		III 深い学び	
		・ 学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。	
		・ 学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
展開「4 製作活動①グループ 色を塗る」	必要に応じて手順書を見ながら、塗る方向や塗り残しがないかを確認しながら、見通しを持って作業することができるようにする。
展開「4 製作活動①グループ 塗り終わった製品をチェックする」	できたら友達に声を掛けること、声を掛けられたらチェックシートを見てチェックし、優しい言葉で返事を返すことで、グループ内の良い関りを育てたい。

製作では、必要に応じて手順書を確認し、特に点検を友達同士で行う活動では、言葉の掛け方を参考にしている生徒が多かった。

また、片付けでは、タイマーの合図を目安に取り掛かることを伝えていたが、作業を途中で止めることが難しい生徒も見られた。

各グループで振り返りをする活動では、①グループを除いては、生徒同士で進めることができ、教師

の撮影した各グループの製作中の写真を見ながら、振り返りの発表を聞くことができた。

全体を通しては、製作への理解が進み、道具の扱いに慣れてきたことで、生徒同士で活動できることが増え、教師は見守る支援が増えた。

注目する生徒に関して、D は道具の準備中に、友達から違う種類の木片を配られた時に「違うって。」と苛立った言葉が出てしまった。この際、教師から「優しく言おうか。」と声掛けされ、「しまった。」と気にする表情が見られた。

友達が依頼してきた点検を行う場面では、手順書は見ずに「塗れています。」と返事をする事ができた。

振り返りで、「友達に優しい言葉掛けができたか」の項目では、自分で「できた」「できない」の間に貼る姿が見られた。(図1 参照)

また、Fは、授業の最初に確認をした手順表(図2)を順番に読み、実物と対応させて「次は何かな。」と声に出しながら確認することができていた。

何よりも、色塗りの活動が面白くなり、製作を重ねるごとにビニール手袋を自分ではめることや、木片をよく見るため体勢を変えたり、板の向きを変えたりしながら塗ること等の手際が良くなり、木片1枚の色塗りが精一杯であったのが、2枚目に取り掛かることができるようになった。

しかし、2枚目の色塗りの途中で片付けの時間になり、教師の声掛けにも応じず、2枚目を塗り終えてからやっと片付けに取り掛かっていた。

振り返りの場面では、「協力して作業ができたか」の項目で、教師と一緒にどうだったか考える場面が見られた。

(オ) 成果と課題

本時の注目してほしい生徒の評価については、表3のとおりである。研究協議で出された意見を交えて、成果と課題をまとめた。

まず、Fについて今回は、塗り残しがないよう手順書を確認しながら作業を進めたこと、2枚目に取り掛かることができるほど作業を効率よく進めることができたこと等から判断しても、ある程度目標を達成することができたと判断した。

事後協議でも、Fの全体的な様子については「木片をよく見て、むら無く色を塗ることができていた。」「自分が塗りやすい体勢になって丁寧にできていた。」「手順表を見て、時間を忘れるほど制作に取り組

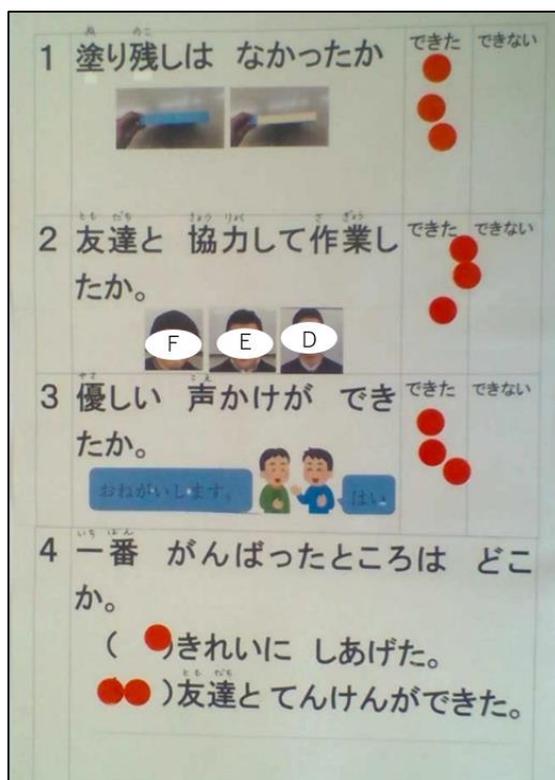


図1 ①グループの振り返りシート

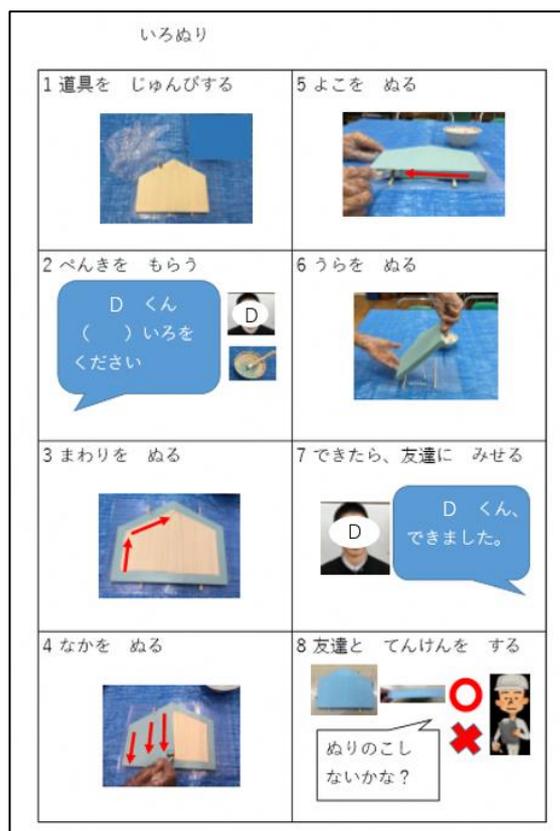


図2 生徒Fの作業手順書

表3 本時における「注目してほしい児童生徒の評価」

■注目してほしい児童生徒の評価 (※【目標達成度について】 A:十分達成できた。 B:ほぼ達成できた。 C:あまり達成できていない。 D:達成できていない。)

生徒名	本時の評価規準 (抜粋)	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	・グループ内のメンバーに対して、優しい言葉遣いで関わることができたか。	道具の準備中にFが配ってくれた木片が間違っていたことに苛立ち、「違うって。」の言葉がでてしまった。教師が制止すると、「しまった。」と気にしていた。しかし、その後は、点検の依頼をしてきたFに対し、点検表を使用しなくても、優しい言葉で塗り残しがないことを伝えることができていた。振り返りでは、自ら「できた」「できなかった」の中間にシールを貼り、最初の言葉遣いへの後悔を言っていた。	B
生徒F	・手順に沿って木片に色をぬることが集中してできたか。	色塗りでは、「次は何かな。」と自分で手順書を見て、集中して塗ることができた。手際も良くなってきた。しかし、片付けの合図の後、教師が「(塗りがけの)この面を塗ったら途中でいいので片付けをしよう。」と声を掛けたが、「舎の先生に見てもらいたい。」と止められなかった。塗りかけの時は、どうしたらよいか、確認をしておいたら良かった。	B

むことができた。」等の意見が出された。

ただ、2枚目の色塗りと片付けの切り替えに時間がかかったことについては、教師の支援の在り方について今後改善が必要となることも明らかになった。

事後協議では「2枚目の塗り始めの時に、Fと教師で片付けの目途を確認しておく良かった。」「意欲面にも差がある実態から、製作を続けさせて良かったのではないか。」「創作活動では到達度、進度がそれぞれ違うので、生徒の意欲に合わせて行う場面があつて良いと思われる。」等が出された。

Dは、授業の開始当初、乱暴な言葉遣いが見られた。日頃から、人の間違いが気になりやすく、この日は参観もあり焦っていたと思われる。

このことについて、Dは教師から「優しく言おうか。」と声掛けされ、「しまった。」と気にしていたが、それをしっかり受け止め、以後の学習活動でしっかりと意識してグループ内の友達とやりとりすることができていた。

研究協議では、「‘優しい声掛け’とは、どんな言葉なのか、本人はどこまで理解できていたのか。」「優しい声掛けの‘優しい’の基準が抽象的で分かりにくいのではないか。」「振り返りで、自分でシールを中間に貼っていることから、ある程度理解できていると思われる。繰り返し言葉を入れていくことが大切ではないか。」等の意見が出された。

その他、研究協議では、成果として「各々がやるべきことをよく理解して自分たちで活動していた。」「個々に合わせた手順書があり、また、言葉の例が載っていることで、支援表明することができていた。」

「グループの生徒の組み合わせや、道具の工夫がされていた。」「出品に向けて、良い作品を作ろうという思いが、生徒の表情、真剣さから見てとれた。」「振り返りに時間をかけており、深い学びにつながっているのではないか。」という意見が出された。

一方で課題については、「単元計画の中で、販売と売り上げやお楽しみについての見通しがもてるような計画が入っていれば、Dにとっても意欲につながり、活動を時間で切り



図3 グループの製作の様子

上げることに見通しをもてるようになるのではないか。」という意見があった。また、②やすり掛けグル

ープについて、「すべすべにするにはどうしたらいいか生徒に考えさせ、やすりの目の粗さに応じてついている数字(番手)をヒントに、仕上げに目の細かいやすりを使うことを導き出す等の工夫があれば、良かったのではないか。」という意見もあった。いずれも深い学びにつながる意見であり、主体的・対話的で深い学びの視点から、今後の授業改善に生かしていきたい。

ウ 1年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

今年度、高等部1年生では、「役割を通してつながりを広げる集団づくり～主体的・対話的で深い学びに向けて～」をテーマに、生活単元学習の中で、にこにこふれあいフェアへの出品作「キーラック」をクラスで協力して製作する学習に取り組んだ。

木工製品の製作経験が少ない生徒が多かったが、道具や機械を使ったものづくりへの興味を引き出しながら、手順書等の手だてで、道具の正しい扱い方を習得し、主体的な学習を一定、展開することができた。また、グループで生徒同士が製品の良否を確認することで、友達に聞く、教えるといった協力方法を学び、必要な生徒には、遣う言葉の手順表があると有効なことが分かった。今後も、学習を重ねながら、社会自立に向けて、周囲の人と進んで協力することや、適切な言葉掛けで関わるができる力をつけていきたい。そのためにも、主体的・対話的で深い学びの要素を取り入れながら、生徒自身が考えて行動し、振り返りや自分の考えを深められるような授業づくりに取り組んでいきたい。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

学習過程分析表の改善に向けた意見としては、今年度の授業改善チームによる調整会議の中で、なぜ学習過程分析表を用いて授業づくりを行うのかということをもとめられている。一つは学習過程分析表を視点として授業づくりや評価の視点を共有することと、もう一つは学習過程分析表の中から検討課題を焦点化し抽出するということである。1年生における取組としても、この2点の内容を念頭に置き、授業改善に向けて学習過程分析表を用いながら研究協議や事後協議を行ってきた。その結果、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の各要素について校内研修の内容も併せて参考にしながら、それぞれの内容について実際の学習活動と関連させながら授業づくりを展開することができたと思われる。

学習過程分析表自体は、研究部主体で本校の研究テーマに則り、簡潔に分かりやすくまとめられたものである。また今年度より、分析表の記入例と作成時の確認ポイントを具体的に示すことにより、学習活動の内容が研究テーマに則ったものとなるように工夫がなされている。よって授業者や参観者は、この記入例と確認ポイントを今後とも活用することによって、評価の視点を共有し、授業改善に向けて取り組んでいきたい。

事後協議の在り方においては、グループ協議とKJ法を基盤に据えることで、いろいろな角度から様々な意見を可視化することができた。協議中は1グループが4人に編成されて、赤の付箋に「学習でつまづいていた様子及び改善案」、青の付箋に「うまく学習できていた様子」、黄色の付箋に「感想」等を各自が一つの台紙に出し合うことにより、自分では想定できなかった見方や考え方に気付くことができる。また、ほぼ同じ意見が複数人から出される場合もあり、多数派の意見や少数派の意見が可視化しやすいのもその長所であろう。また一方、協議で使用されるKJ法が、討議する時間が制限される中においては単に意見を整理・陳列するのみに終始し、問題解決のためのアイデアを創造するところまでには至らない場合もあり、その運用の難しさを感じることもあった。

今後も継続して、学習過程分析表や事後協議の改善を検討するとともに、授業改善に向けた充実したツールや取組として、活用していきたいと考える。

(2) 公開授業 2

ア 高等部2年生における取組：「体験学習を豊かにするための主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」

(ア) 取組にあたり

高等部2年生は男子16名、女子7名の23名で構成されている。生徒の特性は知的障害に加えて、自閉症、精神疾患や脳性麻痺を併せ有するなど多様である。簡単なコミュニケーションは可能であるが、口頭での説明では内容の理解が十分でないために視覚支援が必要な生徒や、精神的に不安定な場面では教師が付き添う必要がある生徒など、個人の特性も様々であり必要とされる支援も異なる。

本実践の対象生徒は高等部2年C組の男子6名、女子2名の8名である。自分の意見を積極的に発表できるがその反面、他者の話を注意して聞くことが難しい生徒、人前で発言することに対する苦手意識が強い生徒、自分で決断する際に戸惑いが強い生徒等の実態があり、個々の生徒に合わせた対応や言葉の掛け方などに個別の支援が必要である。

本年度高等部2年生では「体験学習を豊かにするための主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」をテーマに設定した。2年生は将来の進路に向けての学習として、企業や事業所での現場実習が始まる学年である。特に2学期は運動会、現場実習、修学旅行と行事が多く、短い期間にたくさんの方が体験でき、またその幅も広いものになっている。これらの体験を単に良かった、楽しかった、大変だったという思いだけに終わらせるのではなく、系統立てた学習として取り組むことを本年度の実践とした。修学旅行は、高校生活の大きな思い出になる行事であり、生徒にとって、とても楽しみにしている行事である。学校や家庭を離れての活動であり、多くの体験的な学習が期待でき、特別支援学校の生徒にとって学校での生活に生かすだけでなく、卒業後の自立に向けての学びにつながる場面を多く経験できる機会であるため、修学旅行を取り上げることにした。

(イ) 単元計画

今年度の修学旅行は10月15日(火)から18日(金)の3泊4日で実施する。それに向けて7月から9月に生活単元学習の中で事前学習に取り組んだ。本単元の学習グループは指導計画の内容によって、学年全体、クラス別、活動グループ別等の形態で以下のとおり行った。

a 単元(題材)の目標

- ・修学旅行の行程が分かり見通しをもつことができ、宿泊に必要な生活スキルを学ぶことができる。(「知識・技術」)
- ・集団宿泊生活を通して団体行動のルールを学び、仲間同士が協力することができる。(「思考・判断力・表現力」)
- ・修学旅行を楽しむ気持ちや余暇活動を計画し、主体的に取り組もうとする気持ちを高める。(「学びに向かう力・人間性等」)

b 指導計画(全14時間)

第1次 旅行事前

日程確認、目的、集団行動・公共でのマナーについて・・・	3時間
壁新聞を作ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4時間(本時3/4)
ディズニーランドでの過ごし方・・・・・・・・・・・・・・・・	2時間
まとめ発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1時間
しおり作り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1時間
荷物点検・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2時間

第2次 旅行事後

修学旅行の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間

イ 実践事例

(ア) 単元名 修学旅行に行こう ～壁新聞を作ろう～

(イ) 単元設定の理由

修学旅行は生徒が楽しみにしている行事ではあるが、行先については聞いたことがある程度で所在地やどのようなアミューズメント施設なのかについて詳しい内容を分かっていない現状があった。修学旅行を主体的な活動として取り組むためには行先についての調べる学習が必要であると考えた。目的地を知る学習では、情報収集と活用を意識した活動を設定し、情報収集では、旅行ガイドやパソコンを使った調べ学習を進め、壁新聞という形で発表する。壁新聞を作成する際には、日程を踏まえて時間の流れを表現することや限られたスペースの中にどの調べ学習の内容を選択するかなどについて、表現する力、伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにしたいと考えている。

学習指導要領に置ける位置づけとしては、表1のように整理した。

表1 特別支援学校高等部学習指導要領（H31. 2）における位置づけ

<p>【国語】目標（1）社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。</p> <p>第1段階の目標</p> <p>イ 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う能力を高め、自分の思いや考えをまとめることができるようにする。</p> <p>第2段階の目標</p> <p>イ 筋道立てて考える力や豊かに感じたり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で伝え合う能力を高め、自分の思いや考えを広げることができるようにする。</p> <p>【社会】目標（2）社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、自分の生活と結び付けて考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。</p> <p>第1段階 イ 公共施設の役割と制度</p> <p>①生活に関係の深い公共施設や公共物の利用の仕方を調べ、適切な活用を考え、表現すること。</p>

本学習におけるクラスの実態としては、パソコンを使う授業を楽しみにしており、意欲的に授業に取り組むことができている。各家庭にはパソコン、タブレット端末、スマートフォンなど、いずれかの情報機器があり、休日には動画を見たり、ゲームをしたりしている背景があり、クラスの生徒全員が、パソコンを活用して、各自で検索することができるなど、簡単な操作方法を習得している。今回は修学旅行の壁新聞を作るという目的をもたせ、単に好きなものを検索するのではなく、修学旅行の日程に沿ったものを検索し、記事を作り上げる活動を計画し、本時の目標として「調べた内容をパソコンのワープロ機能を使って入力することができる。」「入力した内容を印刷することができる」の2つとした。

今回8名の生徒のうち特に注目する生徒として生徒Dと生徒Eを設定した。生徒Dの実態は人前で発表することや文字や文章を書くことに苦手意識があるが、苦手なことにチャレンジする態度が見られるようになった。文字入力についてはかな文字入力でパソコンを使って文字を打つことができる生徒である。生徒Dの本時の目標は「調べた内容を文章にして、文字入力することができる」とした。生徒Eは自分の考えを発表したり、課題に主体的に取り組むことが苦手で、周りの状況をならって活動することが多い。文字入力についてはかな文字入力でパソコンを使って文字を打つことができる生徒である。生徒Eの本時の目標は、「自分で決めた内容を調べ、文字入力することができる。」と設定した。

(ウ) 本時における目標

- ・調べた内容をパソコンのワープロ機能を使って入力することができる。
- ・入力した内容を印刷することができる。

(エ) 学習活動の展開

本時の学習内容は表2のように計画した。

表2 「学習過程分析表」及び「注目してほしい活動内容」

■学習過程分析表

学 習 活 動		I 主体的な学び
【導入】	1 あいさつ	①学習活動への展開構成 ・物理的な環境設定 (座席配置、道具の位置、児童生徒・教員のグループ等) ・自己選択・自己決定の場面設定 (活動内容にかかる選択肢の提示等)
	2 前時までの取組を振り返る。	
	3 本時の学習を知る。 ・フジテレビについて調べたことを伝える。	
【展開】	4 フジテレビについて調べ学習をする。 ①インターネットで検索やガイドブックで調べる。 ②デスクトップのワークシートに入力する。	②見通しを高める。 ・動作補助を含む身体的支援 ・視覚情報による支援(手順表や見本、ジェスチャー等) ・音声言語による支援
	5 入力した内容を印刷する。	③興味・関心を高める題材及び活動設定
		④興味関心を高める教材教具の活用
	【まとめ】	6 本時の振り返り
7 次時の確認をする。		①モノと関わり、活動につなげる。 ・タイマーや視覚支援教材からの情報を活動につなげる。 ・プリント教材や内容にある必要な情報を学習活動につなげる。
8 あいさつ		②他者に情報を伝え活動につなげる。 ・コミュニケーションエイド等を用いた意思表示を活動につなげる。 ・質問、報告、考え等を意思表示して活動につなげる。
		③他者からの情報を活動につなげる。 ・周囲の雰囲気を感じたり、他者の見本を真似て活動する。 ・他者の活動を見て、自分のすべきことに取り組む。 ・他者の良さや失敗を自分の活動に活かす。 ・他者からのアドバイスや指示等を活動の改善につなげる。
		④仲間と活動する。 ・仲間と同じ活動のなかで自分の役割を行う。 ・それぞれの役割を行う。
	⑤活動を評価する。 ・活動を振り返り、自己評価する。 ・他者からの評価を受け、自己評価へつなげる。	
	III 深い学び	
	・学習により得た知識・技能を応用し、活動を展開する。	
	・学んだ知識・技能を授業場面以外へつなげていく。	

■注目してほしい学習活動

学習活動	授業者のねらい及び工夫ポイント
導入「3 本時の学習内容を知る」	電子黒板を活用して、手順を示す。フジテレビの検索する項目を、ホームページなどを紹介して、検索する際のキーワードや項目を画像も含めて提示する。具体的な内容を視覚的に伝えることで、主体的に取り組むことができるようにする。
展開「4 フジテレビについて調べ学習をする。②デスクトップのワークシートに入力する。」	生徒の目標や実態、興味に合わせたワークシートを活用する。ワークシートには大きなテーマを記しただけのもの、いくつかの設問を挙げ、その次に関連のある項目の設問のあるもの、まとめる内容の見出しやキーワードを提示し、調べたことを文章化する見通しがもてるようなものを活用し、主体的に取り組む姿勢がみられるようになるように働きかける。

本時の学習過程での導入では電子黒板を使い、前時までの学習内容と本時の学習内容を提示した。電子黒板を使い説明をすると、顔を上げて黒板に注目している姿勢が見られた。展開に入る時には、「デスクトップに貼り付けているワークシートを開いて始めましょう」と声を掛けると、生徒それぞれが各自で電源を入れてデスクトップにあるワークシートを開くことができ、次に検索するための画面も開くことができた。検索についてもフジテレビについて調べることが理解できており、それぞれでフジテレビを検索していた。検索するときには読み書きが苦手な生徒も、キーワードの初めの2、3文字を入力すると、調べたい項目が出て、その後は画像を検索し、次々と新しい画像につなげ、必要な情報を得ることができていた。それぞれのワークシートに検索した画像を挿入したり、説明の文章を入力したり、ガイドブックの説明から抜粋して文字入力するなど、パソコンに向かってそれぞれのペースで活動していた。画像をコピーして貼り付ける時やパソコンの操作方法が分からないときも教師が巡回しアドバイスをしたり、操作を一緒に行ったりしてワークシートの設問に沿って取り組む様子があった。上書き保存と印刷の手順については、前方の電子黒板に操作方法を提示して、各自がその画面を確認しながら、一人で操作している場面も見られた。

フジテレビについて検索する中で、自分の好きな車や風景、アニメキャラクターの画像を見て、授業に集中できない様子の生徒もいたが、注意するとともに、調べる内容を一緒に再確認することで、ワークシートの作業に戻ることができていた。

注目してほしい生徒としてあげた生徒Dの様子については、一人で図1にあるようなワークシートの設問を確認して、フジテレビのホームページとガイドブックを比較し、自分で文章化する内容を整理して入力していた。時折パソコンの操作方法や設問内容の確認を自分から質問して、課題を仕上げていった。タイプミスや誤変換をした時には独り言をつぶやくこともあったが、自分で気持ちを持ち直して時間内にワークシートを完成させることができた。

注目してほしい生徒Eの様子は、周りの友達の様子をうかがい、検索を繰り返し、ワークシートに

■フジテレビについて調べよう。

球体展望室「はちたま」はお台場のフジテレビ本社屋 25 階。球体展望室は、毎日たくさんの方が訪れるフジテレビのシンボル。臨海副都心を 270 度見渡せる大パノラマは圧巻です！！修学旅行のフジテレビで見学するコースになっています。

フジテレビフジさんショップは、フジテレビの番組や映画、アニメなどの多種多様なグッズが集まる店です。僕はワンピースが大好きなので、ワンピースグッズがたくさんあるので、見てみたいです。

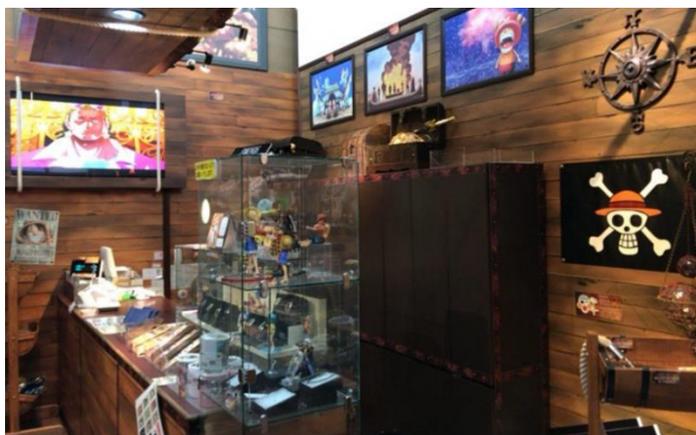


図1 対象生徒Dのワークシート

入力するまでにかなりの時間が経過していた。入力する内容を決断することに戸惑っている様子があり、3名の教師が適宜巡回し、ワークシートの内容を確認したり、検索した内容や画像について話し合うなどの対応をしていた。図2のワークシートにあるように文字入力は正確にでき、タイピングもスムーズだったが、設問に答える内容を自分で決めることができず、「これでいいよ」という教師の声を受けて入力が始まる状態であったため、ワークシートを時間内に仕上げるのが難しかった。

■フジテレビについて調べましょう。

1. フジテレビの球体展望室「はちたま」に行く予定になっているので検索して、説明を入力してください。

お台場のフジテレビ本社屋 25 階球体展望室は、毎日たくさんの方が訪れるフジテレビのシンボル。臨海副都心を 270 度見渡せる大パノラマは圧巻です!!

はちたまショップでは、はちたまグッズや、フジテレビ番組キャラクターグッズが買える!

はちたまショップでお目当てが買いたいです。

■2. フジテレビのめざまスカイ・コリドールがあります。行ってみたいですか。

ZIP を見ているのでめざましテレビはちょっとしか知りません。

■フジテレビのお土産物売り場の名前を入力してください。

図2 対象生徒Eのワークシート

本時の計画ではワークシートへの入力に引き続き、保存、印刷までの学習を計画していたが、検索や入力までで授業時間が終わってしまい、印刷については次の時間にすることとなった。

(オ) 成果と課題

本時は「調べた内容をパソコンのワープロ機能を使って入力することができる。」「入力した内容を印刷することができる。」の2点を目標に活動に取り組んだ。

「調べた内容をパソコンのワープロ機能を使って入力することができる。」についてはインターネットで検索し、ガイドブックで調べた内容を文字入力することができ、自分の興味のある画像を選び貼り付けることができた生徒がいた。

その一方で、検索を繰り返すだけで、ワークシートの設問に対して調べた内容を決めることに時間が多くかかった生徒や、ワークシートの内容以外の画像に気持ちが移ってしまい、集中が欠ける場面が見られることもあった。

目標としていた「入力する」という点については、すべての生徒がワークシートに文字入力できていた。

「入力した内容を印刷することができる。」については、授業時間の関係で次の時間での活動になってしまったが、電子黒板の手順に沿って、分からないことは生徒から質問することができ、各自で印刷することができた。これらのことから、本時の目標は一定達成できたと考えられる。

導入時に電子黒板を活用したことで、活動の見通しをもつことができ、主体的に取り組むことができた。パソコンを使っての活動は生徒が好きな活動であり、好きな画像を検索することが活動に対する意欲につながっていたと考える。

次の本時の学習過程の展開については、授業の展開はそれぞれのワークシートに沿って行うこととした。生徒それぞれの実態を考慮して設問を設けたワークシートにしており、それによって、活動の見通しを視覚的にもつことができ、安心して取り組むことができたと考える。また、個々のパソコンにワー

クシートを貼り付け、自分で操作して作業を開始するということで、楽しくスタートできるということもよかった点だと考えている。

本時の注目してほしい生徒Dと生徒Eの評価は次の表3のとおりである。

表3 本時の「注目してほしい児童生徒の評価」

■注目してほしい児童生徒の評価（※【目標達成度について】 A：十分達成できた。 B：ほぼ達成できた。 C：あまり達成できていない。 D：達成できていない。）

生徒名	本時の評価規準（抜粋）	学習活動に関する分析	目標達成度
生徒D	・調べた内容を文章にして文字入力することができたか。	ガイドブックを活用したり、フジテレビを検索したりして文章を入力することができた。自分の興味があるショップについては、箇条書きになっていた。タイピングが遅く、間違えることも多かったが、声掛けによって、モチベーションを保ち、最後まで取り組む姿勢がみられていた。	B
生徒E	・自分で決めた内容を調べ、文字入力することができたか。	ワークシートに沿って検索し、「はちたま」について入力できていた。ローマ字入力のタイピングはスムーズにできている。買いたいお土産については検索を繰り返すばかりで教員が代わる代わる声を掛けたが、決めることは難しかった。	C

生徒Dについては施設の概要や修学旅行での見学コースなどを含めた内容を作成するように意識づけを行いながら、活動に取り組むことができるようにワークシートを作成した。また、自分が楽しみにしていることを表現するときには、その理由も簡単に添えるように事前にポイントが確認できるようにしていた。

これらのことから、目標としていた調べた内容を文章にして、文字入力することについては十分評価できる内容であったと考える。

生徒Eのワークシートは、まず最初の設問は「説明を入力」とすることで、模倣からスタートできるようにし、次には「はい」か「いいえ」で答えられる設問にして、最後に希望や興味があることを入力できるように、段階的に取り組むことができるように工夫した。

「説明を入力」は検索した内容から、入力する言葉を選択することが難しい様子で、一緒に選択した後はスムーズに文字入力できていた。

「自分で決めた内容」ということを本時の目標としていたので、文字入力はとてもスムーズにできていたし、次々と検索を行うことはできていたが、目標の到達度としては十分ではなかったと考えた。

ワークシートについては研究協議の中で「選択肢を設けてはどうか」「項目の幅が広すぎる。」などの意見を頂いた。

ワークシートの内容が生徒の実態に合っていたのかについて検討し、問いかけをより明確化するなど見直す必要があったと考える。

また、「検索するとたくさん情報が出てくるので、どこを見るのか絞るようにするとよいかもしれない。」「調べながらワークシートを入力するのは難しい。」「調べる担当とワークシートを入力する担当を分けて行うのはどうか」という意見もあった。実態に合わせて、役割分担を行い、検索後の活動をより明確化したり、文章担当とイラスト・画像担当などの役割を分担させて活動することも場面によっては必要であったと考える。展開の中に検索、入力、保存、印刷の過程があり授業時間に対して活動内容の量も検討しなければならないと考えた。

パソコンで情報収集をする活動であるのに、検索を何度も繰り返し、検索だけにとどまっている様子が見られた。このことについてもワークシートの見直しや教員の配置を固定するなどの対応も考えていきたい。

ウ 高等部2年生における取組のまとめ

(ア) 実践を通して

今年度、高等部2年生では、「体験学習を豊かにするための主体的・対話的で深い学びの視点を生かし

た授業づくり」をテーマに生活単元学習の中で修学旅行の学習に取り組んできた。修学旅行は、生徒にとって高校生活の中で大きなイベントであり、思い出深い行事である。修学旅行を楽しい体験や経験に終わらせるのではなく、学習としての学びにつなげていくことが必要であると考えた。

そのための学習として調べ学習を実施し、インターネットやパソコン室の活用は生徒にとって興味をもちやすい教材になっており、ワークシートの設問に沿ってではあるが、自己選択・自己決定の場面で主体的に取り組む姿勢が見られた。ワークシート、パソコン、インターネットなどのモノとの関わりの中で対話的な学びが展開されたと考える。これらの場面で主体的・対話的な学びの場面があったと考えられる。

また、教科と関連させて、小遣いの使い方やお土産調べなどに取り組み、それぞれの学習での学びを修学旅行の計画に取り入れた。

修学旅行の中で、調べたお土産を購入したり、楽しみにしていたアトラクションに乗ったりと事前に調べたことが、実際の体験につながり、さらに楽しいという気持ちになり体験が深まったと考える。これらの過程に主体的・対話的な場面があり、事前学習が実際の行事につながった経験が深い学びの視点への契機となったと考える。

(イ) 学習過程分析表等の改善に向けて

研究協議はワークシートを活用し「うまく学習できていた様子 (付箋：青色)」「学習でつまずいている様子 (付箋：赤色)」「感想 (付箋：黄色)」の項目でグループワークを行い、「注目してほしい学習活動」「注目してほしい児童生徒の評価」について、3つの付箋の観点から話し合いを進めることができ、様々な意見が出された。

また、「主体的・対話的で深い学びの視点」からの授業改善につながる具体的な提言もあった。今後については、更なる学習過程分析表の活用と授業改善への共通認識を深める必要があると思われる。

4 おわりに

(1) 実践を通して

高等部では、学部テーマ「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした社会的自立を目指す学習」にもとづきを各学年で実践に取り組んだ。

1年生では、「役割を通してつながりを広げる集団づくり～主体的・対話的で深い学びに向けて～」を学年テーマに、公開授業でキーラックづくりに取り組んだ。

その中で、手順表という「モノ」との対話的な活動により、自身の役割を最後までやり遂げ、授業における目標を達成できたとの報告があった。

また、その日の授業を振り返り、自身の活動について考える「対話的な学び」を通して、課題を整理し、改善に向けて意識を高めようとする様子についても報告された。

2年生は、学年テーマを「体験学習を豊かにするための主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」とし、公開授業で修学旅行の事前学習に取り組んだ。

ここでは、修学旅行を楽しい体験や経験に終わらせるのではなく、学習としての学びにつなげていくためには、「調べ学習」という活動にどのような各教科等の要素を含めるのか、特別支援学校高等部学習指導要領における位置づけをもとに整理し、生活単元学習で実施したことが報告された。

「卒業後の社会参加を目指す『主体的・対話的で深い学び』の視点を生かした授業づくり」を学年テーマとした3年生は、研究授業を2回実施した。

1回目の研究授業で明らかになった課題を分析する中で、「対象生徒を12名から9名に変更」、「対話的な学びの視点から活動内容を見直し」という、生徒集団の再検討と学習内容の計画の2点について改善を行った。(表1)

こうした改善をもとに行った2回目の研究授業の後には「個人の考えをワークシートに記入し、次にワークシートをベースにグループで話し合いを設け、最後はまとめた結果を全体で発表するという活動が、予想よりはるかに真剣に自分から意見を出せたり、友達の考えを聞いたりできた。」との分析が授業者から報告された。

こうした今年度の1年生から3年生までの実践により、日々の授業における「主体的・対話的で深い

表1 研究授業1回目(6月)と2回目(11月)の授業の比較・改善点

展 開	活動・教材等		展 開	活動・教材等	
②動画を見てみよう	・動画	I 主体的な学び ①学習活動への展開構成。 ②見通しを高める。 ③興味・関心を高める題材及び活動設定。 II 対話的な学び ①モノと関わり、活動につなげる。 ③他者からの情報を活動につなげる。	③動画を見てみよう	・動画	I 主体的な学び ②見通しを高める。 ③興味・関心を高める題材及び活動設定。 II 対話的な学び ①モノと関わり、活動につなげる。 ②他者に情報を伝え活動につなげる。 ③他者からの情報を活動につなげる。 ④仲間と活動する。
③クイズに答えよう (一斉)	・正解への移動 ・カード		④-1 ワークシートをチェックする(個人)	・ワークシート	
④やってみよう (一斉)	・教師の後に 続き模倣		④-2 チームでワークシートの見せ合い・話し合い(グループ活動) ⑤発表しよう	・ワークシート ・見せ合い	
6月の授業			11月の授業		

学び」の視点をもとに、社会的自立を目指す学習活動をどのように展開していくのか整理を進めることができた。

特に3年生の授業改善の過程は、毎日の学習活動と「主体的・対話的で深い学び」の視点がどのように関連づくのか、一つとなるもので、今後様々な授業で活用できるのではないかと考えられる。

今後は、こうした報告をもとに、さらに具体的に「主体的・対話的で深い学び」を毎日の学習活動と関連づけ、授業改善に取り組んでいけるよう研修活動を重ねていきたい。

(2) 分析表改善に向けて

今年度、学習過程分析表の各項目を改善した点、授業分析に向けて「注目してほしい学習活動」「注目してほしい児童生徒の評価」を追加し、事後協議で活用した点には肯定的な意見が出された。

また、授業後の分析・評価のために、「各授業で適切な目標設定がなされているか」という視点を整理するためにも、今後学習指導要領にある各教科の段階・内容を学習指導案等に盛り込んでいく提案も見られた。

一方で、学習過程分析表を学年や教科でも気軽に活用できるよう簡略化できると授業改善にさらに活用しやすくなるという意見や、事後協議で討議する時間そのものが制限され問題解決に向けたアイデアを話し合い、共有することが難しい等の課題が出された。

こうした課題について検討を進め、さらに使いやすい授業改善ツールや効果的な事後協議となるよう改善を進めたい。

VI 寄宿舎の研究

テーマ「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした仲間づくり」

1 はじめに

昨年度は、新しく設けた上のテーマに沿って実践を進めてきた。その結果、舎生間の関係において「周りとの関わり方の深まり」が見られるようになり、更には自分のことだけではなく「お互いのやりとりの仕方に注意を向ける」ことのできる子どもも育ってきている。しかし一方では、自分の思いを表出することができずに大きなストレスを抱えてしまった結果、気持ちが沈んでしまったり不適応行動につながるケースも少なくない。

そこで今年度は、周囲との関わり方の質を上げていくことや関わりによって生じた困り感を周囲に対して表出することを通して、より良い関係づくりにつなげていくこと。さらに適切なコミュニケーション能力を身に付けていくことをねらった取組を展開してきた。

ここでは「片方が一方的に受け身になる」のではなく、「お互いに伝え合う」ことを大切にし、互いの立場を尊重しながらやりとりを積み重ねていけるように支援してきた。

以下の各ホームの実践においては、それぞれの個人の課題やホーム全体の課題に即した内容がまとめられているが、全てに共通しているのは「必要に応じて周りに助け（ヘルプ）を求めることができるようになる」という点である。しんどさや危険を感じた時にどのように対応すれば良いのか、全ての子どもたちに当てはまる幅広い課題だと考える。

2 各ホームの取組

(1) はとホームの取組

ア 舎生の実態と研究課題

今年度のはとホームは、中学部と高等部にそれぞれ1名ずつ新入舎生を迎え、小学部生1名、中学部生3名、高等部生15名の計19名で寄宿舎生活を送っている。ホーム役員を中心にホーム会で、月目標や行事の企画を考え、子どもたちの意見や要望を話し合っただけながら日々生活を送っている。友達同士の口げんかや、嫌なことがあって落ち込んだときには、高等部生が話を聴き、励まし、時には気分転換できるよう遊びに誘うなど心温まる場面も見られる。

しかし、異年齢の集団の中で親元を離れての生活は、一人で静かに自分の時間を過ごすことが難しく、また相性の合わない友達もいてストレスも溜まる。言いたいことが言えずに笑って我慢する子どももいれば、暴言や執拗な関わり方をする子どももいる。そのようなときには、指導員から言葉を掛けて話を聴き、友達との間に入ることで解決することが多いが、卒業後の生活を考えると、自分で伝える力や相談する力を育む必要があると考える。そこで、学校や寄宿舎でのストレスを発散して気持ちをリフレッシュできること、そして、困ったときに友達や指導員に相談しやすい環境を日頃からつくることを目的に取組を行った。

イ 実践事例

(ア) 子どもの実態と研究課題

まず、支援を行うにあたり、子どもたちの主体性を育むために以下の①～④に留意して話し合いの場（集い）を設定した。集いは、『だいたい!!夜のティータイム』と称して、高等部生対象に夕食後に学習室で行った。

① 参加は自由とする。（参加してほしい子どもには、事前に言葉を掛ける）

- ② 発言しやすいように5名前後の小グループでの会を設定する。
- ③ 指導員の考えを押し付けず、子ども自身で考え意見を出し合える雰囲気づくりに努める。
- ④ 「してはいけない」「ダメ」などの否定的な言葉を掛けるのではなく、「どうすればいい？」など一緒に考えるような関わり方をする。

表1 子どもの実態

A(高2)	思いが通らないときや緊張しているときに、友達や指導員に暴言を吐く、壁を殴るなどの行動が出る。普段はとても優しく、進んで手伝いもし、年下の子にはよく言葉を掛けてくれる。スマホ所持。依存傾向あり。
B(高1)	バスケが好き。誘われたり、頼まれると断れない。スマホ所持。
C(高3)	将棋とゲームが好き。女性の教職員にセクハラ発言があるも、本人は注意されても気にしていない。嫌なことがあっても言えずに我慢する。
D(高3)	余計な一言を言って、相手を怒らせることがよくある。友達との距離が近く、執拗に抱きつくことがある。スマホ所持も家庭でのみ使用。
E(高3)	彼女がいる。コミュニケーションが苦手と同じ会話を繰り返す。

(イ) 取組の内容

a テーマ1: ストレスを発散する方法を考えよう。(対象者ABCDEを含む10名)

寄宿舎で集団生活を送る子どもたちは、イライラすることやストレスが溜まることが多い。そのため、人や物に当たるのではなく他の方法でストレスを発散できないかを考える機会をもった。

「どんなときにイライラするか？」をみんなに聞くと、学校で注意されたこと、寄宿舎でスマホの時間が決まっていて短いこと、家で親に怒られることなど、どんどん出てきた。

そこで、自分なりのストレス発散法を5つ考えて紙に書いてもらった(図1・2)。1つしか書けない子どもや、友達に聴きながら書く子どももいた。みんなのストレス発散法を紹介しながら、最後の5つ目には、「〇〇に相談する」と書くようにし、誰に相談すれば良いか困らないように支援した。ストレス発散法を書いた紙は、自室の壁に貼ってイライラしたときなどに指導員と一緒に確認するようにしている。

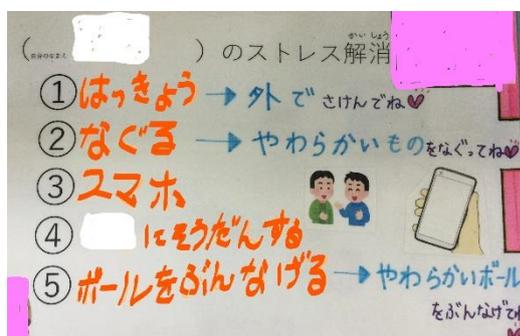


図1 Aのストレス解消法

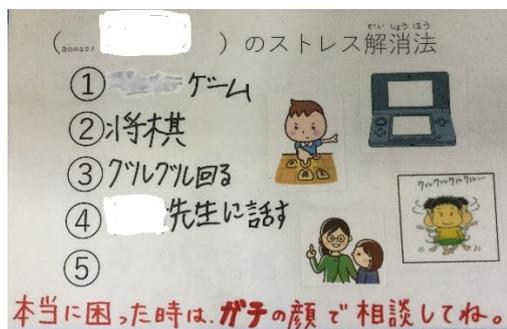


図2 Cのストレス解消法

b テーマ2: 上手な断り方を話し合おう。(対象者BCDEの4名)

人との関わり方で課題が多くみられるBCDEの4名を対象に実施した。次の3つの設定についてペアになりロールプレイを行った。

設定1 行きたくない場所へ誘われたとき

設定2 怪しい人や不審者に触られそうになったとき

設定3 しつこい電話やメールが来たとき

ロールプレイでは、友達からの誘いに、Bは、「やめて」や「親にダメと言われているから」と断ってはいるものの、迷いや不安の表情で指導員の顔をちらちら見ながら断る場面が見られた。軽犯罪法やマナーの話をする中で、「まだ18歳じゃないから行かない(18禁コーナーなど)」や「もう遅いからまた明日メールするね」とうまく断る理由を見つけ、相手に伝えることができた。Eは、友達のロールプレイを見て参考にしながら断ることができた。ロールプレイを重ねるにつれて自信がついていき、相手を見て大きな声で断れるようになった(図3・4)。

しかし、Bは違った人や場面で繰り返し頼まれると断れないと思われる。はっきり大きな声で「やめて」ということ、ジェスチャーもつけること。断れないときは、その場で返事をせずに、誰かに相談してから後日返事をするように相手に伝えると良いことを話した。

一方で、よく友達に抱きつくDに対しては、ロールプレイで抱きつき役をすることで、自分が加害者になる可能性もあることに気付くねらいもあったが、自分に投影することは難しかった。



図3 取組の様子



図4 BとDのロールプレイ

c テーマ3 : デートプランをつくろう。(対象者: BCDEを含む6名)

彼女とのデートプラン、もしくは友達と遊ぶプランをそれぞれが事前アンケートに記入して、お互いのプランについて意見を出し合った。1回のデートの予算では、千円から一万円まで幅が広く食事の支払いは、自分が全部出すと、割り勘に意見が分かっていた。一通り全員のプランを見た後、指導員が作成したステップ1から5までのシミュレーション動画を使い、待ち合わせ場所や食事の支払いをどちらがするか?などの例を見ながら再度考える機会をもった。内容は以下のとおりである。

ステップ1 連絡先の交換

ステップ2 デートの準備

ステップ3 デートプラン

ステップ4 振られたとき

ステップ5 順調にお付き合いが進んだとき

ステップ1では、電話番号が他人に渡ると犯罪に巻き込まれることや、だまされることもあるので、誰にでも教えるのではなく、信頼できる人にだけ教えること。ステップ2では、相手により良い印象をもってもらえるように、服装・寝ぐせ・口臭など身だしなみのチェックをしたほうが良いこと。ステップ3では、支払いについては、お金の貸し借りでトラブルになることもあるので割り勘が理想的で、対等な関係をつくるほうが良いこと。トラブルにならないためには、初めのうちは割り勘のほうが望ましいこと。ステップ4では、うまくいかないこともある。辛いけど諦めることも大切で、時間がたてばき

っと新たな出会いがやってくる。ステップ5では、友達や親に紹介しておくとき助けてくれること。最後に、今日紹介したようにしないといけないのではなく、みんなで話したことを参考にしながら自分たちに合ったデートプランを考えてほしいことを伝えた。

この取組では、ステップごとにじっくり話し合う余裕がなく、全体を通して指導員が一方向的に話すことが多くなったため、テーマを1つか2つに絞って子どもが意見を出し合えるように工夫ができれば良かったと感じている。



図5 シミュレーションビデオを視聴中

だいたい夜のティータイム アンケート
あなたならどんなデートをしたいですか？予定を立ててみよう！

① デートではお茶を「何円」くらい使いますか？(例：1,000円)	1万 10くら
② 二人で「どこへ」行きますか？(例：マニアック系)	伊勢
③ 『お茶』に「どこで」持ち帰りますか？(例：10円以下持ち)	9100 300円の箱
④ 持ち帰りは場所へは、「どうしようとして」行きますか？(例：JR、徒歩、車の送迎)	自転車
⑤ 食事は「どこで」食べますか？(例：ココス)	バケーション
⑥ 食事は誰が払いますか？(例：自分、相手、割り勘)	自分
⑦ その他、先生や友達に聞きたいことがあればなんでも書いてください	先生への夜のデートでしてほ

図6 Eのデートプラン

ウ 成果と課題

「だいたい!!夜のティータイム」では、3つのテーマを通してまずは自分で解決すること。そして、解決できないときには相談できるように、信頼できる人を見つけておくことが大切であることを伝えてきた。お茶を飲みながら肩の力を抜いて話ができるような場を設定したり、スクリーンを使って興味をひく工夫をしたりすることにより、集いという場が苦手な子どもでも参加できた。

また、小中学生に対しては、夜の7時にテレビ室で「パプリカ」「アララの呪文」「千本桜」の歌とダンスをしてストレスを発散している。なかには、「今日も踊りたい」と洗濯干しや着替えを素早く済ませてテレビ室に集まる子どももいる。それに高等部生も加わって一緒に楽しい時間過ごすのが日課となっている。覚えたダンスを誕生会やホームのお楽しみ会で披露することで、子どもたちが輝ける場の一つにもなっている。

最近では、友達と口げんかをしたときなどに自室に入り、一人になることで自分の気持ちを切り替え、その日のうちにまた仲良く過ごす姿も見られ始めた。また、困ったときだけでなく、卒業後の不安や悩みを指導員に相談に来ることなども増えてきた。

しかし、ほとホームには不登校の子どもや、自分の思い通りにならないときに他傷や器物を壊すことで意思を表現する子どもなど、集団生活に課題をもった子どももいる。朝の起床の言葉の掛け方一つで子どもの気持ちが大きく変わることもある。

そのため、こうした小グループでの集いの時間をきっかけの一つにして、指導員と子どもたちの信頼や共感を深めていきながら、一貫した支援を継続していくことが大切である。また、学校の性教育の取組と家庭での子どもの様子を情報交換しながら、日常生活における支援の質を向上させていきたいと考える。

(2) つばめホームの取組

ア 舎生の実態

今年度のつばめホームは、新しく小学部1名、高等部2名の新入舎生を迎え、小学部1名、中学部4

名、高等部 14 名の計 19 名でスタートした。寄宿舎の実践研究テーマである「主体的・対話的で深い関わりの視点を生かした仲間づくり」を目指した取組も 2 年目となり、自治活動に限らず日々の生活や当番活動にも生かされる支援へとつながっている。

子どもたちの関係性にも変化が見られだし、お互いの個性を受け入れ、苦手なことにはグループのメンバー同士で声を掛け合い助け合う姿も増えつつある。その一方で、乱暴な言葉づかいや、相手の気持ちよりも自分の気持ちを優先してしまう行動でトラブルが起こりやすいという実態がある。

イ 研究課題

寄宿舎では、保護者の願いを踏まえた個々の目標を設定し、実態に応じた支援を心掛けている。

特に高等部 2 年生は、校外での現場実習が始まり、社会生活スキルの向上を期待されている学年である。つばめホームには 5 名の高等部 2 年生が所属しており、休日の過ごし方（家庭・デイサービス）や近隣にコンビニや商業施設の在るなし、小遣いをもらっているか否かなど、取り巻く環境も異なっている。計算はできても、限られた予算をやりくりし、買い物をするという社会生活の中での主体的・対話的な関わりについても経験の違いが見られる。そこで、今年度のつばめホームの取組として、高等部 2 年生 A への「コミュニケーション力」と「金銭の管理力」の向上を目指した取組をまとめる。

表 1 A の実態

高等部 2 年 自閉症スペクトラム障害	自宅：周辺にコンビニや商店はない 【帰省帰舎方法】自家用車	平成 30 年 4 月入舎
<p>【実態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・甲高い声が苦手 ・音読の力が高いが、意味を知らない言葉がある。 ・口頭よりも、プリントやテキスト（視覚的要素）などが理解しやすい。 ・生活の流れを基本としたルーティーンがある。 	<p>【休日の過ごし方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福祉デイサービスの利用 2 箇所 ・地元のイベントへの参加 ・母親と妹と自家用車で外出（支払いは母親が対応） 	<p>【保護者の願い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人を傷つけない優しい言葉づかい。 ・体調不良など困ったことへの状況に対応する力。 <p>【本人の願い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（教職員の）付き添いなく、単独で行動したい。 ・部活に入りたい。 <p>（問題行動によりクラブ活動を退部となる）</p>
<p>【昨年の様子】</p> <p>入舎当初は、係や当番に参加することや臨機応変なことが苦手なため、欠席者の代役など急な依頼は拒否する。</p> <p>「突き飛ばし」「特定の生徒へのつきまとい」「放課後に無断で教室へ入り教師の私物を持ち出す」「トイレへ隠れる」ことがあった。ケース会にて、学校と寄宿舎が統一した支援として、所在の把握や付き添い・見守り支援することを確認。寄宿舎では他ホームへの協力依頼もした。</p>		

ウ 実践事例

(ア) 「めざせ！単独行動！！～コミュニケーション力、判断力のスキルアップを目指して～」

a ねらい

- ・人を傷つけない言葉づかいを身に付ける。 【コミュニケーション力の向上】
- ・状況に適した行動を知る。 【自己抑制力の向上】
- ・困った時に周囲に伝えられるようになる。 【判断力の向上】

b 方法

- ・テキスト形式が分かりやすいAにあわせて、オリジナルのテキストを作成。
- ・選択肢が多く選ぶことが難しい場合は、カードを作成し一つの言葉に集中できるようにする。
- ・集中して取り組み、質問しやすい環境に配慮し、自室で指導員と1対1での取組とする。

c 留意事項

- ・指導員から正しい答えに誘導しない。
- ・Aが正しい答えを探るような独り言を言っても動揺しない。
- ・「いつも、どうしてる？」と普段していることを記入できる言葉を掛ける。
- ・間違った答えでも過剰に反応しないように平常心で対応する。
- ・Aの回答には、採点や指摘ではなくポジティブなコメントを記入する（図1）。
- ・回答済みテキストは家庭へも配布し情報共有する。
- ・振り返り（回答へのコメントを音読・解説）の時間にはロールプレイを積極的にする。

d 内容

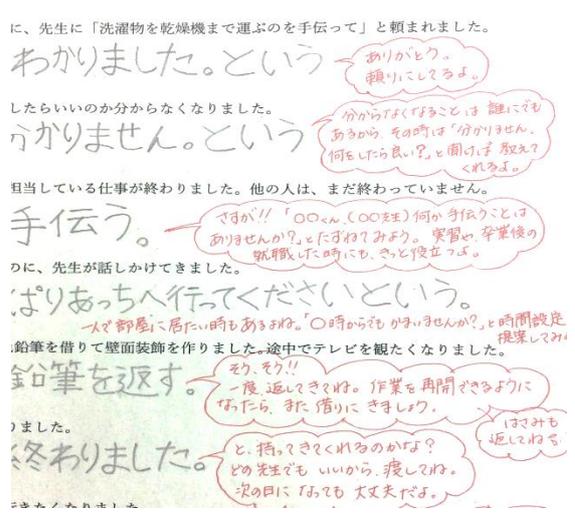
	取組内容	取組の様子
第1段階	<p>『こんな時、Aくんならどうする？』 学 校…登校から下校までの言動 寄宿舎…下校から就寝までの言動</p> <p>質問内容 【挨拶・礼儀】【困った時の相談】 【イライラの原因からの回避】 【気持ちの伝え方】【状況判断】</p>	<p>高等部2年生になり、校外での現場実習に向けて、レベルアップを目指した取組を始めることを伝える。テキストの説明を聞きながら「レベルアップ」という言葉をうれしそうに繰り返しつつやっていた。</p> <p>正解しなくてはいけないという思いからか、指導員の様子を気にするので「間違ってもいいよ」「いつもはどうしてる？」など、安心して取り組める言葉掛けが必要だった。</p>  <p>に、先生に「洗濯物を乾燥機まで運ぶのを手伝って」と頼まれました。 わかりました。という <small>ありがたう。頼りにしてるよ。</small></p> <p>したらいいのか分からなくなりました。 わかりません。という <small>分からずは「どう」は誰にでもあがる。その時は「分かりません。何をしたらいい？」と聞けば「教えよ」くれるよ。</small></p> <p>担当している仕事が終わりました。他の人は、まだ終わっていません。 手伝う。 <small>ですが!! 「〇〇くん(〇〇先生)何か手伝うことはありますか?」とたずねてみよう。実習の卒業後の就職時に、さして役にたつよ。</small></p> <p>に、先生が話しかけてきました。 ぱりあっちへ行ってくださいという。 <small>一人が部屋に居ない時もある。〇時から帰るの? と時間設定機を借りて壁面装飾を作りました。途中でテレビを観たくなりました。</small></p> <p>鉛筆を返す。 <small>そり、そり!! 一度返してきませぬ。作業を再開できるよにしたら、また借りにきませぬ。</small></p> <p>ました。 終わりました。 <small>と、持ってきたのの? どの先生でも いいから、寝してね。 次の日にもうも 大丈夫だよ。</small> <small>はまも返してね。</small></p>

図1 テキストと指導員のコメント

第2段階

『我慢するってどういうこと？』

- ① 苦手な友達に会ったとき、どんな気持ちになる？
- ② 苦手な友達に会ったときに何を我慢したのかな？

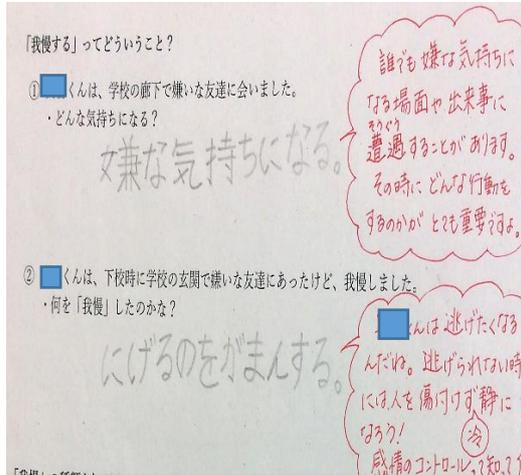


図2 我慢について

問題文の音読後、書き表すことが難しい様子だったので、指導員が口頭でいくつかの選択肢を提案し選んでもらう。

①の質問には「嫌な気持ちになる」と記入し、②の質問には「逃げるのを我慢する」と記入した(図2)。記入できたことに安心したようで、緊張した表情から穏やかな表情に変化し、リラックスしているときに出る独り言や体を揺らすなど、いつもの様子が見られた。我慢することは大切なことだと理解できていた。指導員からは「我慢しなくてはいけない場面に遭遇したときに、どのような行動をとるのが重要だ」と言葉を掛ける。

『我慢』の種類を知ろう！については多くの選択肢に圧倒され「分からない」と選ぶことができなかった。後日、選択しやすい教材を作成し取り組むことにする。

第2段階

『我慢の種類を知ろう！』

- ① 必ずしなければいけない我慢 (法律的)
- ② 今の時間だけする我慢 (状況的)
- ③ 相手に譲るための我慢 (思いやり)
- ④ しなくて良い我慢

【選択肢とした言葉】

痛い／会いたい／泣きたい／さみしい
 欲しい／しゃべりたい／笑いたい／座りたい
 つらい／疲れた／眠い／叩きたい／起きたくない／遊びたい／人の匂いをかぐ／のどの渇き／TVを観たい／突き飛ばしたい／たくさん食べたい／トイレに行く／触りたい (他人の持ち物・顔・体・髪) / 誤魔化す(嘘をつく) (図3)

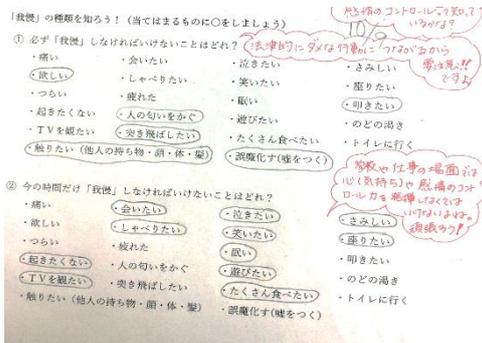


図3 我慢の種類の手書きテキスト

前回の取組の様子を踏まえて、①～④の項目と選択肢をカードにし、各項目に振り分ける方法で取り組んだ。

言葉が書かれた26枚のカードが並んだことで、困惑した様子が表情にも表れていた。それぞれの言葉を、指導員が動作を加えながら読み上げるという方法を取り入れると、各選択肢の状況を想像し振り分けができていた(図4)。

取組を通して、してはいけないことも明確となったようで、後日「真面目に生きていきます」とAより決意表明が聞かれた。



図4 取組の様子

第3段階

『言葉の引き出しを増やそう！』

- ① 平日の友達との日常会話
- ② 平日の先生との会話
- ③ 休日のお父さん、お母さんとの日常会話
- ④ 休日の近所の人との会話
- ⑤ 休日のお店の人との会話

土佐弁	① 友達バージョン	② 先生バージョン	③ 母親バージョン	④ 近所の人バージョン	⑤ お店の人バージョン
おはよう	おはよう	おはようございます	おはようございます	おはよう	おはよう
ありがとう	さようなら	さようなら	さようなら	さようなら	さようなら
分かりました	分かりました	分かりました	分かりました	分かりました	分かりました
これ、知っていますか?	知っていますか	知っていますか	知ってる	知ってる	知っていますか
ようわらん	わかりません	わかりません	わかりません	わからん	わかりません
かまさん?	いいですか	いいですか	いいですか	かまんですか	いいですか
おおきに	ありがとう	ありがとう	ありがとう	ありがとう	ありがとう
楽しみにしています	楽しみにしています	楽しみにしています	楽しみに	楽しみに	楽しみに
何していますか	何していますか	何していますか	何してる	何していますか	何していますか
まかしとき	まかしとき	まかしとき	まかしとき	まかしとき	まかしとき

図5 言葉の引き出し

各項目別にテキストを作成する予定だったが、同じ言葉でも相手によって違ってくるのが視覚的にも比較できる一覧表を用いたテキストに変更した(図5)。

一般的な学習に用いられる言葉ではなく、Aが興味・関心をもって取り組めるように、土佐弁からの変換とした。

Aの日常会話は標準語だが、テキストに使用した21個の土佐弁の中で理解できなかったのは3個だけだった。

今回の取組でも、正解しなくてはいけないという思いからか、記入をちゅうちょする様子が見られたので、「自分が考えた答えを書くと良いよ」と言葉を掛けた。「土佐弁検定」への挑戦も打診してみたが、「いいです」と乗り気ではない返事が返ってきた。指導員の欲張った考えを反省する。

成果

「めざせ！単独行動！！」をスローガンに取り組んできた成果として、12月より教師が付き添わず一人で下校するようになった。寄宿舎でも以前は所在の把握や見守り支援をしていたが「下校後は校舎や教室へ入らない」「人につきまとわない」ことを確認し、念願の単独行動ができるようになった。Aは「問題を起こさず、真面目に生きる」と3度つぶやき、自分に言い聞かせているようだった。Aとしては、自分の行動が認められたという今年度一番うれしい評価であり、自信になったようである。

今年度は自治の面でAの力が発揮できる役割をもたせるなどして、ホームの中でも頼れるお兄さんとして認められることを実感できるように支援をしてきたことも相乗効果をもたらしている。例えば、寄宿舎のなかよし会の選挙管理委員として、人前で指導員が準備した原稿を読み上げる機会があったことも、Aにとっては丁寧な言葉づかいを知ることにつながったようである。2学期末には、原稿がなくても、箇条書きされた連絡事項をもとに、自分で考え分かりやすいように伝えることができていた。話し方も丁寧で聞き取りやすく、他の子どもたちが静かに聞こうとする雰囲気づくりに貢献している。トラブルになるような発言もなく、コミュニケーション力のスキルアップにつながっている。

課題

困ったときは、そのことに関して独り言のようにつぶやいて、周囲の人に気付いてもらい、助言や選択肢を与えてもらっている。選択肢を用意すると必要な判断ができているので、様々な場面を想定した学習や経験を積み重ね、Aの中に選択肢が増えるよう、判断力のスキルアップを目指した取組を続けていきたい。

(イ)「お金の使い方を学ぼう！～使って貯めて、楽しいお小遣いやりくり体験～」

a Aの実態

- ・自宅近辺にはコンビニや商業施設がない。

- ・小遣いをもらっていない。
- ・休日のおやつ購入は母と妹と外出した時にAが選び、母が支払いをしている。
- ・暗算で計算することができる。

b ねらい

- ・小遣い管理ができるようになる。【管理力の育成】
- ・限られた予算の中で、おやつ(舎食)を購入する疑似体験をする。【生活力の向上】
- ・購入の疑似体験場面で、対話力を身に付ける。【コミュニケーション力の向上】
- ・月末に残金を銀行の預け入れ方法で貯蓄体験をする。【生活力のスキルアップ】
- ・予算では購入できない場合に、貯蓄から引き出し使うことで、貯蓄の必要性や喜びを知る。【自立心の育成】
- ・アルバイトの疑似体験をする。【働く意欲の育成】

c 方法

- ・おやつ(舎食)を、買い物形式でやりとりをする。
- ・手作りの小遣い帳や貯金通帳を使って、記入の仕方や入金方法を体験する。

d 準備物

- ・おもちゃのお金(毎月3000円の小遣い設定)
- ・メモ帳(表:小遣い帳/裏:貯金通帳として使用)
- ・スタンプ(印鑑として代用)・振込、引き出し用紙
- ・貯蓄(預け入れ・引き出し)手順表、記入例(図8)
- ・ポイントカード・サングラスなど

※ポイントカード…アルバイト回数をチェック

指導員の名前を明記し『つばめスタンプ』を押す



図7 取組道具セット

e 留意事項

- ・自主的に取り組もうとする気持ちを育てられるよう、言葉づかいや、小遣いが足りないときの相談など、些細なことでも褒めることを心掛ける。

f 内容

※指導員… [指]

	取組内容	取組の様子
事前学習として	<p>[指]・取組について保護者への説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休み中に、小遣い制の導入と外出先で現金での買い物及び支払い体験の協力をお願いする。 <p>【7月】1週間分の小遣いとして700円を渡す。</p> <p>【8月】1か月分の小遣いとして3000円を渡す。</p>	<p>母より、寄宿舍からの提案に沿って取組をしたとのこと。場面によっては母が支払うこともあったが、Aも楽しんで取り組んでいたようである。</p> <p>帰省日や帰舎日の保護者との雑談の中で小遣い帳を使った管理を考えていることや、「Aがアルバイトをしたいと言っていたが、現実的には難しいだろう」と母から報告があった。Aの気持ちを尊重し、当初計画していなかった小遣い帳とアルバイトを取組に加えた。</p>

<p>9月</p>	<p>[指] おやつ料金は小遣いが余る料金設定にする。</p> <p>[A] ・月末に残金を入金する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記入例を参考に預け入れ体験をする。 <p>※通帳は小遣い帳の裏面に作成し、Aが管理する。</p> <p>※本人用スタンプは指導員室で管理をする。</p>  <p>図8 預入記入例</p>	<p>事前に新しい取組を始めることを伝えていたが、指導員と2人で話をする場面では、少々緊張気味の表情だった。</p> <p>小遣い帳への記入は初めてだったようで、説明や見守り支援が必要だった。</p> <p>週明けには記入方法を忘れてしまい、支出欄に商品の金額ではなく、財布から出した金額を記入してしまうことが続いた(図9)。</p> <p>9月末には、記入方法も定着し記入ミスがなくなった。</p>  <p>図9 取組当初の記入(右:訂正後)</p>
<p>10月</p>	<p>[指] 月末に小遣いが足りなくなる料金設定をする。</p> <p>[A] ・指導員に貯蓄からの引き出しを依頼する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記入例を参考に用紙に記入し引き出す。(図10)  <p>図10 払戻記入例</p>	<p>小遣いが足りなくなり、指導員におやつが買えないことを伝えてくる。貯蓄から引き出すことを提案した。早速、担当指導員を探し体育館まで来て「おやつが買えないので、お金を引き出したいです」と伝えることができた。せりふは、事前に指導員から教えてもらっていたので、Aの口調にも自信がうかがえた。</p> <p>貯蓄額が減ることよりも、おやつが買える金額を手にしたことで、貯蓄の大切さを実感したようだった。</p>
<p>11月</p>	<p>[指] ・乾燥機室への運搬アルバイト(1回⇒スタンプ1つ)について説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・月末に小遣いが足りなくなる料金設定をする。 <p>[A] ・指導員に貯蓄からの引き出しを依頼する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き出し体験をする。 	<p>今月より、アルバイト(料金が発生する手伝い)の取組も始める。アルバイト代は100円×スタンプの数とし、月末に指導員が通帳へ記入することをAに説明する。取組を始める前に、通帳と振込用紙を確認する。</p> <p>貯蓄からの引き出しは2回目ということもあり、Aから「用紙が必要ですね。それと、例(記入例)も必要です」と言うなど意欲的な様子が見られた。</p>

<p>12月</p>	<p>[指]・学期末に小遣いが余る料金設定をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貯蓄したお金を使って3学期の行事のためのサングラスなどを購入する疑似体験を提案する。 <p>[A]・貯蓄残高を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小遣いの残金と合わせて、購入疑似体験をする。  <p>図 11 購入の様子</p>	<p>計画では月末に通帳に入金するようになっていたが、Aより「アルバイト代をその日に欲しい」と相談がある。理由は「小遣いが増えるのがうれしい」とのこと。今回は、働く意欲につながることを優先し、本人の思いに寄り添い「当日支給」の提案を採用する。</p> <p>その後、いつもは指導員に気付いてもらえることを期待した行動をするAだったが、就寝前になると「アルバイト代をください」とうれしそうに伝えてくる姿が見られた。</p> <p>購入疑似体験では、欲しい物の金額を確認し小遣いの残金と貯蓄を合わせて丁度になるように引き出していた。理由を聞くと「明日はおやつを買いません」と答える。終業式前日なので財布に小遣いを残さないように考えたようだった。それぞれの品物の使いやすさや自分に似合うかを確認し選ぶこともできていた。(図 11)</p>
<p>取組後の変化</p>		
<p>毎日のおやつ購入時に「ください」「おねがいします」など、指導員との対話を通して、自分の思いを伝えることに抵抗がなくなりつつある。また、指導員からの無理な金額設定やお釣りの間違いなど、想定外のことが起こった時の対応力も身に付いてきた。舎外学習や休日でも、限られた予算の中で計画的に買い物ができるようになった。そして、指導員とのやりとりの中で楽しい時間が共有でき、コミュニケーション力の向上も見られている。</p>		
<p>次回の取組に向けて</p>		
<p>取組当初の計画では、アルバイト代は月末に通帳へ入金する流れだったが、Aから当日支給の相談があり、取組への意欲を優先した。今後はアルバイト代の支給日を明確にし、自分の成果として分かりやすいような取組をしていきたい。</p>		

ウ 取組を振り返って

今回、Aが自分のペースで考えられるようにテキストの活用や、体験型を意識した取組を計画し実践してきた。そして、Aが指導員に助けを求められる環境作りや雰囲気づくりにも配慮した。

「めざせ！単独行動！！」の取組のテキストや「お金の使い方を学ぼう！」の取組の中で、おやつを小遣いで買うことについても、人とのやりとりを通じて折り合いをつける力がついたと強く感じている。取組の場面以外でも今年度は、Aの生活に主体性や心の豊かさの変化が感じられることが多かった。そうしたAの成長が表れているエピソードを紹介したい。

「みんなの誕生日を覚える！」という独自の年間目標を立てているA。舎生や教職員の誕生日当日に、Aから「今日、お誕生日ですね。おめでとうございます。」と声を掛け、驚いた表情の後に「ありがとう！」と喜ぶ相手の姿を目の当たりにし、サプライズに成功した気持ちをかみしめているような表情で去っていくAの姿をよく見かけるようになった。寄宿舍でもエヴァンゲリオン好きで有名なBの誕生日

には、家族で外出した商業施設で以前エヴァンゲリオンのパンフレットが無料配布していたことを思い出しプレゼントしようと思ったA。ところが、設置場所にパンフレットはなく【欲しい方は係員に声を掛けてください】の文字を目にし、自ら行動を起こし無事パンフレットを入手した。そして、翌週の誕生日に他の舎生が就寝準備に取り掛かる中、Bと2人きりになるタイミングを逃さずお祝いの言葉の後、「サプライズ」と言ってプレゼントを渡すという演出をし、Bにとっては思い出深い最高の誕生日となった。後日、「おめでとう！と言ってくれたのはAだけや…」とBが言い、Aとおしゃべりを楽しんでいる姿も見られ、取組の成果の表れと感じた。

エ まとめ

社会生活の中での主体的・対話的な関わりを学び、卒業後の生活に向けて人間性や社会性の向上につながる取組として、Aの「コミュニケーション力」と「金銭の管理力」の向上を目指し実践してきた。

取組前は、係や臨機応変なことも抵抗が強かったAが、周囲からの提案に対して「やらない」「いや」などの返答ではなく断る理由を相手に伝えることができ、自分の気持ちに折り合いをつけられるようになった姿に成長を感じ、取組の成果を実感している。

今回の取組のテーマは、保護者の願いに沿ったものであるため、保護者にも取組内容を伝えた。そして、休日や夏休みに家庭でもできる取組の提案や取組の進捗状況は、家庭連絡帳を活用し丁寧に伝えるようにした。このような保護者と連携した支援をしてきたことも成果につながったと考えられる。今後も、保護者と連携し、将来につながる取組を続けていきたい。

(3) すももホームの取組

ア 舎生の実態と研究課題

今年度のすももホームは新入舎生5名を迎え、中学部7名、高等部8名の計15名でスタートした。昨年度は「仲間を認め合って成長し合う」ことを目標に、「相手を認める」「感謝される」体験を増やし、一人一人の自信につなげたことで「相手を否定せずに受け止める力」が少しずつ育ってきていると感じる。

寄宿舎は家庭的な雰囲気の中での仲間づくりを心掛けているが、すももホームでは多くの子どもたちが日頃より指導員や友達との関わりが過度なスキンシップとなり腕を絡ませる、膝枕をする、抱きつくといった行為が見られていた。一方、遊びの中で力加減が分からず相手にけがをさせてしまいそうな場面もあった。また思春期の子どもが多く、異性に興味・関心をもち、お付き合いをしている子どもや異性からボディタッチをされても何も言わない子ども、「知らない人でもイケメンにはついていく」と言う子どもの数も多く、性の学習を通して他者との関わり方や、性に関する知識やスキルを身に付ける必要があると考えた。

そこで今年度のすももホーム年間方針である「助け合い、共に学び、お互いを大切に思う気持ちを育む」ことを目標に、自分と相手の違いを知り、適切な人間関係を築いていける力を育てるために「距離感」をテーマとして、それぞれの発達段階に応じて取り組むことにした。

イ 実践事例

(ア) 性の支援「距離感」

a 取組の内容

距離感についての基本的な知識を身に付けることをねらいとし、中・高等部生11名を対象に、6月～9月の間に性の支援の学習会を3回行った。学習会では、指導員からの一方的な働きかけではなく、意見や質問が自然と出し合えるように少人数制とし、対話的な学びとなるよう配慮した。学習会のテーマや目的は以下のとおりである(表1)。

表1 学習会の内容

	学習会のテーマ	目的
第1回	距離感のルールって知っていますか？ ～プライバシーとパーソナルスペース～	人との距離が近いことを意識させる。
第2回	あいだをとる「きまり」 「あいだ」の取り方	人との距離感を具体的に知り、日常生活に役立てる。
第3回	「あいだ」の取り方 「お・す・し」で自分を守ろう	「あいだ」の取り方を振り返りながら、自分の身の守り方を知る。

第1回「距離感のルールを知っていますか？～プライバシーとパーソナルスペース～」では、人との距離が近いとはどういうことなのか、距離が近いとき相手はどう思っているか、プライバシーとパーソナルスペースとは何か、人と関わるときどんなルールがあるかなどパワーポイントを使って説明した。実際に寄宿舎で生活する中での様々な場面を想定して、友達との距離を体感できるようにロールプレイや距離感のルールが守れないときや、相手が近づき過ぎているときにはどうすれば良いかを説明した。子どもたちは身を乗り出してパワーポイントに見入っていた（図1）。「距離感」や「パーソナルスペース」という言葉は学校でも聞いたことがあったようだが、具体的にどういうことかは分からなかったのでよく分かったという言葉も聞かれた。

第2回「あいだを取る『きまり』・『あいだ』の取り方」では、寄宿舎生活でよくある場面（あいさつをするとき・手洗い場での並び方・パートナーとの並び方・友達の誘い方・本を見せてもらうときの言葉の掛け方）での友達や指導員との「あいだ」の取り方を、第1回の距離感のルールの復習も含めてクイズ方式で行った。場面ごとに子どもたち一人一人に聞きながら進め、ほとんどの子どもが正しく答えられていた。実際に「あいだ」を空けて座ったり整列したりして、具体的な距離感を学ぶことができていた（図2）。しかし日常生活で同じようにできているかの問い掛けには、自分たちができていないことも自覚はしているようだった。

第3回「『あいだ』の取り方『お・す・し』で自分を守ろう」では、もし「あいだ（距離感の目安として腕一本分）」を超えてきた人がいたらあなたはどうするかを一人一人に聞いた。また「あいだ」を超えて体に触れ、嫌なことをしてくる人がいたときの合言葉「お・す・し（お：大きな声で「やめて」と言う、す：すぐに離れる、し：知らせる）」を説明し、実際に「お・す・し」を使って身近な人や知っている人、知らない人の場合などでロールプレイを行った（図3）。「お・す・し」は今まで学校でも学習してきたおり、単語としては頭に入っているが、実際に指導員が不審者役となりロールプレイをしてみると、ほとんどの子どもが大きな声で「やめて」と言うことが難しかった。次にいろいろなタイプの人物の絵を見せ、不審者はどの人だと思えるかを一人一人に聞いていくと、サングラスをして明らかに怪しい人物を指さす子どももいた。しかし、不審者はどんな人でもあり得ること、暗い場所に限らず、明るく人が多い所で出会うこともあることや、自分の身を守るために「お・す・し」を使うことを話した。



った。子どもたちそれぞれが自分なりに人との距離が近いとはどういうことなのか、自分が普段友達や指導員と関わるときに近づき過ぎることがある、ということを理解できたようだった。

しかし、子どもたちの理解度や発達段階にも違いがあり、実際に日常生活の具体的な場面で、今回の学習会を生かしたコミュニケーション力をもった行動がとれるのは難しい様子だった。そこでより主体的・対話的な取組の必要性が課題となった。

(イ)「距離感」の振り返り会

a 取組の内容

振り返り会では、より主体的・対話的な取組になるように10/28(木)～11/28(木)の一か月間、毎週月曜日から木曜日の自習時間に振り返りの時間を設け、振り返りシートを用いて記入するようにした。対象者は年齢や発達段階を考慮し、A、Bを取り上げる。

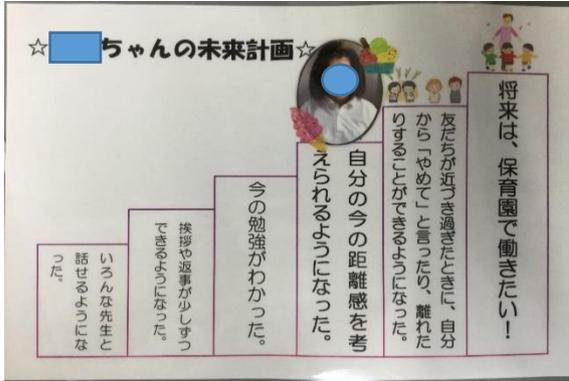
Aは、高等部2年生である。性の支援の学習会後から寄宿舎では距離を意識している様子が見えしたが、学校では好きな先生に抱きついたりしていた。また異性に興味があり、異性の友達に関わってくると受け入れてしまうところがある。

Bは、高等部1年生である。好きな友達や先生に対してはスキンシップなど、かなり距離が近い関わり方をしている。

振り返り会の日程と内容（一部）を以下の表で紹介する。

表2 振り返り会の内容や取組の様子

日程	振り返り会の内容	取組の様子
10/28 ～ 10/31	<p>○振り返りシートの説明と記入(図4)</p> <p>○性の支援の学習後からなぜ振り返りをするようになったのか、なぜ距離が近づき過ぎることが良くないのか話をした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・A、Bとも振り返りシートの質問の意味が分からず、また自分の振り返りをするのも難しかったので、個々に説明しながら進めた。 ・Aは寄宿舎では自分で意識しているが、テンションが上がると学校で好きな先生や友達に抱きついたり体を触ったりすることがあると話す。 ・Bは、距離感については抵抗があるようだった。
11/5 ～ 11/7	<p>※Aは現場実習(11/15まで)で不在なのでBのみ振り返りを行う。</p> <p>○振り返りシートの記入、説明(図5)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パーソナルスペースの距離の目安として腕一本分と説明したため、「腕一本分」＝「触れてはいけない」と思っていたようだった。しかし、具体的に説明をす

	<p>○距離感について、性の支援の学習会の内容を復習しながら、卒業後を踏まえた話をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「距離感の腕一本分」は「触れてはいけない」ということではない。 ・「距離感」はそのときの状況次第で範囲が変化し、相手との親密度や人によっても違う。 ・社会は学校や寄宿舎のように、自分を理解し接してくれる人ばかりではない。 ・今寄宿舎にいるうちに、状況に応じた距離感の取り方や毎日の振り返りで自分の行動を思い返し、自分で考えて行動できる力を身に付けてほしい。 	<p>ると理解できたようだった。</p>  <p>図5 振り返りの様子</p>
<p>11/11 ～ 11/14</p>	<p>○今まで振り返りをできて、どう思っているかを聞く。</p> <p>○振り返りの会が本人たちの楽しみとなるような時間にしたいと改めて伝えた。今回は「自分と相手の違いを知ろう」というテーマで雑談をしながら、自分の思いのみで相手に関わるのではなく相手のことを考えた思いやりのある行動ができる優しさをもって欲しいことや、自分も相手もうれしい関わり方などについても話をした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Bは「ちょっと楽しい」と話す。振り返りの会は友達や指導員との特別な時間だと感じているようだった。 ・体格の違いや、好きな食べ物、好きなアーティストなどを指導員も含めて聞き合った。普段口数の少ないBも、楽しそうに話をしていた。友達に話しかけるときも、一人一人感じ方が違うので、友達の名前を呼んで、目を見て優しく話し掛けると相手もうれしいと思うよと話をすると、はにかみながらうなずいていた。
<p>11/20 ・ 11/21</p>	<p>○Aの現場実習が終わったので、A、Bとで振り返りを行う。</p> <p>※11/18、19は行事などの関係で、振り返りは行っていない。</p> <p>○A、Bに「未来計画」の提示。(図6)</p>  <p>図6 未来計画</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・A、Bは自分だけの未来計画をととても喜び、自室に貼りたいと話があり、自室に貼る。Aは自室以外でも見ることができるように、未来計画を自分のノートに書き写していた。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <p>「未来計画」の提示</p> <p>3週間、毎日振り返りを行って来て、自分の現在の成長過程や明確な目標を視覚的に確認ができるように、「階段式未来計画」を提示した。</p> </div>

11/25 ～	○A、Bで振り返りを行う。 ○「ようこそ先輩」の話題を上げる。	・Aは一度書き終えたシートをもう一度丁寧に見直していた。
11/28	卒業生の話から「人間関係が大変」と聞き、今までの距離感の勉強や毎日の振り返りが、最終的に将来の職場での人間関係づくりにもつながっていることを話した。 ○振り返りのまとめとして、今まで話してきた内容を簡単に説明した。最近のA、Bの様子と未来計画を照らし合わせ、今後自分が気を付けていくことを確認した。	・Bはシートを早く書き終える。時々本人の振り返りと実際の行動の相違が見られたので、確認が必要だった。 ・未来計画の階段が一段上がったことをA、Bとも、とても喜んでいた。 ・Aは振り返りが終わることをとても残念がり、「私のために距離感の話をしてくれてありがとうございます。これからも意識していきたい」と話があった。

b 成果と課題

毎日振り返りの時間を設けたことで、寄宿舎の中だけでなく、学校の教師や友達、異性との距離感など、より具体的に主体的・対話的な取組にすることができた。人とのコミュニケーションを場面によって考え、自分がどのような行動をとったら良いのかを話す中で、理解し、次の行動を意識できるようになってきた。「未来計画」の階段を上がることで自分の意識や行動の変化を実感し、それを指導員と共有して一緒に喜び合えたことは取組の成果につながったと思う。

今回の取組で、「距離感」は子どもによって感じ方が様々であり、それを教えることの難しさを感じた。

A、Bとも、取組の後も「自分の気持ちを表現する力」や「相手の気持ちを思いやる力」をもった上での距離感とまではなかなかならず、他の子どもたちについても同様だと感じている。今後はさらに思春期の子ども心に寄り添い、子どもたちが甘えたい気持ちを言葉で伝えることで心の安定につながられるような支援の工夫が必要だと感じた。またプライベートゾーンへの羞恥心や、望まないボディタッチへの不快な気持ちを理解し、他者との距離感について意識をもてるように継続した支援をしていきたい。

ウ まとめ

本校の中学部、高等部の性に関する教育では、思春期のプライベートゾーンのルールとマナーをはじめとして、自分の身体の変化を理解し、他者を思いやる心を育て、他者との距離感、適切な関わり方、男女の距離感、性被害の防止などを指導計画としてあげている。そこで寄宿舎でも子どもの思春期の心と身体の成長と発達を支えていくように連携して取り組んでいきたいと考えている。

すももホームでは、登校前のホーム全員が集まるときに、指導員から意識的に「休んでいる友達の係の仕事をしてくれた」など、ささいなことでも子どもの頑張ったことを話し、皆の前で「ありがとう」と感謝を伝えるようにしている。周りに褒められ、感謝されることで意欲や自信につながり、また「すごいね」「がんばったね」などお互いを認め合う良い機会にもなっている。

性の支援で距離感についての学習を行ったことで、子どもたちの中に「自分」と「他者」の存在を意識し、相手を認める心が育ち、友達や指導員との思いやりをもった関わり方が身に付きつつあると感じている。これは毎日の関わりの積み重ねの中で「目に見える距離感」から、相手を思いやる「心と心の

つながり」に変化してきているのではないだろうか。また、振り返りを行った子どもについても「未来計画」を用いることで、自分が今どうすれば次の段階に上がり目標に近づけるのかを視覚的に確認できるようになっている。そのことが成長する喜びや意欲につながっているように思う。

今後さらに寄宿舎の集団生活の中で、今回の取組を継続、発展させていきたいと考えている。

3 おわりに

今年度も昨年度に引き続き「主体的・対話的で深い関わりの視点を生かした仲間づくり」を目指し、それぞれのホームが課題を挙げて取り組んだ。

ほとホームでは、「だいたい!!夜のティータイム」と称して、自分で伝える力や相談する力を育てる取組を行った。子ども自身で考え意見を出し合える雰囲気づくりに努め、グループを5名前後にしたことで、安心して発言できる場となった。「デートプランをつくろう」は、その安心できる場で夢を膨らませ「わくわく」しながらプランを立て、仲間と意見を出し合えたことが卒業後の生活をイメージできる取組となった。年間を通して肩に力を入れることなく「だいたい!!夜のティータイム」を行ったことで、困ったときの解決方法や相談の仕方を知ることができ、日々の生活の中でも困ったときには指導員や友達に相談できる子どもが増えてきている。

つばめホームでは、高等部2年生Aくんへの「コミュニケーション力」と「金銭の管理力」の向上を目指し支援した。「目指せ！単独行動！！」の実践では、Aくんの思いや言動を肯定的に捉えることを大切に、視覚支援やロールプレイを取り入れ行った。「お金の使い方を学ぼう！」の実践では、困ったときに指導員に相談できる環境や雰囲気づくりに配慮し小さなことでも褒めることを心掛け取り組んだ。おもちゃのお金を使っておやつの購入をしたり、アルバイトの疑似体験など楽しい活動を取り入れたことで、金銭管理力だけではなくコミュニケーション力の向上にもつなげることができた。

すももホームでは、「助け合い、共に学び、お互いを大切に思う気持ちを育む」ことを目標に「距離感」について実践した。主体的・対話的な学びとなるよう、少人数での学習の場を設定し、つばめホームと同様に視覚支援やロールプレイも取り入れた。「距離感」の振り返りでは、自分の「未来計画」を指導員と一緒に作成することで、自分自身を知り卒業後をイメージできる良い機会となった。また、個別の振り返りを行うことはA、Bが特別感をもち主体的に取り組むきっかけとなった。そしてそれが「距離感」についての意識だけでなく、コミュニケーション力の向上にもつながることとなっている。

寄宿舎での3ホームの事例で共通しているのは、子どもたちがどの取組もその場を「楽しみにしていること」や「楽しんでいること」である。子どもたちにとって生活の場での取組は「気持ちを受け止めてもらえる、認めてもらえる」といった寄宿舎への信頼と安心感があるからこそ成果につながっていくと考える。そのことを大切にしながら、昨年度に引き続き「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした仲間づくり」を研究テーマとし取り組んだことで、子どもたちは「必要なときは周りに助け（ヘルプ）を求める」「しんどさや危険を感じたときの対応の仕方」を知り、身に付けることにつながった。

来年度に向けて、それが日々の生活で活用できるかが課題となってくる。そのためには、子どもたちの生活1こま1こまでのサインを見逃さず、「生活の場」だからこそできる子どもの思いや悩みに寄り添った支援をしていくことが必要である。

Ⅶ 本年度の研究のまとめ

本年度は、「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした取組」をテーマに取り組んだ最終年（3年次／3年計画）となる。

今年度はまず、研究部を中心に学習過程分析表の改善に取り組んだ。

昨年度の実践集録で出された意見をもとに、学習過程分析表の「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の各項目について見直すとともに、授業後の分析・評価に活用できるよう「注目してほしい学習活動」「注目してほしい児童生徒の評価」の欄を新たに設けた。

6月に開催した第1回校内研修会では、外部講師である群馬大学教育学部霜田浩信教授より、どのように学習過程分析表を活用するのか、また研究・公開授業の事後協議の在り方について指導・助言をいただいた。

これを受けて全校で統一した事後協議の進め方を設定し、各学部の研究・公開授業後に実施した。

こうした取組を通して、学習過程分析表にある「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の各項目が、授業作りや改善の際に役立ったとの報告が各学部より出された。

しかし、各項目の改善はもちろんのこと、特に「深い学び」の視点をどのように授業者がとらえ学習活動を設定すべきか、また発達年齢や支援度との関連からどのように整理すべきか等について引き続き検討していく必要性が見られた。

事後協議では児童生徒の評価について、学習過程分析表等を活用しながら確認することができたとの意見が見られた。

この一方で、時間的制約がある中で、どのような内容を取り上げ、どのように協議を進めるべきか、授業の目標達成度や今後の授業改善に効果的につながる在り方を引き続き検討していく必要性も見られた。

寄宿舎からは、子どもたちがその場を「楽しみしている」、「楽しんでいること」が3ホーム共通の取組ポイントであると報告された。

学校とは異なる「生活の場」であっても、日々の活動を「主体的・対話的で深い学びの視点」をもって展開していくことが、信頼と安心感につながり、寄宿舎生活をさらに充実したものとする大切な要素となっていることは、今後の支援でも必要になっていくと思われる。

以上、各学部・寄宿舎からの報告を受け、新学習指導要領に沿った取組がスタートする来年度からの実践につながるよう継続した取組を進めつつ、明らかになった課題について検討を進めていきたい。

令和2（2020）年3月 発行

高知県立日高特別支援学校

〒781-2151 高知県高岡郡日高村下分 60 番地

T E L 0889 - 24 - 5306

F A X 0889 - 24 - 5308

E-mail hidaka-s@kochinet.ed.jp

<http://www.kochinet.ed.jp/hidaka-s/>